

磯の森貝塚 広江・浜遺跡2 新熊野山遺跡

倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告 第17集

倉敷埋蔵文化財センター

2019.3

序

倉敷市の南東部を占める児島地域は、中世以前はその名の示すとおり瀬戸内海に浮かぶ島でした。江戸時代以降の干拓によって、現在のように陸続きとなりましたが、古くは古事記・日本書紀にも記載され、国土を形成する重要な土地と認識されていたようです。また、旧石器時代の鷺羽山遺跡に始まり、近世の下津井城跡に至るまで各時代の多彩な遺跡が残されていることからも、児島が豊かな歴史を持つ地域であることがわかります。

本報告書には、児島北岸の海岸段丘縁辺に形成された磯の森貝塚と、同じく児島西岸の砂浜に立地する広江・浜遺跡、さらに児島北岸から少し内陸に入った郷内盆地に位置する新熊野山遺跡の発掘調査成果を収録いたしました。

磯の森貝塚では、無届の市道改修工事に伴って緊急発掘調査が行われました。遺跡が破壊され、十分な調査を行えなかつたことは残念ですが、縄文時代前期の土器・石器がまとまって出土し、また、貝層の規模を部分的にでも把握できたことは貴重な成果となりました。

広江・浜遺跡は、体育館の耐震化対策工事に伴って発掘調査を行いました。これまでにも校舎の建設などに伴って発掘調査が行われ、古墳時代の製塙土器や縄文土器が見つかっています。今回報告する調査はあまり広い範囲ではありませんでしたが、製塙に関すると思われる堅穴状遺構などが見つかり、貴重な資料を追加することができました。

新熊野山遺跡では、中世段階における大規模な造成工事の痕跡や、地鎮遺構が確認されました。児島では五流山伏などによる熊野信仰が盛んでしたが、その様相を考古学的に推し量ることができる興味深い成果と言えます。

本書が、倉敷市における埋蔵文化財の保護・保存に活用されますとともに、学術研究あるいは郷土史研究の資料として、いささかなりとも役立てば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査をはじめ、報告書の作成にあたりまして、ご指導ご協力を賜りました関係各位に対しまして衷心より厚くお礼申し上げます。

平成31年3月31日

倉敷市教育委員会
教育長 井上正義

例　言

1 本書は、昭和57年度に実施した磯の森貝塚の緊急発掘調査、ならびに平成22年度に実施した広江・浜遺跡と新熊野山遺跡の発掘調査の報告書である。

2 各遺跡の調査内容は以下のとおりである。

【磯の森貝塚】

◎所在地 倉敷市粒江1124番1外 ◎調査期間 昭和57年8月20日～8月25日
◎担当者 倉敷市教育委員会文化課主事 脇本裕 同学芸員 福本明

【広江・浜遺跡】

◎所在地 倉敷市広江一丁目9番1 ◎調査期間 平成22年8月10日～9月7日
◎担当者 倉敷埋蔵文化財センター主任 小野雅明 同学芸員 藤原好二

【新熊野山遺跡】

◎所在地 倉敷市林683番 ◎調査期間 平成23年3月4日～3月18日
◎担当者 倉敷埋蔵文化財センター主任 小野雅明 同学芸員 藤原好二

3 本書の執筆は、第1章・第2章を小野、第3章を藤原が主に担当し、各章の第1節と石器に関する部分の執筆および全体の編集は藤原が行った。また、報告書の作成にあたっては倉敷埋蔵文化財センター嘱託員 内田智美、那須玲子、日下美樹の協力を得た。

4 発掘調査における遺構の写真撮影は各担当者が行い、遺物の写真撮影は藤原が行った。

5 本書第1・2章の挿図に使用した高度値は海拔高であり、第3章の挿図に使用した高度値は仮水準点からの値である。方位はいずれも磁北である。

6 本書第2・15・38図に使用した地形図は、国土地理院発行の1/25,000地形図を複製、加筆したものである。

7 本書に関係する出土遺物、実測図、写真等はすべて倉敷埋蔵文化財センターで保管している。

目 次

序

第1章 磯の森貝塚	1
第1節 位置と環境	1
第2節 緊急調査に至る経緯と経過	3
第3節 緊急調査の概要	4
1 調査区の概要	4
2 遺 物	5
第4節 まとめにかえて	14
出土遺物観察表	17
第2章 広江・浜遺跡	21
第1節 位置と環境	21
第2節 調査に至る経緯と経過	23
第3節 調査の概要	25
1 調査区の概要	25
2 遺 構	26
3 遺 物	29
第4節 まとめにかえて	39
出土遺物観察表	41
第3章 新熊野山遺跡	47
第1節 位置と環境	47
第2節 調査に至る経緯と経過	49
第3節 調査の概要	51
1 調査区の概要	51
2 遺構と遺物	52
第4節 まとめにかえて	58
出土遺物観察表	60

挿図目次

第1図 遺跡の位置	1	第26図 南区包含層出土遺物4	32
第2図 周辺の遺跡	2	第27図 南区包含層出土遺物5	32
第3図 調査区位置図	3	第28図 南区包含層出土遺物6	33
第4図 貝層断面図	4	第29図 北区竪穴状造構出土遺物1	34
第5図 土器1	6	第30図 北区竪穴状造構出土遺物2	35
第6図 土器2	7	第31図 北区竪穴状造構出土遺物3	35
第7図 烏浜貝塚出土資料	8	第32図 北区包含層出土遺物1	36
第8図 土器3	9	第33図 北区包含層出土遺物2	37
第9図 石器1	10	第34図 北区包含層出土遺物3	38
第10図 石器2	11	第35図 北区包含層出土遺物4	39
第11図 石器3	12	第36図 北区造成土ほか出土遺物	39
第12図 骨角器	13	第37図 遺跡の位置	47
第13図 装身具	14	第38図 周辺の遺跡	48
第14図 遺跡の位置	21	第39図 調査地位置図	49
第15図 周辺の遺跡	22	第40図 土層模式図	51
第16図 調査区全体図	24	第41図 造構配置図	51
第17図 南区平面図	26	第42図 ピット7・12・13出土遺物	52
第18図 南区包含層断面図	26	第43図 ピット15～17実測図	53
第19図 北区平面図・西壁断面図	27	第44図 ピット15・16出土土器	53
第20図 北区北壁断面図	28	第45図 ピット26実測図	54
第21図 北区南壁断面図	28	第46図 土坑1～4断面図	54
第22図 北区造構断面図	28	第47図 土坑1・2出土遺物	55
第23図 南区包含層出土遺物1	29	第48図 土坑3出土遺物	55
第24図 南区包含層出土遺物2	30	第49図 造成土(近世)中の出土遺物	57
第25図 南区包含層出土遺物3	31	第50図 造成土(中世)中の出土遺物	57

図版目次

- | | |
|--------------------|-----------------------|
| 図版 1 磯の森貝塚 | 図版 10 広江・浜遺跡 出土遺物（1） |
| 1 調査風景（北から） | 図版 11 広江・浜遺跡 出土遺物（2） |
| 2 貝層断面（南から） | 図版 12 広江・浜遺跡 出土遺物（3） |
| 3 貝層断面（北から） | 図版 13 新熊野山遺跡 |
| 図版 2 磯の森貝塚 | 1 調査風景（東から） |
| 1 貝層断面（南東から） | 2 ピット1～3（南から） |
| 2 貝層拡大 | 3 ピット15・16土器出土状況（南から） |
| 3 土器出土状況 | 図版 14 新熊野山遺跡 |
| 図版 3 磯の森貝塚 出土遺物（1） | 1 ピット26 |
| 図版 4 磯の森貝塚 出土遺物（2） | 2 土坑1（東から） |
| 図版 5 磯の森貝塚 出土遺物（3） | 3 土坑2断面（東から） |
| 図版 6 磯の森貝塚 出土遺物（4） | 図版 15 新熊野山遺跡 |
| 図版 7 広江・浜遺跡 南区 | 1 土坑3遺物出土状況 |
| 1 包含層断面 | 2 土坑3断面 |
| 2 作業風景 | 3 調査区全景（西から） |
| 3 完掘状況 | 図版 16 新熊野山遺跡 出土遺物（1） |
| 図版 8 広江・浜遺跡 北区 | 図版 17 新熊野山遺跡 出土遺物（2） |
| 1 堅穴状遺構断面 | 図版 18 新熊野山遺跡 出土遺物（3） |
| 2 堅穴状遺構（東から） | |
| 3 堅穴状遺構（北東から） | |
| 図版 9 広江・浜遺跡 北区 | |
| 1 南壁断面 | |
| 2 西壁断面 | |
| 3 北壁断面 | |

第1章 磯の森貝塚

第1節 位置と環境

磯の森貝塚の所在する粒江地区は、昭和25年（1950）まで児島郡粒江村と呼ばれていた。同年に旧倉敷市と合併しているのは、児島の南岸を中心があるうえに、間に児島郡内村を挟む児島市ではなく、より近い倉敷市との合併がまず選択されたのである。さらに昭和42年（1967）の倉敷市・玉島市・児島市の旧三市の合併を経て、今日にいたっている^{①)}。

地形的には中世までは島として独立していた児島の北岸にあたり、そのことを示す地名として、「粒江」をはじめ、「舟津」・「中津」・「平江」などが認められる。南には種松山山塊（標高258m）がそびえ、集落はその北裾に散在している。さらに北に広がる水田地帯は、近世以降の干拓によって形成されたものであるが、近年は宅地化が進んでいる。また、水田地帯を東流する倉敷川は、「汐入川」・「舟入川」とも呼ばれ、児島湾が締め切られる前までは、倉敷と海を結ぶ運河の役割を果たしていた。

児島には旧石器時代の遺跡として著名な鷺羽山遺跡^{②)}が所在するが、南岸に位置しており、他の同時代の遺跡の多くも同様である。児島の北岸にあたる粒江地区近在に著名な旧石器時代の遺跡はないが、粒江から南に延びる谷をさかのぼった山中にある一尺谷上池遺跡・一尺谷上池東遺跡^{③)}からはナイフ形石器や有茎尖頭器が採取されている。

縄文時代には瀬戸内海が誕生し、児島の北側にも海水が入ってくる。さらに粒江付近には高梁川が中国山地から運んでくる土砂によって、次第に遠浅の海が形成されたと考えられている。市内に多くの貝塚は、この遠浅の海にはぐくまれた海産資源に基づくものである。粒江地区には、今回報告する磯の森貝塚の他にも船元貝塚^{④)}・舟津原貝塚が所在している。磯の森貝塚が縄文前期を主体とする貝塚^{⑤)}であるのに対し、船元貝塚は前期～中期、舟津原貝塚は後期～晩期にかけて形成されたものである。磯の森貝塚・船元貝塚は大正時代以降数度にわたって調査され、多くの土器・石器あるいは埋葬人骨なども出土している。出土した土器はそれぞれ縄文前期および中期の指標土器となっており、名残遺跡としても重要である。また、舟津原貝塚^{⑥)}では瀬戸中央自動車道建設工事に伴って発掘調査が行われ、谷部から縄文時代晩期の貯蔵穴3基が確認されている。なお、磯の森貝塚・船元貝塚は市の史跡に指定されている。

弥生時代の遺跡としては、粒江地区背後にそびえる種松山山塊に中期の遺跡がいくつか知られている。種松山山頂からやや北に下った山腹からは、銅鐸^{⑦)}が発見され、現在、倉敷考古館で保管されて

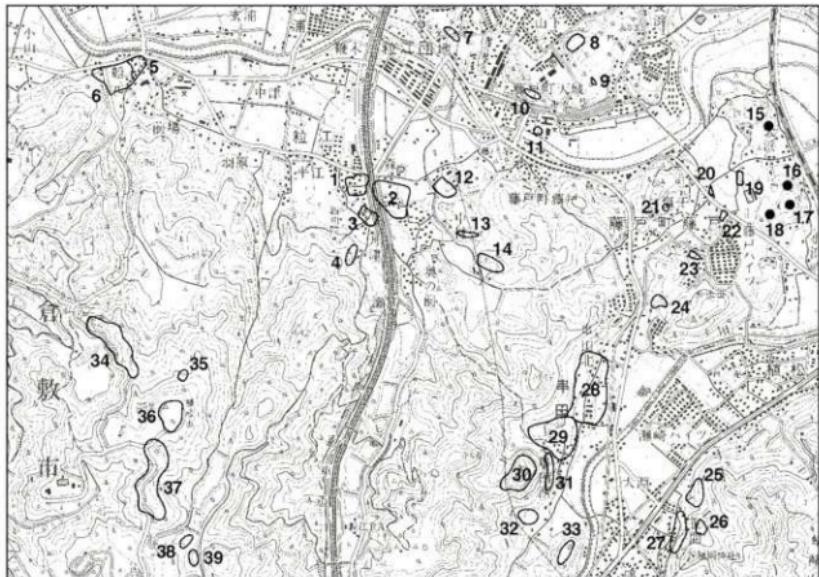


第1図 遺跡の位置

いる。児島半島では他にも由加山から銅劍5本⁽⁹⁾が、広江・浜遺跡から銅戈⁽⁹⁾の破片や銅鑄⁽¹⁰⁾が出土するなどしておる、児島が内海航路における要衝であったことがうかがえる⁽¹¹⁾。また、銅鐸の埋納に係わった人々の営んだ遺跡としては、種松山山頂遺跡や真菰谷遺跡などが挙げられる。真菰谷遺跡にはハイガイ、カキ等を含む貝塚と住居跡などが確認されており、鹿角製釣針も出土している⁽¹²⁾。

古墳時代になると、粒江地区の東に隣接する藤戸地区の低丘陵上に寺崎山古墳や経寺山1号墳等の前期古墳が築かれる⁽¹³⁾。寺崎山古墳は一辺22m程の方墳で、墳頂部には小祠の礎石とみられる5個の平石が置かれている。これらは主体部を構成していた石材と推定される。また、墳裾からは転落した葺石と思われる角礫群とともに壺形土器も検出された。経寺山1号墳は寺崎山古墳の北東山頂に位置しており、やはり一辺15m程の方墳である。葺石が残っていたが、主体部は検出されず、削平されてしまったものと考えられる。これらの古墳は、児島北岸航路を抑えた首長墳と推定されている。

古墳時代後期には、小さな谷単位で横穴式石室墳が築かれている。粒江の谷にも、磂の森貝塚の南



1 磂の森貝塚	2 舟津原貝塚	3 舟津原西方貝塚	4 中塚古墳群	5 船元貝塚
6 城が端遺跡	7 山の花遺跡	8 天城陣屋跡	9 広田山貝塚	10 寺崎山古墳
10 天城池田家近世墓群	11 追留山古墳	11 経ヶ島中世墓	12 長谷貝塚	13 中村貝塚
14 犬山貝塚	15 大辻山遺跡	16 経寺山2号墳	17 経寺山1号墳	18 寺崎山古墳
19 ~ 23 藤戸東貝塚群	24 大坪遺跡	25 大正池遺跡	26 圏地池遺跡	27 笹間遺跡
28 柿ノ木遺跡	29 大坪遺跡	30 鼻高山城跡	31 城山東麓中世墓群	
32 牛神谷池前遺跡	33 戸津田北古墳群	34 真菰谷遺跡	35 種松山銅鐸出土地	
36 種松山山頂遺跡	37 種松山南遺跡	38 一尺谷上池遺跡	39 一尺谷上池東遺跡	

第2図 周辺の遺跡 (S=1/25,000)

方、山裾近くに中塚古墳群が所在している。1号墳は長さ5.6m程の横穴式石室を備えた円墳である。2・3号は残存状況が良くないが、1号墳よりやや小規模な横穴式石室墳と推定される。また、舟津原貝塚¹⁴⁾や船元貝塚では古墳時代の製塩土器も出土していることから、粒江地区の海岸で製塩が行われており、これらの後期古墳が製塩に関係した人々の墳墓であったことを推定させる。藤戸の経寺山2号墳も同様の横穴式石室墳であったと推定され、まとまった数の須恵器を出土している¹⁵⁾。

古代・中世の様子はよく分かっていないが、この付近は寿永3年(1185)に行われた源平藤戸の戦いの舞台となっており、関連史跡が多く残されている¹⁶⁾。佐々木盛綱に浅瀬を教えた浦の男を供養したと伝えられる経ヶ島、平家の本陣があったとされる篠地藏等である。また、児島側に陣取った平氏を攻めるため源氏側は幅約500mの海峡を馬で渡っており、すでにこの付近の浅海化がかなり進んでいたことがわかる。粒江の長谷貝塚、中村貝塚、殿山貝塚、そして藤戸を中心として分布する藤戸東貝塚群などは、浅海化の進んだ海から得られたハイガイなどを主体とする中世の貝塚である。

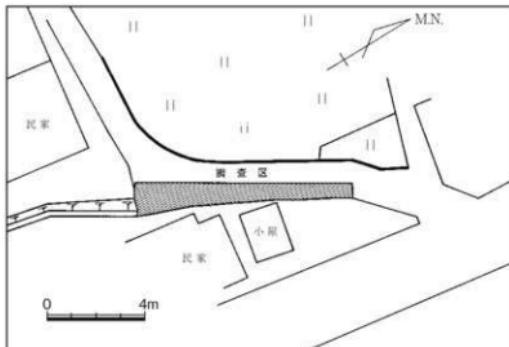
江戸時代には天城に陣屋が置かれ、小規模ながら陣屋町が形成されている¹⁷⁾。天城に陣屋を構えたのは岡山藩の家老である天城池田氏で、天城が岡山から児島に入る交通の要衝であったことによる。また、天城池田家墓所も陣屋町の背後の桜山に営まれている。

第2節 緊急調査に至る経緯と経過

1982年(昭和57)8月19日午後4時頃、市民から磯の森貝塚の一部が市道改修工事により破壊され、多量の貝殻等が出土しているとの情報が、その当時、埋蔵文化財の担当部署であった倉敷市教育委員会文化課に寄せられた。このため、同課の職員が現地に行き、工事の中止を申し入れるとともに、散乱していた遺物の一部を回収した。翌日、現地において、倉敷市教育委員会文化課、倉敷市土木管理課、岡山県教育委員会の担当職員及び施工業者により協議を行った結果、工事を一時中止し、倉敷市教育委員会が緊急調査を実施することになった。

調査の契機となった市道改修工事は、幅2.5mの市道の路肩が崩れたために行われたもので、南から北へ向かって下る坂道の東側擁壁を再構築するのが目的であった。まさにこの場所は、磯の森貝塚の東端にあたる部分である。この工事で長さ18m、幅1~2m、深さ1.2~2.0mにわたって掘削されており、土留めの鋼矢板を打ち込んだ状態であった。このため、調査は現在掘削している範囲より広げず、露出している貝層断面の精査及び観察が中心となった。そして、工事により排出された貝を含む土壤についてもできるだけ回収した。

この調査は、1982年8月20日から8月25日まで実施された。



第3図 調査区位置図 (S=1/200)

第3節 緊急調査の概要

1 調査区の概要

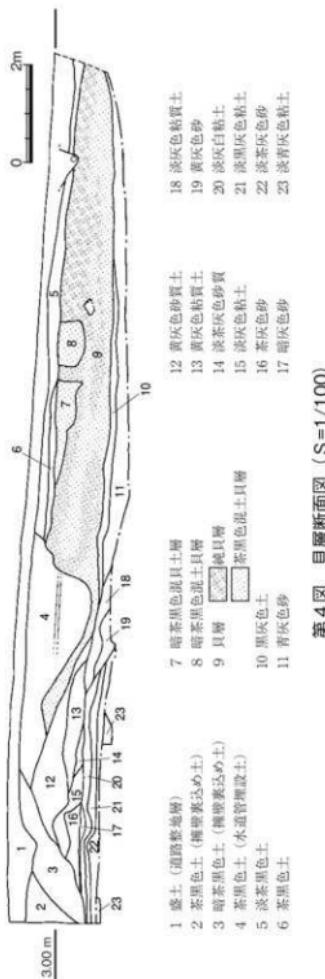
前節のとおり今回の調査は、磯の森貝塚の東端部分をカットした南北セクションの観察、記録および出土遺物の採集が目的となった。断面観察によると、現地表下約50cmの高さのところで残存する貝層の上面がみられる。貝層は調査区南端から始まり、北へ約15mにわたって確認された。調査区北端では、貝層が若干薄くなるものの、さらに北へ続くと考えられる。

貝層南部は、以前の水道管埋設工事や道路擁壁工事などによって長さ約7m、深さ約1.3mにわたって破壊を受けている。また、1~2mの幅で掘削された区域の底断面を見ると、調査区北端では東側も以前の道路擁壁工事により破壊されているのが確認された。

貝層は、調査区南側では粘質土と砂質土が互層状に堆積する斜面(12層~23層)の上に堆積している。貝層の下面は北に行くに従って傾斜が緩やかになり、調査区北端では逆に上がっている。このことから、貝層は窪地の中に堆積している可能性もある。貝層の厚さは、最も厚いところで約1.2mを測り、貝殻の密度により、混貝土層、混貝土層といった大まかな分層ができる。貝の種類については、表面観察によると主要種はマガキで、南部の下層ではハイガイが比較的多く含まれている。

貝層直下には厚さ15cmの黒灰色土(10層)が堆積している。その下には青灰色砂層(11層)が存在し、この層の上面で土器片等の少量の遺物が確認された。

遺構については、断面観察のみのため限られた情報しか得られないが、貝層上面から掘り込まれた落ち込みが近接して2か所みられる。南側の落ち込み(7層)は複数の遺構が重なり合ったもの可能性もあるが、底は北に向かって傾斜しており、南北2.1m、深さは最大で1.5mを測る。埋土は概ね暗茶黒色の混貝土層である。北側の落ち込み(8層)は土壤状で、南北0.9m、深さは約0.6m測る。埋土は暗茶褐色の混貝土層



第4図 貝層断面図 (S=1/100)

で、底の部分は破碎されたような貝殻がみられる。

2 遺物

今回の調査では工事によって貝層が破壊されて出た排土と破壊断面からの落下土、断面清掃時に遊離した遺物を採集した。従って、遺物の層位的な位置情報はほとんどないと言ってもよい。出土遺物には土器、石器、骨角貝製品といった人工遺物や各種貝殻（貝殻）、イノシシ、シカ、タヌキなどの哺乳類の骨やマダライ、クロダイ、スズキ、エイ類などの魚類の骨等を採集した。それらの総量は整理用コンテナ50箱分である。これらの遺物を報告するにあたり、本来なら1冊の報告書にまとめるべきであるが、諸般の事情により、貝類、獣類、魚類などの動物遺体存の分析については別の機会に譲り、今回は人工遺物に限って報告を行う。

縄文土器（第5～7図）

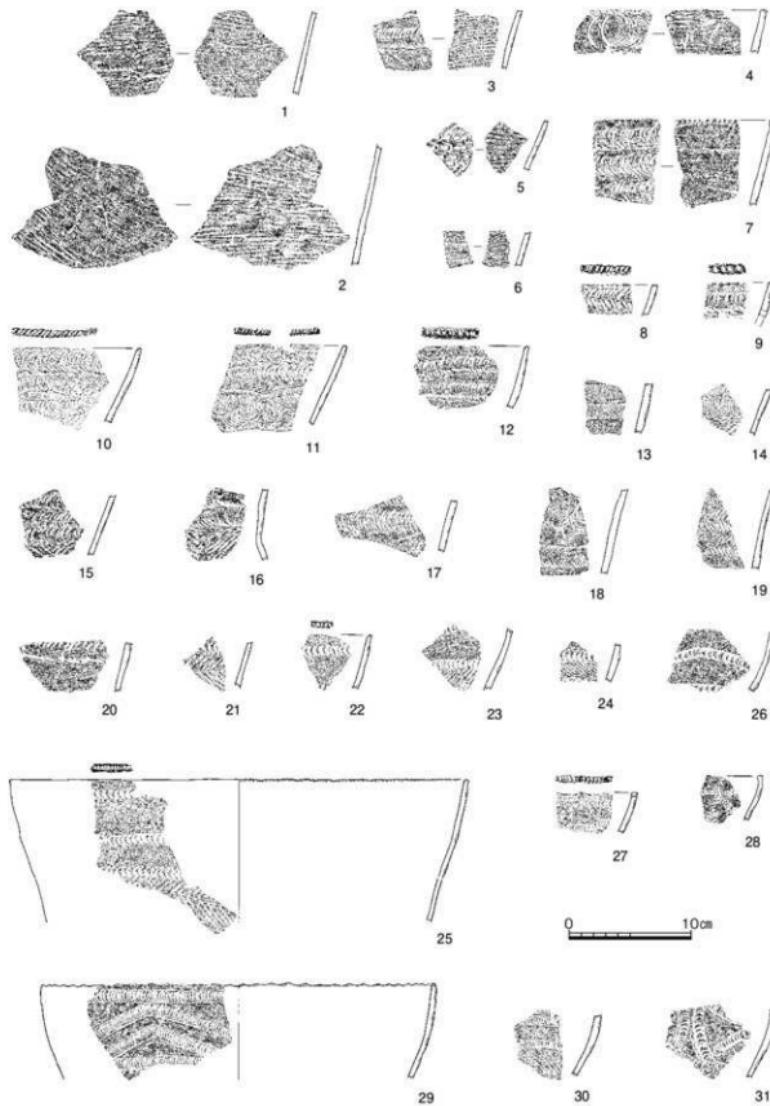
出土した土器は小片ばかりで、全体的な特徴を捉えられるものは皆無であるが、1951年に刊行された池田次郎氏と鎌木義昌氏の報告⁽⁹⁾および1982年の中越利夫氏の報告⁽¹⁰⁾を参考にして分類を行った。

1類（第5図1～2）

内外面に条痕調整を施し、ナデ消しを行っていない土器である。1の外面には条痕地にC字形の連続爪形文が浅く施される。条痕の方向は内外面とも横位である。2には文様は認められない。内の条痕は横位、外面の条痕は左上がりである。池田・鎌木報告の「条痕文土器」に含まれると考えられる。同報告では、「条痕文土器」は下層に限られて発見され、特に最下層の砂層に多いとされる。

2類（第5図3～20）

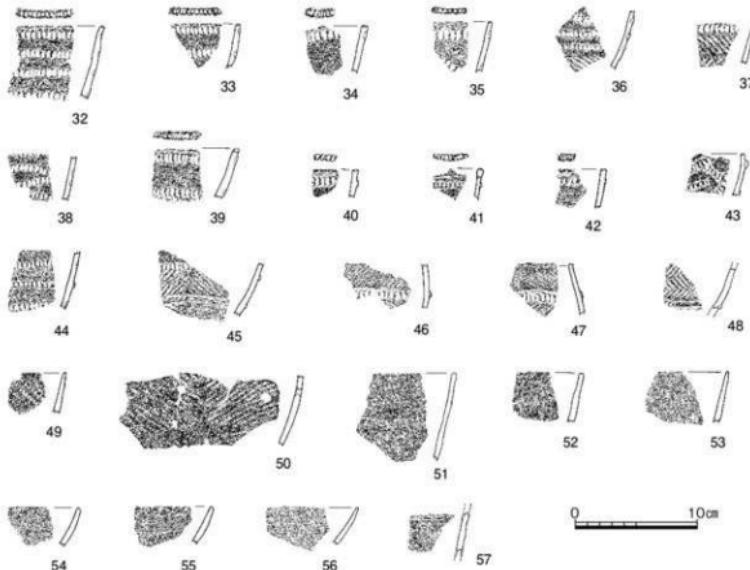
口縁部に連続爪形文を付け、胴部には縄文が施される土器である。爪形の向きが右側に開くC字形を基本としている。3の外面には条痕調整がみられるが、外面はかすかに残る程度である。4・5の内面には軽くナデ消された条痕調整がみられるため2類に含めたが、施文方法や文様構成で他と異なる要素をもつ。4の爪形文は幅2.6cmくらいの大きなもので、左開きの爪形文を連続させ、それと向かい合わせに右開きの爪形文を刺突している。口縁端部の外側角に刻目をもつ点は注目される。5は細い円棒状の工具による刺突文を列点状に4列配し、その上下には斜縄文が付けられているようである。6の連続爪形文は、先端に切込みを入れた原体で施文されていると思われ、爪形文の中央に歫が生じている。内面には条痕調整が残る。7は口縁に平行する連続爪形文を施し、口縁端内側角に刻目をもつ。内面は条痕調整後にナデ消している。10は口縁に平行する連続爪形文を1列施し、その下には、弧をつないだような波形状の連続爪形文を組み合わせて∞字形を繰り返す文様が描かれる。爪形文の幅は前者より後者の方が狭くなっている。文様によって原体を使い分けているようである。口縁端の内側角には斜行する刻目が付く。11も同様の文様構成で、平行する連続爪形文を2列描き、その下に、波形状と山形状（ジグザグ）の連続爪形文を組み合わせた文様帯を配する。口縁端の内側角には刻目が付く。12・18の文様構成は、直線状と波形状あるいは山形状の連続爪形文を配列するものであろう。14～16は口縁部の爪形文区と胴部縄文区の境に刺突文を1列巡らす。16はこの部分で屈曲する。胴部の文様は縦位に展開する羽状縄文である。17の連続爪形文は上下2段を別々に施文して一条の文様としている。内面には条痕がかすかに残る。



第5図 土器1 (S=1/4)

3類(第5図21~31)

口縁部に刺突爪形文を付け、その下に縄文が施される土器である。爪形文の幅は2類のものより狭くなっている。21・22・25の爪形文は弧のカーブが強い形状で、中央部が一番深く刺突されている。斜めに切った半截竹管状工具で施文されたのである。25は口縁端に刻目を付け、口縁に平行する刺突爪形文を3列施文する。その直下は横位展開の羽状縄文となっている。外面にはスヌが付着する。23・24の爪形文は原体を垂直に立てて深く刺突している。23は刺突爪形文を直線的に付け、その下に横位展開の羽状縄文を施文している。26の爪形文は溝状に付けられており、工具の内側(凹面)を器面に当て、押し引きながら施文したと思われる。27・28は小形の刺突爪形文を付ける。27は細かい波状口縁をもつ。爪形文は「く」字状にやや角張った形状で、幅は6mm程度である。28も波状口縁をもつ。刺突爪形文の幅は5mm程度である。胎土は橙色で、口縁部内側と外面に赤色顔料が塗られ、赤褐色を呈する。これ以外にも幅3mmにも満たない極小の爪形文をもつ土器がみられた。この種の土器は特に薄手で、作りの小さなものである。ほとんどが小片で、図化できていない。29~31は爪形文が付けられた後、その両端に平行沈線が施される。29は細かい波状口縁をもつ。口縁部の文様は直線状と山形状の爪形文で構成される。30は口縁部の爪形文区と胴部の縄文区の境部分の資料である。31は爪形文により直線と弧を組み合わせた複雑な文様を描いている。内面にはスヌが付着する。30・31の爪形文は29に比べて幅が狭い。また、平行沈線が爪形文にかかる部分もみられ、全体的に描かれる。



第6図 土器2 (S=1/4)

4類(第6図32~39)

爪形に似ない刺突爪形文を付ける土器である。竹管を細分した多截の竹管状工具が用いられたと考えられる。32~35・37・38の爪形文は両端が丸みを帯びており、鎌木報告で、「列点文土器」として図示されたものと同類であろう。32~35・39は口縁端に刻目を付け、34・39は波状口縁をもつ。文様構成は、2類、3類と同様に口縁部に爪形文区、胴部に縄文区を配置すると思われる。32には口縁に平行する爪形文が4列みられる。35には山形状に配列した爪形文がみられる。34・39は爪形文の上下の間隔が広くとられているようである。36は爪形文区の最下段に直線状の爪形文を2列配し、その上には弧状の爪形文が描かれる。胎土がきめ細かく、焼成も良好である。37は爪形文の直下に横位展開の羽状縄文を施文している。この爪形文は羽状縄文の地文の中に付けられたものかもしれない。38は∞字形が連続する文様帶の上下に直線状の爪形文を配する。

5a類(第6図40~44)・5b類(第6図45~48)

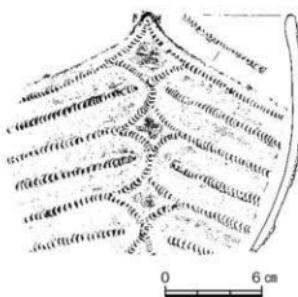
幅の狭い突帶文を伴う土器である。突帶文を無文地に飾るもの(40~44)を5a類、縄文地に飾るもの(45~48)を5b類とする。40・41の口縁部に平行する突帶には爪形文が付く。いずれも口縁端に刻目が付き、40の口縁端の刻目は中央に細い筋が入る特徴的なものである。41は波状口縁をもつ。42は口縁端に斜行する刻目が付き、口縁に平行する突帶上には刻目と言ってもよいような幅の狭い爪形文が付けられる。この突帶はわずかに隆起する程度である。43は口縁端に刻目をもち、爪形文が付く突帶で飾られる。その意匠は、第7図で示す福井県鳥浜貝塚出土資料⁽¹⁷⁾に類似するようである。波状口縁をもつその土器は、突帶により口縁に平行する長梢円形状の区画文を数段描き、その内に直線を一本配する。波頂部において、区画は隣どうしでくつき合っており、43はこの部分の破片と思われる。44は口縁端を欠く破片で、3列の爪形文がみられる。この爪形文は4類のものと似ているが、3列のうち中の爪形文だけが少し隆起した突帶上に付けられている。45~48は口縁部下位から胴部にかけての小片である。45は上段の突帶上に爪形文を付け、その直下に縦位展開の羽状縄文を施文している。下段の突帶には、まわりと同じように縄文が施文される。46~48の突帶は羽状縄文の中に貼り付けられており、46・47は突帶上に爪形文を付ける。48の突帶上には縄文が施文される。

6類(第6図49~50)

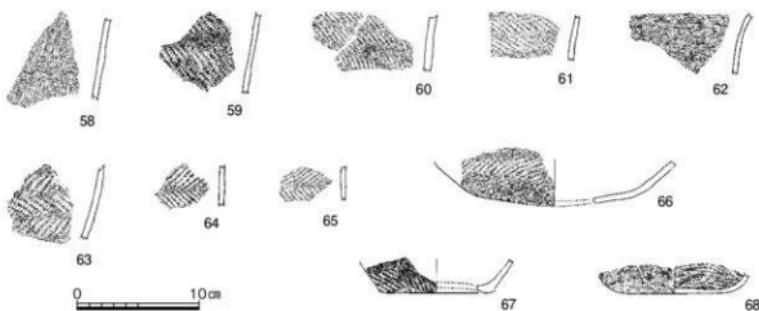
全面に縄文が施文される土器である。49~50は口縁部に縄文が施文され、爪形文が見られないため、この分類に含まれると判断した。50は口縁端部を欠くが、2つの穿孔がみられる。縄文は縦位展開の羽状縄文で、原体は連結されてない。

7類(第6図51~57)

無文の土器である。器表面を軽く撫でただけの調整で、凹凸が残る。53の内面は条痕調整の後、ナデ消している。57は上下とも粘土の継ぎ目で割れた資料で、成形のときに擬口縁を作りながら積



第7図 鳥浜貝塚出土資料
(S=1/3)



第8図 土器3 (S=1/4)

み上げた様子がわかる。これを一単位の粘土帯とすれば、幅は3.1cm程度である。

胸部・底部(第8図58~68)

58~65は縄文が施された胸部である。62には部分的に斜縄文が付けられる。63~65には横位展開の羽状縄文がみられる。

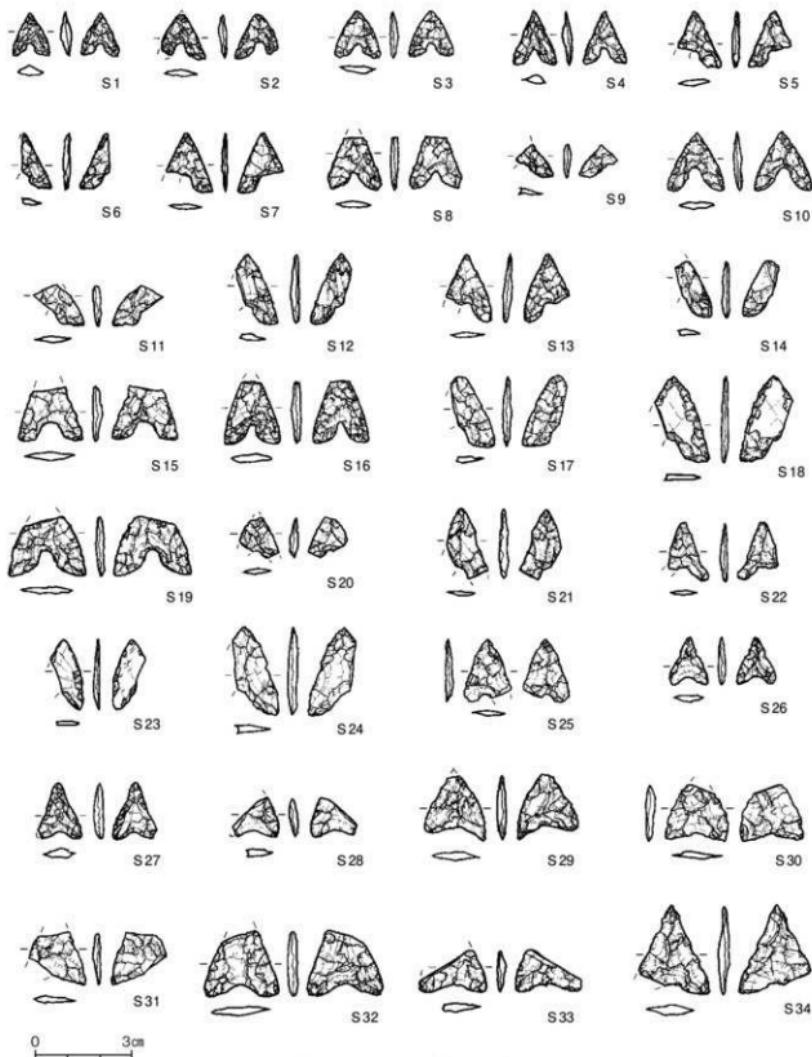
66~68は底部である。66は丸底、68は平底である。67は底面が外に少しあり、上げ底気味となる。いずれも外面上には縄文が施される。66の内面には、立ち上がり部分に条痕調整が残るため、2類に属すると思われる。

石 器(第9~11図S1~S71)

サスカイト製石器・剥片など3,225点、黒曜石製石鏃・剥片など31点、水晶製石鏃・剥片など24点、流紋岩製剥片など5点、石材の不明な石鏃1点が出土している。石材別の総重量はサスカイトが1,812.59g、黒曜石は0.83g、水晶5.37g、流紋岩60.45gである。サスカイトの量が圧倒的で、産地分析は行っていないが、地理的条件から香川県からもたらされたものがほとんどであると考えられる。黒曜石の量は極少ないが、1点のみ渦った白色を呈する姫島産のものが含まれる。流紋岩については、緑灰色を呈しガラス質が強いものが多いという特徴から市内玉島黒崎で産出するものと考えられる。器種としては石鏃64点、石匙3点、スクレイバー8点、二次加工のある剥片7点、使用痕のある剥片2点、楔形石器1点などがある。

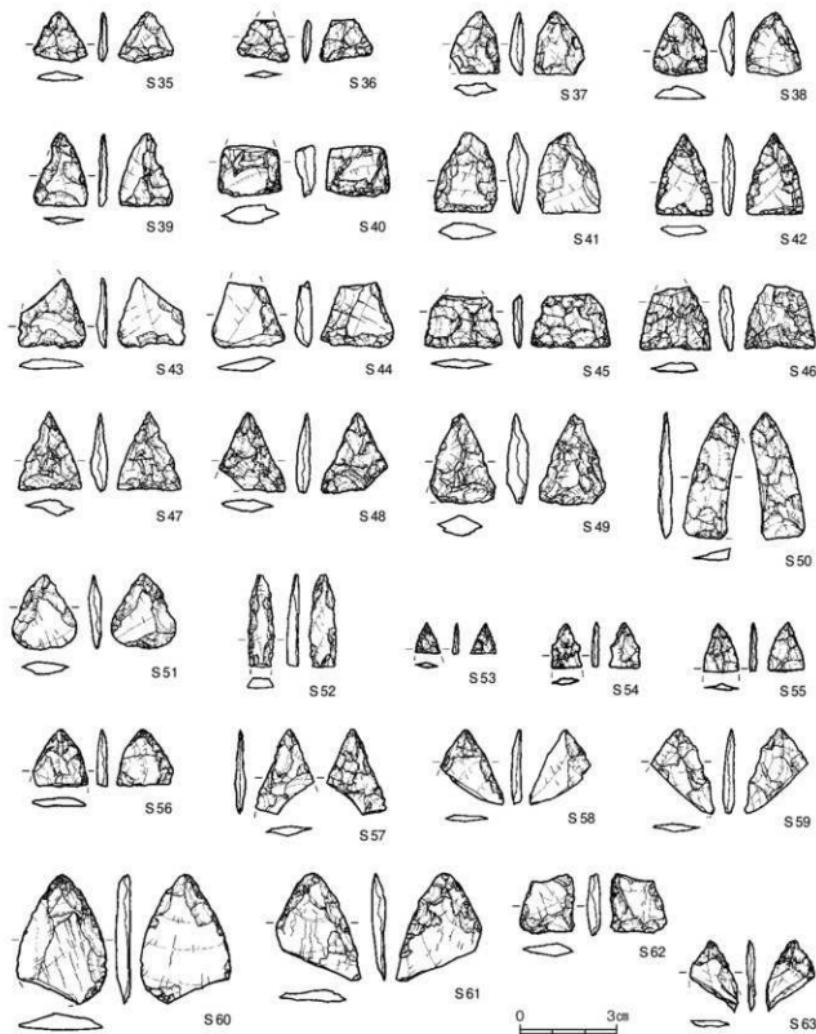
石鏃は64点が出土、あるいは採集されており、59点を図化した。S1~S34はサスカイト製の凹基鏃である。S1~S24までは抉りの深い一群で、基部の中心部のみを深く抉ったような形態のものが多い。S21・S22の側縁部はやや内湾する形状である。S25~S34は抉りが浅めである。全体に緩やかなカーブを描くもの(S26・S28~S30)と、中心部のみ若干深く抉ったもの(S25・S27・S32・S34)がある。

S35~S50は平基鏃である。S42は石材不明、S46が水晶製で、それ以外はサスカイト製である。全体に調整剥離が周縁部に限られ、深くないものが多い。S35・S36は小型で正三角形状を呈し、先端がどこかはっきりしない。S40・S41・S49は厚手で粗雑な作りである。S50は長さ3.89cmと最大であるが、薄手で丁寧に作られている。



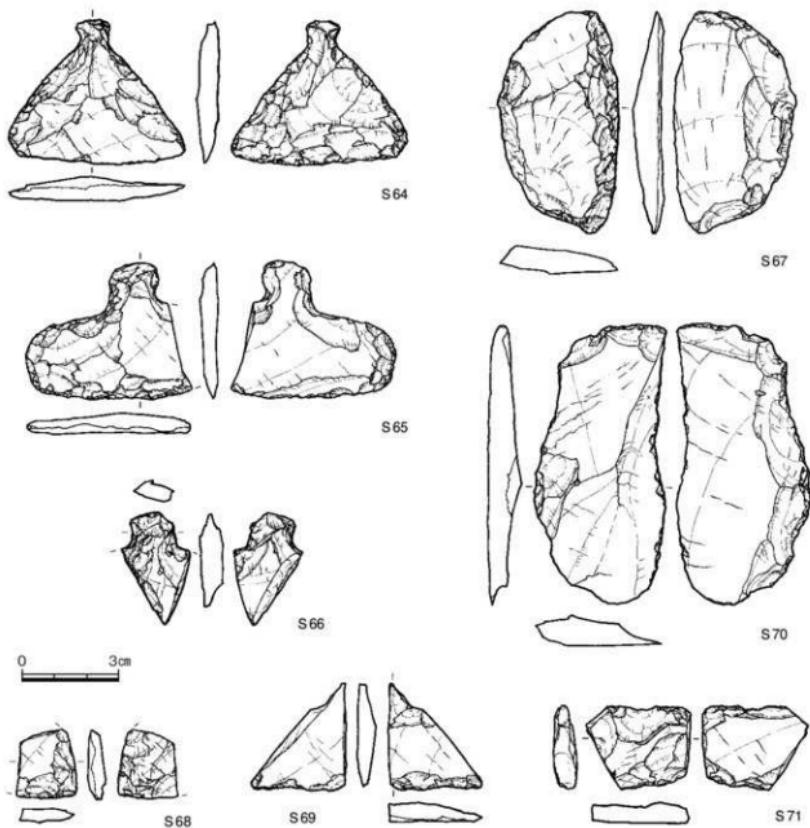
第9図 石器1 (S=2/3)

S51はサスカイト製の凸基鎌である。逆棘がなく、基部が円弧状に仕上げられている。S52は基部を失っているが、サスカイト製の凸基鎌と推定される。本来は紡錘形の平面形であったと考えられる。調整は周縁部のみに施され、素材面を広く残している。



第10図 石器2 (S=2/3)

S53～S59は基部を失った石鏨である。S53が黒曜石である以外は、サスカイト製である。S53は先端部のみの破片であるが、丁寧な調整削離が行われている。S57は先端部にかけて丁寧な両面調整が施されている。S58は調整が粗く未製品の可能性もある。



第11図 石器3 (S=2/3)

石錐未製品と考えられるものは5点が出土、あるいは採集されており、4点を図化した(S60～S63)。すべてサヌカイト製である。S60は基部が円弧状を呈する凸基錐として使用された可能性もあるが、加工の度合いが少ないため、石錐未製品に含めた。

S64～S66はサヌカイト製の石匙である。S64は横型の石匙で、二等辺三角形の頂角部につまみを設けた形状を呈する。中部瀬戸内地域においては前期(磯の森式期)に特有の石匙である。つまみ部は小さく、細かい加工で作り出されている。一方、刃部は片面調整で、素材の腹面側にのみ加工が施されている。S65も刃部に対してつまみが直交する横型の石匙である。つまみはやや大ぶりで、刃部については素材の腹面側にもわずかに加工が認められるが、背面側への片面調整の傾向が強い。S66はつまみ部のみの破片で、刃部は失われている。やや大ぶりのつまみである。

スクレイパーは破片が多いが、8点が出土しており、すべてサスカイト製である。S67は完形品で、素材の背面側に刃部加工を施したものである。刃部は外反している。S68はコーナー部分の破片であるが、丁寧な両面調整の刃部加工が施されている。

二次加工のある剥片は7点、使用痕のある剥片は2点が出土している。このうち、二次加工のある剥片1点を図化した。S70はサスカイト製の二次加工のある剥片である。横長の比較的大きな剥片の打点を取り除くように加工が施されている。また、打点のある辺の対辺には使用痕も認められる。

楔形石器は1点が確認された。S71はサスカイト製の楔形石器である。上下につぶれが認められ、両側縁に剪断面が認められる。

この他にサスカイト製の石核1点が出土しているが、有意とは思えない不定形剥片を剥ぎ取ったものであり、今回の図化は見送った。

骨角器（第12図 B1～B6）

後述する装身具以外の骨角器として、鎌3点、用途不明製品2点、針1点が確認された。B1～B3は骨製の鎌である。B2・B3は水道管を敷設した埋土から出土している。いずれも断面が円形で、茎部と体部の境がはっきりしない特徴を持つ。B1は長さ5.12cm、径0.58cm、重さ1.36gで、下から7mmほどのところに、かろうじて茎部と体部の境かとみえる痕跡が残っている。B2は長さ5.36cm、径0.56cm、重さ1.29gである。B3は残存長4.12cm、径0.56cm、重さ1.05gで、茎部を欠損している。

B4・B5は用途不明の骨製品である。B4は貝層から出土しており、残存長4.78cm、幅0.69cm、厚さ0.35cm、重さ1.69gで、上下を欠損している。断面は長方形状を呈し、平面形は中央の幅が広く、上下に細くなる形状をしている。鎌の一種かもしれない。B5は工事排土から検出されており、残存長2.95cm、径0.70cm、重さ1.15gで、上下を欠損している。B1～B3と同様に断面が円形だが、若干太く、鎌ではないようである。

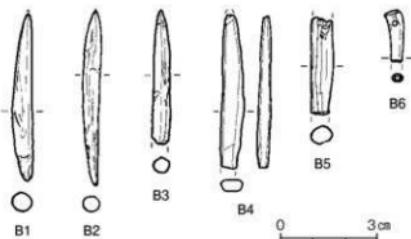
B6は工事排土から検出された骨製の針である。頭頂部に小孔を穿ち、残存長1.59cm、断面は中空の楕円形で長径0.68cm、短径0.33cm、重さ0.13g、孔径0.14cmである。

装身具（第13図 B7～B12・S72）

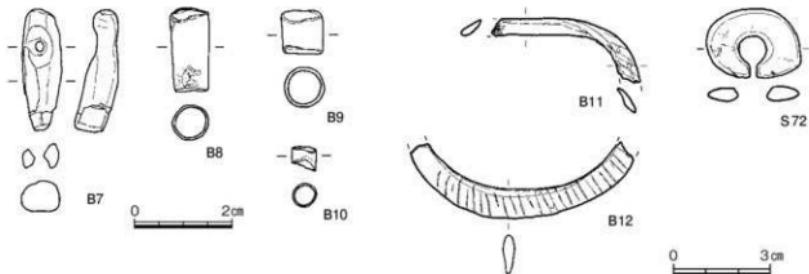
装身具としては歯牙製の垂飾1点、骨製の管玉・小玉状製品3点、貝製腕輪2点、滑石製の球状耳飾1点が確認された。

B7は工事排土から検出した歯牙製の垂飾である。長さ2.58cm、幅0.81cm、厚さ0.71cm、孔径0.19cm、重さ1.45gである。歯根部に両側から穿孔しているが、他に加工は行われていないようである。

B8～B10は骨製の管状垂飾・小玉垂飾である。鳥獣類の管状骨を輪切りにして製作しているもので、B8・B10が貝層から出土し、B9が工事排土から検出された。B8はやや長めの管状垂飾で、長さ1.71cm、外径0.78cm、内径0.59cm、重さ0.53gである。B9・B10は長さが短いため、小玉垂飾とするが、



第12図 骨角器（S=2/3）



第13図 装身具 (S=1/1・2/3)

短いだけで性格的にはB8と同じものと考えたい。B9は長さ0.92cm、外径0.88cm、内径0.63cm、重さ0.51gである。B10は長さ0.48cm、外径0.50cm、内径0.37cm、重さ0.05gである。

B11・B12はアカガイ属の二枚貝製腕輪の破片である。B11は二枚貝の背の部分にあたる破片で、放射肋の研磨がややあまい。残存長4.53cm、幅0.86cm、厚さ0.46cm、重さ2.76gである。B12は二枚貝の腹の部分にあたる破片で、放射肋を丁寧に研磨している。残存長6.84cm、幅1.29cm、厚さ0.39cm、重さ6.42gである。

S72は滑石製の玦状耳飾である。柔らかい石を用いており、表面に擦痕が認められる。楕円形を呈しており、長径2.91cm、短径2.16cm、厚さ0.45cm、孔径0.89cm、重さ3.89gである。切目長約0.4cmと孔はやや下に開けられている。

第4節 まとめにかえて

今回の報告は、市道改修工事に伴う磯の森貝塚緊急調査における出土遺物のうち土器、石器、骨角器などの人工遺物についておこなった。出土土器は、縄文時代前期中葉に位置づけられる磯の森式に属するものを主体とし、磯の森式に先行する磯の森下層式がわずかに含まれていた。過去の調査で出土した種類の多くがそろっているが、沈線文土器は含まれていない。これらの土器を理解するため、池田次郎氏と鎌木義昌氏により1949年に行われた磯の森貝塚の発掘調査およびそれ以降の研究をもとに編年的位置を摸索したのが表1である。表に掲げた土器の特徴を示す名称については、報文中に図示されなかった資料もあるため土器名に対応する内容を全て把握できているわけではない。中越利夫氏による報告は、1949年調査で池田氏による採集資料を整理・分類したものである。また、関連する資料として福井県鳥浜貝塚の型式分類を掲げる。磯の森式は、近畿地方を中心に広域に分布する北白川下層式の型式群のうち、西端域にあたる中国地方に展開した土器群として位置づけられる。北白川下層式の研究を推し進めてきた網谷克彦氏による鳥浜貝塚出土土器の型式分類は、磯の森式土器を理解するうえでも特に有効である。

今回報告する遺物のほとんどは工事の排土中から発見されたため、出土層位の情報は得られていない。そのため、1949年の磯の森貝塚の発掘調査の所見をおさえながら見ていくことにする。池田・鎌木報告では、貝層の下層や青色砂層から「条痕文土器」が出土することが認識されており、今回の

資料中でも同類の土器を見出すことができた(1類)。また、連続爪形文土器(2類)が比較的下層に多く、刺突爪形文土器(3類)が上層に多く存在するということも指摘されている。3類は刺突爪形文土器を主とし、多様な爪形文の土器で構成される。この類の土器について、層位的な出土状況の差がほとんど見あたらなかったため、細分されないままである。ただし、第5図27・28のような「繊細なる爪形文」をもつ土器は、最上層に近いところで多く見られ、後出的であることが述べられている。刺突爪形文土器のうち「爪形にあまり似ない列点文土器」(4類)は、小さくて丸みを帯びた爪形文を付ける土器で、おそらく多截の竹管状工具の外側(凸面)を用いた文様と考えられる。これに類似する爪形文が「隆縫文土器」の突帯上にも見出すことができる所以、次の段階に向けて兆候と捉え、他の刺突爪形文土器から分離した。網谷編年によると、北白川下層II b式(新)の段階から爪形文と共に伴するかたちで突帯文が出現し、次のII c式では文様構成が変化して胴部の縄文地に突帯文が貼り付けられるようになる。これらの段階に対比される突帯文をもつ土器として5a類、5b類をあてはめてみた。5a類の第5図44は一つの土器の上に爪形文と突帯文が同居するように見えるが、わずかに隆起する程度のものを一律に突帯文に含めてよいかどうかは検討を要する。全面縄文土器(6類)は「繊細なる爪形文」をもつ土器と共存することから後出的とされ、無文土器(7類)は比較的下層に近い出土を示しているとされた。いずれも他の分類の土器との併行関係が想定される。

1982年の調査から実に36年が経過してからの報告となった。不測の緊急調査のため、当時の記録も限られたものであるが、ひとまず貝層断面の記録や出土遺物の一部を公表することで、あらためて磯の森貝塚の重要性について認識を深める契機となれば幸いである。

中国地方 縄文前期中葉	磯の森貝塚			鳥浜貝塚 ⁽¹⁷⁾	近畿地方 ⁽¹⁸⁾
	油田・鎌木 ⁽⁵⁾	中越 ⁽¹⁶⁾	本報告		
磯の森下層式	条模文+連続爪形文	A類	1類	第4群	北白川下層I b
磯の森式	連続爪形文土器	B類	2類	第6群	北白川下層II a
	刺突爪形文土器	C類	3類	第7群	北白川下層II b (古)
	列点文土器 (爪形にあまり似ない一群)	D類	4類		北白川下層II b (新)
	隆縫文土器	F類	5a類	第9群	
			5b類	北白川下層II c	
	全面縄文土器	E類	6類	第8群	
	無文土器	J類	7類	第10群	

表1 磯の森貝塚出土土器の分類

註

- (1) 倉敷市歴史年表編集委員会「倉敷市歴史年表」倉敷市教育委員会 1978
- (2) 錦木義昌「岡山県鷺羽山遺跡調査報告」「石器時代」第3号 1968
　　山本慶一「鷺羽山遺跡の石器と土器」「倉敷考古館研究集報」第6集（財）倉敷考古館 1969
- (3) 藤原好二「平井政雄氏寄贈の資料」「倉敷埋蔵文化財センター年報」5倉敷埋蔵文化財センター 1998
- (4) 清野謙次「備前国児島郡江村大字粒江船元字原崎貝塚」「日本貝塚の研究」岩波書店 1969
- (5) 池田次郎・錦木義昌「岡山県磯の森貝塚発掘報告」「吉備考古」第81・82合併号 1951
- (6) 下澤公明編「本州四国連絡橋陸上ルート建設に伴う発掘調査II」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告71
　　岡山県教育委員会 1988
- (7) 梅原末治「岡山県下発見の銅鐸」「吉備考古」第82号 1951
- (8) 末永雅雄「瑠璃山出土の銅劍」「吉備考古」第78・79号 1950
- (9) 間壁忠彦・間壁震子・小野一臣・藤田憲司「広江・浜遺跡」「倉敷考古館研究集報」第14集 1979
- (10) 小野雅明「第2章 広江・浜遺跡」「広江・浜遺跡 南山21号墳」倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告第14集 2011
- (11) 間壁忠彦・間壁震子編「新修倉敷市史 第一巻 考古」倉敷市 1996
- (12) 清野謙次「備前国児島郡江村大字粒江字真菰谷の山嶺上の貝塚」「日本貝塚の研究」岩波書店 1969
- (13) 中野倫太郎「藤戸地内文化財調査報告」「倉敷市埋蔵文化財調査年報」2倉敷市教育委員会 1993
- (14) 藤原好二「経寺山2号墳出土の須恵器」「倉敷埋蔵文化財センター年報」1倉敷埋蔵文化財センター 1994
　　藤原好二「経寺山2号墳出土の須恵器(補遺)」「倉敷埋蔵文化財センター年報」3
　　倉敷埋蔵文化財センター 1996
- (15) 藤戸町誌編集委員会「藤戸町誌」1955
- (16) 中越利夫「岡山県磯の森貝塚出土の遺物について」「広島大学文学部帝釈軒遺跡群発掘調査室年報」V 1982
- (17) 烏浜貝塚研究グループ「烏浜貝塚－縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査1－」福井県教育委員会 1979
　　本報告第6図は烏浜貝塚報告1979の第33図16を引用したものである。
- (18) 橋谷克彦「北白川下層式土器様式」「縄文土器大観1 草創期・早期・前期」(株)小学館 1989
　　磯の森式の分類とは合致しない部分もあると思われる。

出土遺物観察表

1. 土器観察表

番号	器種	分類	特徴	胎土砂粒の 程 (mm)	色 調		残存部位
					上段：外面	下段：内面	
1	深鉢	1類	内外面に条痕。 外面に連續爪形文。	1~2	褐色 10YR4/1 灰黄色 10YR5/2		口縁部
2	深鉢	1類	内外面に条痕調整。	1~2	黒褐色 75YR3/1 黒褐色 75YR3/1		胴部
3	深鉢	2類	内外面に条痕。 外表面は条痕を軽くナメ消して連續爪形文。	1~2	黒褐色 10YR4/1 褐色 10YR4/1		口縁部
4	深鉢	2類	外面は爪形文、内面は条痕。 口縁端部外側に刻目。	1~2	褐色 10YR4/1 褐色 10YR4/1		口縁部
5	深鉢	2類	外面に剥突文、LR構文。内面は条痕。	1~2	灰黄色 10YR5/2 灰黄色 10YR5/2		胴部上位
6	深鉢	2類	外面に連續爪形文、内面は条痕。	1~2	褐色 10YR4/1 褐色 10YR5/1		口縁部
7	深鉢	2類	外面に連續爪形文。口縁端部内側に刻目。	1~2	黄色 25Y4/1 黄色 25Y4/1		口縁部
8	深鉢	2類	外面に連續爪形文。口縁端部内側に刻目。	1~2	黄色 25Y5/1 灰黄色 25Y6/2		口縁部
9	深鉢	2類	外面に連續爪形文。口縁端部内側に刻目。 穿孔あり。	1~2	褐色 10YR4/1 褐色 10YR4/1		口縁部
10	深鉢	2類	外面に連續爪形文。口縁端部に刻目。	1~2	褐色 10YR4/1 灰黄色 10YR5/2		口縁部
11	深鉢	2類	外面に連續爪形文。口縁端部内側に刻目。	1~2	褐色 10YR4/1 黒褐色 10YR3/1		口縁部
12	深鉢	2類	外面に連續爪形文。口縁端部内側に刻目。	1~2	褐色 25Y5/2 褐色 25Y5/2		口縁部
13	深鉢	2類	外面に連續爪形文。	1~2	灰黄色 10YR5/2 灰黄色 10YR5/2		口縁部
14	深鉢	2類	口縁部外面は連續爪形文、胴部はLR構文、境界に剥突文。	1~2	灰黄色 10YR6/2 灰黄色 10YR6/2		口縁部~胴部上位
15	深鉢	2類	口縁部外面は連續爪形文、胴部はLR構文、境界に剥突文。	1~2	にない・黄褐色 10YR7/3 にない・黄褐色 10YR7/3		口縁部~胴部上位
16	深鉢	2類	口縁部外面は連續爪形文、胴部は羽状構文、境界に剥突文。	1~2	黒褐色 10YR3/1 灰黄色 10YR5/2		胴部上位
17	深鉢	2類	外面はC字形爪形文、内面は条痕後ナデ。	1~2	褐色 25Y4/1 褐色 25Y4/1		口縁部
18	深鉢	2類	外面に連續爪形文。	1~2	褐色 25Y5/2 褐色 25Y5/2		口縁部
19	深鉢	2類	外面に連續爪形文。	1~2	褐色 10YR4/1 灰黄色 10YR5/2		口縁部
20	深鉢	2類	外面に連續爪形文。	1~2	褐色 10YR4/1 灰黄色 10YR5/2		口縁部
21	深鉢	3類	口縁部外面は剥突爪形文、胴部は羽状構文。	1~2	オーリープ黒色 5Y3/1 にない・黄褐色 10YR5/3		口縁部~胴部上位
22	深鉢	3類	外面に剥突爪形文。口縁端部に刻目。	1~2	黄色 5Y4/1 にない・橙色 10YR6/4		口縁部
23	深鉢	3類	口縁部外面は剥突爪形文、胴部はLR構文。	1~2	黒褐色 10YR3/1 褐色 10YR4/1		口縁部~胴部上位
24	深鉢	3類	口縁部外面は剥突爪形文、胴部はRL構文。	1~2	褐色 10YR4/1 灰黄色 10YR5/2		口縁部~胴部上位
25	深鉢	3類	口縁部外面は剥突爪形文、胴部は羽状構文。	1~2	黒褐色 10YR3/1 にない・黄褐色 10YR5/3		口縁部~胴部上位
26	深鉢	3類	外面に押突爪形文。	1~2	褐色 10YR5/1 灰黄色 10YR5/2		口縁部
27	深鉢	3類	外面に剥突爪形文。口縁端部に刻目。 波状口縁。	1~2	にない・黄褐色 10YR6/3 灰黄色 10YR5/2		口縁部
28	深鉢	3類	外面に剥突爪形文。波状口縁。丹彩。	1~2	赤褐色 10R4/4 橙色 5YR6/6		口縁部
29	深鉢	3類	外面に剥突爪形文(平行沈線)。波状口縁。	1~2	褐色 5YR4/1 にない・赤褐色 5YR5/6		口縁部
30	深鉢	3類	口縁部外面は剥突爪形文(平行沈線)、胴部はR L構文。	1~2	褐色 75YR5/1 褐色 75YR4/1		口縁部~胴部上位
31	深鉢	3類	外面に剥突爪形文(平行沈線)。	1~2	褐色 75YR4/1 黒褐色 75YR3/1		口縁部
32	深鉢	4類	外面に剥突爪形文。口縁端部に刻目。	1~2	褐色 10YR4/1 褐色 10YR4/1		口縁部

番号	器種	分類	特徴	胎土砂粒の 様 (mm)	色 調		残存部位
					上段：外面	下段：内面	
33	深鉢	4類	外面に刺突爪形文。口縁端部に刻目。	1~2	褐灰色 10YRS/1 灰黃褐色 10YRS/2		口縁部
34	深鉢	4類	外面に刺突爪形文。口縁端部に刻目。波状口縁。	1~2	褐灰色 25YR5/1 黄褐色 25YR6/1		口縁部
35	深鉢	4類	外面に刺突爪形文。口縁端部に刻目。	1~2	灰褐色 75YR5/2 にふ・橙色 75YR6/4		口縁部
36	深鉢	4類	口縁部外面は刺突爪形文、胴部はRL總文。	1~2	褐灰色 75YR4/1 褐灰色 75YR4/1		口縁部～胴部上位
37	深鉢	4類	口縁部外面は刺突爪形文、胴部は羽状縦文。	1~2	褐灰色 75YR4/1 黄褐色 25Y5/1		口縁部～胴部上位
38	深鉢	4類	外面に刺突爪形文。	1~2	黒褐色 75YR3/1 黑褐色 75YR3/1		口縁部
39	深鉢	4類	外面に刺突爪形文。口縁端部に刻目。波状口縁。	1~2	褐灰色 75YR4/1 灰褐色 75YR5/2		口縁部
40	深鉢	5a類	爪形文付突帯を有する。口縁端部に刻目。	1~2	にふ・黄褐色 10YR7/3 にふ・黄褐色 10YR7/3		口縁部
41	深鉢	5a類	爪形文付突帯を有する。口縁端部に刻目。 波状口縁。	1~2	にふ・黄褐色 10YR7/4 にふ・黄褐色 10YR7/4		口縁部
42	深鉢	5a類	低い割目突帯を有する。口縁端部に刻目。	1~2	褐灰色 10YR4/1 褐灰色 10YR5/1		口縁部
43	深鉢	5a類	爪形文付突帯を有する。口縁端部に刻目。	1~2	黄褐色 25YR4/1 黄褐色 25YR4/1		口縁部
44	深鉢	5a類	外面の平滑な部分と低い突带上に刺突爪形文。	1~2	褐灰色 10YR4/1 褐灰色 10YR4/1		口縁部
45	深鉢	5b類	爪形文付突帯と羽状縦文に覆われる突帯を有する。	1~2	褐灰色 10YR5/1 褐灰色 10YR5/1		口縁部下位
46	深鉢	5b類	爪形文付突帯を有する。羽状縦文。	1~2	灰褐色 10YR5/2 褐灰色 10YR4/1		口縁部
47	深鉢	5b類	爪形文付突帯を有する。羽状縦文。	1~2	にふ・黄褐色 10YR6/4 褐灰色 10YR4/1		胴部上位
48	深鉢	5b類	突帯を付し、その上に縦文を施す。羽状縦文。	1~2	にふ・黄褐色 10YR6/3 黒褐色 10YR3/1		口縁部下位
49	深鉢	6類	外面にRL總文。	1~2	褐灰色 75YR4/1 褐灰色 75YR4/1		口縁部
50	深鉢	6類	外面にRL總文とLR總文。穿孔あり。	1~2	灰褐色 10YR5/2 褐灰色 10YR4/1		口縁部
51	深鉢	7類	無文。	1~2	にふ・黄褐色 10YR7/3 灰褐色 10YR6/2		口縁部
52	深鉢	7類	無文。内面に指痕痕。	1~2	灰褐色 10YR5/2 にふ・黄褐色 10YR5/3		口縁部
53	深鉢	7類	無文。内面に条痕調整の後ナデ。	1~2	黒褐色 10YR3/1 灰褐色 10YR5/2		口縁部
54	深鉢	7類	無文。	1~2	褐灰色 10YR5/1 灰褐色 10YR6/2		口縁部
55	深鉢	7類	無文。	1~2	にふ・黄褐色 10YR7/2 にふ・黄褐色 10YR7/2		口縁部
56	深鉢	7類	無文。	1~2	黒褐色 10YR3/1 灰褐色 10YR5/2		口縁部
57	深鉢	7類	無文。	1~2	褐灰色 7.5YR5/2 褐灰色 7.5YR5/2		胴部
58	深鉢		外面にLR總文。	1~2	褐灰色 10YR4/1 灰褐色 10YR5/2		胴部
59	深鉢		外面にRL總文。	1~2	褐灰色 10YR5/1 褐灰色 10YR6/1		胴部
60	深鉢		外面にRL總文。	1~3	褐灰色 10YR4/1 灰褐色 10YR5/2		胴部
61	深鉢		外面にRL總文。	1~2	褐灰色 10YR4/1 褐灰色 10YR4/1		胴部
62	深鉢		外面の一部にLR總文、他は無文。	1~2	褐灰色 10YR4/1 にふ・黄褐色 10YR6/3		胴部
63	深鉢		外面に羽状縦文。	1~2	にふ・黄褐色 10YR6/4 にふ・褐色 7.5YR5/4		胴部
64	深鉢		外面に羽状縦文。	1~2	褐灰色 10YR4/1 にふ・橙色 7.5YR6/4		胴部
65	深鉢		外面に羽状縦文。	1~2	褐灰色 10YR4/1 にふ・黄褐色 10YR6/3		胴部
66	深鉢		外面にLR總文。	1~2	灰褐色 10YR5/2 にふ・黄褐色 10YR6/3		底部
67	深鉢		外面にRL總文。	1~2	灰褐色 10YR5/2 褐灰色 10YR4/1		底部
68	深鉢		内面に条痕が残る。	1~2	灰褐色 10YR5/2 灰褐色 10YR5/2		底部

2. 石器組成表(サヌカイト)

器種 出土層位	石 鐵	石 髓 未 製 品	石 匙	ス ク レ イ バ ー	加 工 重 量 片	使 用 重 量 片	櫛 形 石 器	剥 片	碎 片	石 核	計	總 重 量 (g)
淡茶黒色土								1			1	15.54
暗茶黒色混貝土層								2			2	5.79
貝層	31	1	2	2	2	1	1	379	899	1	1319	686.33
工事排土	27	3	1	5	4	1		702	1152		1895	1019.97
表採ほか	3	1		1	1			2			8	84.96
計	61	5	3	8	7	2	1	1086	2051	1	3225	1812.59

3. 石器組成表(その他の石材)(黒曜石には姫島産が含まれる。)

石材・器種 出土層位	黒曜石				水 晶				流紋岩				不明					
	石 鐵 片	剥 片	碎 片	計	石 鐵 片	剥 片	碎 片	計	石 鐵 片	剥 片	碎 片	計	石 鐵 片	計	總 重 量 (g)			
貝層	1	13	14	0.29	1	2	9	12	4.86		2	2	0.10					
工事排土		1	16	17	0.54			12	12	0.51	1	1	0.52	1	1	1.70		
表採ほか		1	1	29	31	0.83	1	2	21	24	5.37	3	2	5	60.45	1	1	1.70
計																		

4. 石器計測表

番号	器種	石 材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	出土層位他	備考	整理番号
S1	石 髓	サヌカイト	134	1.16	0.35	0.35	貝層		27
S2	石 髓	サヌカイト	(137)	(1.32)	0.24	0.28	表採ほか		54
S3	石 髓	サヌカイト	141	1.39	0.25	0.35	貝層		2
S4	石 髓	サヌカイト	163	1.35	0.31	0.38	工事排土		36
S5	石 髓	サヌカイト	169	(1.35)	0.21	0.28	工事排土		37
S6	石 髓	サヌカイト	(172)	(0.95)	0.20	0.19	工事排土		64
S7	石 髓	サヌカイト	180	(1.41)	0.19	0.32	貝層		32
S8	石 髓	サヌカイト	(160)	1.61	0.23	0.55	工事排土		39
S9	石 髓	サヌカイト	(1.15)	(1.09)	0.20	0.17	貝層		6
S10	石 髓	サヌカイト	178	1.74	0.27	0.53	貝層		17
S11	石 髓	サヌカイト	(1.27)	(1.60)	0.25	0.33	貝層		34
S12	石 髓	サヌカイト	(2.16)	1.30	0.24	0.43	工事排土		59
S13	石 髓	サヌカイト	208	(1.41)	0.28	0.50	工事排土		38
S14	石 髓	サヌカイト	(1.70)	(1.00)	0.21	0.35	工事排土		40
S15	石 髓	サヌカイト	(1.67)	2.01	0.29	0.75	貝層		5
S16	石 髓	サヌカイト	(1.87)	1.72	0.27	0.75	工事排土		56
S17	石 髓	サヌカイト	(2.18)	(1.42)	0.28	0.54	貝層		3
S18	石 髓	サヌカイト	267	(1.62)	0.21	0.76	貝層		18
S19	石 髓	サヌカイト	(1.79)	2.36	0.29	0.99	貝層		57
S20	石 髓	サヌカイト	(1.26)	(1.20)	0.27	0.33	貝層		33
S21	石 髓	サヌカイト	(2.09)	(1.20)	0.25	0.49	工事排土		58
S22	石 髓	サヌカイト	181	(1.28)	0.22	0.34	工事排土		41
S23	石 髓	サヌカイト	214	(1.05)	0.19	0.33	貝層		22
S24	石 髓	サヌカイト	269	(1.54)	0.28	0.95	貝層		4
S25	石 髓	サヌカイト	191	(1.42)	0.26	0.48	貝層		20
S26	石 髓	サヌカイト	187	1.24	0.22	0.30	貝層		1
S27	石 髓	サヌカイト	176	(1.38)	0.30	0.55	表採ほか		55
S28	石 髓	サヌカイト	(1.19)	(1.39)	0.27	0.37	工事排土		42
S29	石 髓	サヌカイト	(2.00)	1.87	0.29	0.77	工事排土		46
S30	石 髓	サヌカイト	(1.68)	1.93	0.27	0.76	貝層		21
S31	石 髓	サヌカイト	(1.62)	(1.75)	0.22	0.55	貝層		31

()内は残存値

番号	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	出土層位他	備考	整理番号
S32	石鐵	サヌカイト	(2.00)	2.29	0.29	124	工事排土		47
S33	石鐵	サヌカイト	(1.27)	2.02	0.28	0.47	工事排土		43
S34	石鐵	サヌカイト	2.70	(2.19)	0.33	1.14	工事排土		45
S35	石鐵	サヌカイト	1.54	1.64	0.29	0.61	貝塚		7
S36	石鐵	サヌカイト	(1.28)	1.60	0.26	0.45	貝塚		30
S37	石鐵	サヌカイト	1.94	(1.55)	0.41	1.11	貝塚		8
S38	石鐵	サヌカイト	1.95	1.63	0.48	1.39	工事排土		51
S39	石鐵	サヌカイト	2.24	1.61	0.26	0.73	工事排土		44
S40	石鐵	サヌカイト	(1.63)	1.97	0.59	2.04	工事排土		52
S41	石鐵	サヌカイト	2.48	1.92	0.63	2.48	貝塚		11
S42	石鐵	不明	2.48	1.74	0.38	1.70	工事排土		61
S43	石鐵	サヌカイト	(2.16)	2.09	0.31	1.26	貝塚		10
S44	石鐵	サヌカイト	(2.04)	2.25	0.52	2.12	貝塚		12
S45	石鐵	サヌカイト	(1.61)	2.37	0.29	1.31	工事排土		48
S46	石鐵	水晶	(1.97)	2.19	0.43	1.88	貝塚		24
S47	石鐵	サヌカイト	2.41	1.95	0.56	1.48	貝塚		9
S48	石鐵	サヌカイト	2.49	(2.02)	0.44	1.64	表探はか		60
S49	石鐵	サヌカイト	2.79	(2.03)	0.70	2.93	貝塚		28
S50	石鐵	サヌカイト	3.89	(1.79)	0.41	1.98	貝塚		25
S51	石鐵	サヌカイト	2.28	1.98	0.43	1.47	工事排土		49
S52	石鐵	サヌカイト	(2.84)	0.81	0.34	0.95	工事排土		29
S53	石鐵	黒曜石	(0.98)	(0.77)	0.18	0.09	貝塚		23
S54	石鐵	サヌカイト	(1.36)	(0.94)	0.19	0.21	工事排土		63
S55	石鐵	サヌカイト	(1.49)	(1.09)	0.22	0.29	貝塚		26
S56	石鐵	サヌカイト	(1.75)	(1.73)	0.30	1.04	工事排土		62
S57	石鐵	サヌカイト	(2.62)	(1.83)	0.30	0.89	貝塚		19
S58	石鐵	サヌカイト	(2.32)	(1.94)	0.29	0.93	貝塚		14
S59	石鐵	サヌカイト	(2.59)	(1.99)	0.34	1.17	貝塚		13
	石鐵	サヌカイト	(1.69)	(0.92)	0.19	0.17	貝塚	破片	35
	石鐵	サヌカイト	(0.84)	(0.79)	0.16	0.07	工事排土	脚部	74
	石鐵	サヌカイト	(0.96)	(0.84)	0.24	0.16	工事排土	脚部	75
	石鐵	サヌカイト	(0.59)	(0.67)	0.19	0.06	工事排土	脚部	76
	石鐵	サヌカイト	(0.51)	(0.54)	0.15	0.04	工事排土	脚部	77
S60	石鐵未製品	サヌカイト	3.98	2.79	0.39	4.90	甫半表探		70
S61	石鐵未製品	サヌカイト	3.36	2.48	0.39	2.51	工事排土		50
S62	石鐵未製品	サヌカイト	1.83	1.74	0.37	1.30	工事排土		53
S63	石鐵未製品	サヌカイト	2.29	(1.49)	0.25	0.62	貝塚		15
	石鐵未製品	サヌカイト	2.13	2.27	0.26	1.12	工事排土		81
S64	石槌	サヌカイト	4.43	5.36	0.70	12.68	貝塚		65
S65	石槌	サヌカイト	4.13	(5.10)	0.61	13.09	貝塚		66
S66	石槌	サヌカイト	(3.89)	(2.11)	0.79	5.24	工事排土		71
S67	スクレイパー	サヌカイト	3.74	6.83	0.77	21.15	表探はか		67
S68	スクレイバー	サヌカイト	(2.14)	(1.88)	0.54	2.52	貝塚	破片	16
S69	スクレイバー	サヌカイト	(3.34)	(2.86)	0.59	4.62	貝塚	破片	69
	スクレイバー	サヌカイト	2.21	3.17	0.61	2.96	工事排土	破片	82
	スクレイバー	サヌカイト	2.02	3.61	0.70	3.83	工事排土	破片	85
	スクレイバー	サヌカイト	2.32	2.04	0.54	2.91	工事排土	破片	86
	スクレイバー	サヌカイト	0.93	2.74	0.40	1.13	工事排土	破片	87
	スクレイバー	サヌカイト	2.63	0.55	2.45	2.98	工事排土	破片	88
S70	加工痕のある剥片	サヌカイト	4.11	8.67	1.00	33.82	表探はか		68
	加工痕のある剥片	サヌカイト	2.71	1.82	0.56	3.30	貝塚		73
	加工痕のある剥片	サヌカイト	2.31	3.97	0.41	3.30	工事排土		80
	加工痕のある剥片	サヌカイト	2.51	2.05	0.56	3.71	工事排土		83
	加工痕のある剥片	サヌカイト	1.94	1.66	0.26	0.97	工事排土		84
	加工痕のある剥片	サヌカイト	1.94	1.44	0.54	1.75	工事排土		89
	加工痕のある剥片	サヌカイト	4.71	5.54	1.05	23.62	貝塚		91
	使用痕のある剥片	サヌカイト	4.61	5.32	0.67	16.98	工事排土		78
	使用痕のある剥片	サヌカイト	1.39	1.81	0.30	0.51	貝塚		79
S71	楔形石器	サヌカイト	2.58	3.20	0.68	7.15	貝塚		72
	石核	サヌカイト	8.72	6.44	1.99	109.95	貝塚		90

() 内は残存値

第2章 広江・浜遺跡

第1節 位置と環境

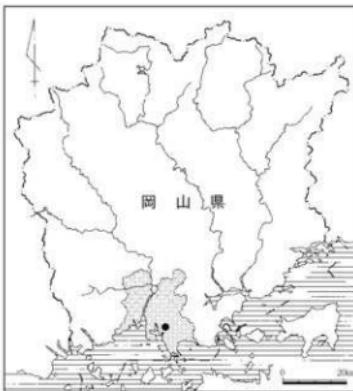
広江・浜遺跡の所在する広江地区は明治22年(1889)までは広江村として存立していたが、いくたの合併を経て、昭和28年(1953)に倉敷市福田町広江となり、さらに昭和42年(1967)の倉敷市・玉島市・児島市の旧三市の合併を経て、今日にいたっている⁽¹⁾。

地形的には北の種松山山塊(標高258m)と南の鴨ヶ辻山山塊(標高283m)に挟まれた東西に延びる谷間に位置している。地区の東にある相引池から流れ出す砂川は小河川であるが、その名に示すように周囲の山から土砂を運んでいたのであろう。西側には現在でこそ干拓や埋め立てによって陸地化され、水島工業地帯が形成されているが、江戸時代以前は水島灘が広がっており、遺跡の所在する第三福田小学校のあたりは、砂川の運んだ土砂と海流によって形成された砂嘴が存在していたものと推定される。また、広江の谷間を東に進むと、郷内の盆地を経て、やがて児島北岸に至るという土地柄でもある。児島の西岸は全体的に山が海に迫る狭小な地形であるが、その中ではある程度後背地が確保できる地勢とも言える。なお、現在、地区内を東西に貫通している県道62号線は、岡山市から水島工業地帯へ通勤ルートとなっている上、児島西岸から南岸にかけての海沿いを走る国道430号とも交わっており、広江1丁目交差点付近は朝夕の渋滞が激しいことで知られている。

歴史的には、狭小な地形を反映してか、児島西岸に大規模な遺跡は認められない。しかし、海に突出する丘陵上や谷間に後背に持つ海辺を中心に旧石器時代から中世にかけての遺跡が分布している。

鶴羽山遺跡⁽²⁾をはじめとする旧石器時代の著名な遺跡は児島南岸に多いが、児島西岸においてもナイフ型石器などの散布が尾根上や岬上に認められる。広江・浜遺跡の北、種松山山塊から南西に突き出す標高30m程の尾根先端には山の鼻遺跡が所在し、サヌカイト製のナイフ形石器が採集されている。また、この他にも児島塩生の金浜上遺跡、児島通生の宮の鼻遺跡などがある。

縄文時代になると、縄文海進によって児島は文字通り瀬戸内海に浮かぶ島となる。縄文時代前期以降には児島北岸を中心に多くの貝塚が形成されるが、児島西岸には後期を中心とする福田貝塚⁽³⁾が確認できるだけで、西岸南部から児島南岸には貝塚は認められない。児島北岸には高梁川などの運んでくる土砂によって広い干潟が形成されたが、西岸や南岸にはそのような干潟の形成が少なかったためであろう。しかし、広江・浜遺跡⁽⁴⁾や三軒屋遺跡、そして児島塩生の溝落遺跡⁽⁵⁾などから縄文時代の遺物を採取・出土しており、海浜部において貝塚を形成しない遺跡もまた存在していたことがわかる。

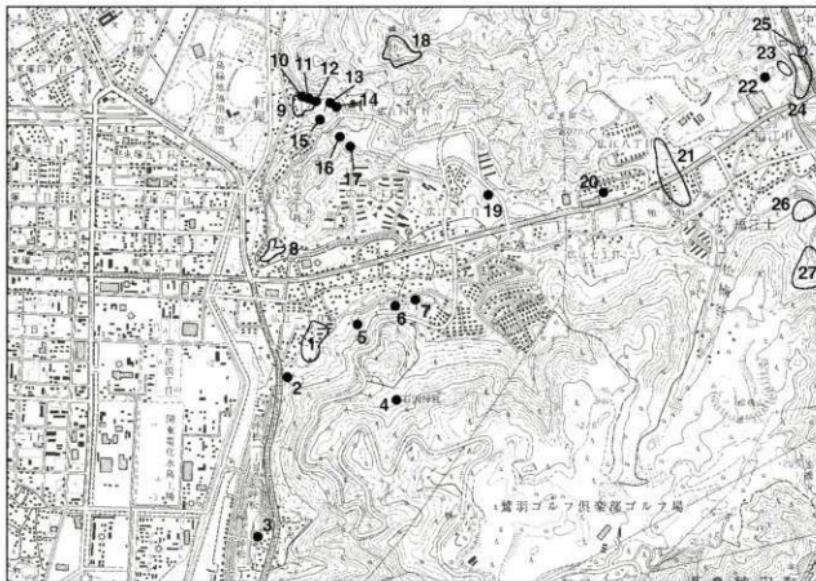


第14図 遺跡の位置

この中で広江・浜遺跡や溝落遺跡からは、サヌカイトの原材や板状剥片が出土しており、縄文時代のサヌカイト流通において重要な位置を占めていたものと推定される。

弥生時代の児島を特徴づける遺物としては銅鐸や銅劍などの青銅器が挙げられる。広江・浜遺跡からも銅戈の破片が出土している⁽⁴⁾が、北側にそびえる種松山の山頂北側からは銅鐸⁽⁵⁾、やや離れて、児島由加の由加山からは銅劍5本が出土している⁽⁷⁾。平野の少ない児島でこうした青銅製品が多く認められることは、児島が瀬戸内海のほぼ中央に浮かぶ島であり、内海航路の要衝に位置することと関連づけられている⁽⁸⁾。

古墳時代前半期における児島西岸の様子はよく分かっていないが、後期初頭になると宇野間地区に天神山古墳が築かれる⁽⁹⁾。径10m程の円墳で内部主体は不明であるが、児島では珍しい円筒埴輪を持つ古墳である。また、製塩遺跡が増加するとともに、その背後の尾根筋や山腹に横穴式石室が築かれるようになる。児島西岸には、北から湾戸遺跡、三軒屋遺跡、広江・浜遺跡⁽¹⁰⁾、金浜遺跡、塙生遺跡⁽¹¹⁾、通生遺跡⁽¹²⁾と海岸の砂浜や砂州上に形成された製塩遺跡が続いている。そしてその背後に



- | | | | | |
|--------------|-----------|-----------|-----------|-----------|
| 1 広江・浜遺跡 | 2 広江浜南古墳 | 3 上町古墳 | 4 積塔遺跡 | 5 広江南1号墳 |
| 6 広江南2号墳 | 7 広江南3号墳 | 8 山の鼻遺跡 | 9 三軒屋遺跡 | 10 三軒屋1号墳 |
| 11 三軒屋2号墳 | 12 三軒屋3号墳 | 13 三軒屋4号墳 | 14 三軒屋5号墳 | 15 三軒屋6号墳 |
| 16 広江北2号墳 | 17 広江北1号墳 | 18 川越山城跡 | 19 広江東古墳 | 20 溝池北古墳 |
| 21 相引池遺跡 | 22 曽原西古墳 | 23 西ノ山遺跡 | 24 曽原西遺跡 | |
| 25 曽原天王山中世墓群 | | 26 前山遺跡 | 27 瓶焼谷窯跡群 | |

第15図 周辺の遺跡 (S=1/25,000)

は、湾戸古墳群、三軒屋古墳群、広江北古墳群、広江南古墳群、溝落谷古墳群、馬乗場古墳群、横山古墳群などが所在している。製塙集落と密接に関連する形で、それぞれの古墳群が形成されていることが読み取れる。これらの古墳については開発に伴う調査例も多く、金浜古墳、古城池南古墳、湾戸7号墳が調査されている。児島塩生に所在する金浜古墳⁽¹³⁾は、横穴式石室導入期の例としてよく取りあげられる古墳であり、須恵器の型式から6世紀半ばの年代が与えられている。また、鉄製のヤスなどの漁具を副葬することも海浜の古墳であることを際立たせている。古城池南古墳⁽¹⁴⁾は金浜古墳よりやや新しい時期の横穴式石室墳で、福田貝塚のすぐ東の尾根上に築かれている。製塙土器を精良化したような壺形の土師器が出土しており興味深い。湾戸7号墳⁽¹⁵⁾は須恵器の型式から6世紀後半頃に比定される横穴式石室墳である。金環や鉄刀・鉄鎌など比較的豊富な遺物が出土している。なお、広江・浜遺跡の背後に広江南古墳群等があるが、発掘調査は行われておらず、実態は不明である。また、広江南2号墳は、石室下部に大型の石材を横向きに置き、その上に小ぶりの石材を持送状に積むという古式の様相を示しており、興味深い。

奈良時代以降の遺跡として特筆すべきものに、帆塔様と呼ばれる石塔遺構がある。広江・浜遺跡の南の山腹には天石門別保布羅神社があり、その境内に祀られている。砂岩質で、形態から奈良時代のものと推定されており、解体修理の際に瓦塔の破片も出土している。古代の山岳仏教の波が早くから児島に広まっていたことをうかがい知ることができる遺跡である。また、広江・浜遺跡からは同時代の土師器・須恵器のほかに、縁釉陶器や灰釉陶器も出土しており、この地が奈良時代においても海上交通の要地であり、帆塔様のような仏教遺跡を営む母体となったことが推定されている⁽¹⁶⁾。

児島が本州島と陸続きになったのは、鎌倉時代以降のことと考えられている⁽¹⁷⁾が、戦国時代になると備前の宇喜多氏と安芸の毛利氏による争奪の場となった。このことは陸続きとなつてもなお児島が瀬戸内海の海上交通の要衝として機能していたことを示している。児島西岸に位置する本太城はその帰属を巡って数度の合戦を伝えており、児島、ひいては備前・備中南部の国境周辺を抑える軍事拠点として重視されていたことが、毛利家の文書などから示されている⁽¹⁸⁾。広江地区にも三軒屋集落の北西、標高約175mの山頂に川越山城跡が所在している。数段に築かれた郭の周間に畝状堅堀群が存在しており、毛利氏の関与が指摘されている。本太城との連携を視野に築かれた城郭であろう。

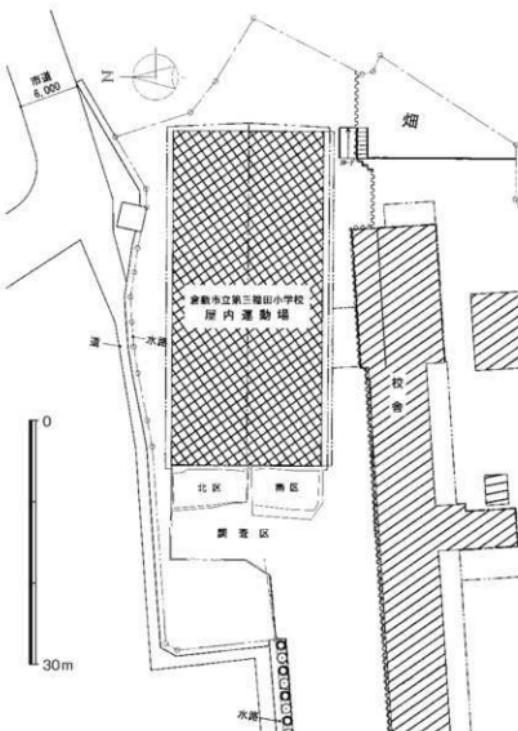
第2節 調査に至る経緯と経過

広江・浜遺跡の発掘調査は、1971年（昭和46）に建設された倉敷市立第三福田小学校屋内運動場（体育館）の耐震補強工事を契機として実施した。同小学校は、水島臨海工業地帯の完成に伴う人口増加に対応するため、倉敷市教育委員会により1966年（昭和41）に現在の場所に移転新築された。当初は、校舎1棟と管理棟を中心として運営されていたが、生徒数の増加により校舎の増築を余儀なくされ、校舎2棟と屋内運動場などが相次いで建設された。同校の敷地に所在する広江・浜遺跡については、1958年（昭和43）発行の『福田町誌』⁽¹⁹⁾に師楽式遺跡として紹介され、製塙土器に加えて土錘も出土していることから、製塙と漁業を営む集落として既に知られていたようである。しかし、遺跡に対する配慮がないまま建設設計画を進めたため、工事着工後に外部からの批判や指導を受けることになった。そして、倉敷考古館に緊急発掘調査を依頼して記録保存を行ったが、その後の行政的対応も適切では

なかつた⁴⁾。今回の発掘調査の契機となった屋内運動場についても事前の発掘調査がされないまま建設が進められているので、現在の建物の下において遺跡が破壊を受けて埋没している状態が想定される。そのような経緯から、2010年(平成22)に屋内運動場耐震補強工事の計画が倉敷市教育委員会教育施設課から提出されたときには、工事予定地に未調査の遺跡が残存していることを前提として協議を進めた。その計画の内容は、屋内運動場の西端部にある玄関、器具庫、更衣室を解体撤去して、同じスペースに改築するもので、その他の部分は構造体の補強工事のみであった。屋内運動場は学校施設であると共に災害時には地域住民の避難場所としても使用される重要な施設である。その建物の安全性を確保する目的で今回の工事が行われるため、やむを得ず改築部分の全面発掘調査を行い、記録保存することになった。

発掘調査は、平成22年8月10日から9月7日にかけて実施した。調査に先立ち、倉敷埋蔵文化財センター職員の立会のもとで既存の建物を解体撤去が行われた。建物各部屋の外周を巡るコンクリート基礎を抜き取る際には遺物包含層や海砂層の存在が確認された。該当する構造物を全て除去した後、いったん表面を均した状態で調査に着手した。調査にあたっては、調査区を南区と北区に分割して片方ずつ調査を進め、南区を先に終了させて工事の作業スペースや排土置き場として利用する方法をとった。南区の調査では、まず玄関および更衣室の外周を巡る基礎の掘り方を検出した。その幅は約1mで、調査区の南と西を広く占めるものであった。また、掘り方の底は海砂層に達していることを確認した。このような状況から、南区では明確な遺構は確認されなかったが、遺物包含層である黒色砂層を検出し、実測と写真撮影による記録を行った。

続いて調査を行った北区では、建物の基礎があまり深く入り込んでおらず、屋内運動場建設時の造成土等を除去すると、製塩土器、須恵器などの古墳時代後期の遺物や中世土器を含む層が



第16図 調査区全体図 (S=1/600)

検出された。それから順次掘り下げていくと、調査区南端で古墳時代後期の遺物を含む黒褐色砂質土の広がりが認められたため、調査区南側の拡張を検討した。北区と南区の間にある壁については、安全のため厚さを2.5m程度確保していたが、調査済みの南区はこのときまでに排土で埋まっていたので壁を薄くしても崩壊しないと判断し、北区の調査範囲を南側に約1.8m拡張して調査を進めた。炭化物を含む黒褐色砂質土の層は遺構の中の堆積物で、掘り下げて精査すると、床面は凹凸が激しいものの柱穴、火處を備えた隅丸方形の竪穴状遺構が確認された。平面的に確認された遺構は、この1基だけであったが、調査区西壁の断面観察により3基のピットを検出した。遺構等の実測や写真撮影を行った後、調査機材を撤収して現地調査を終了した。

<調査日誌抄>

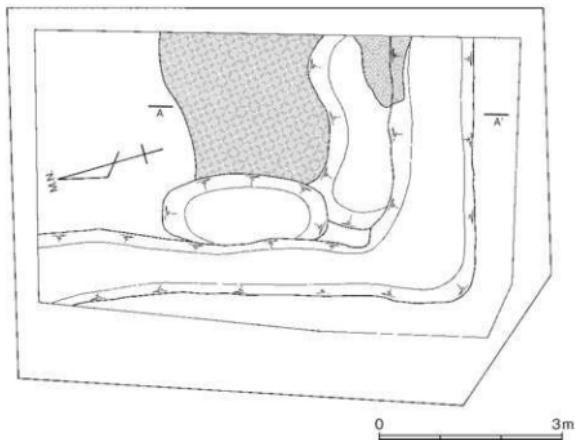
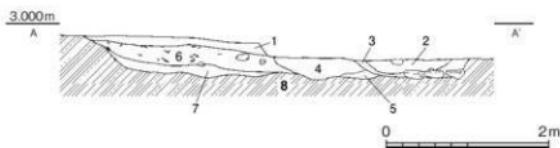
- 平成22年 8月10日 発掘機材搬入。南区から掘削開始。
 8月13日 建物基礎の抜取り跡を露出し、建設工事による破壊状況を把握。
 8月18日 遺物包含層の掘り下げ開始。断面観察用にサブトレーナーを設定。
 8月20日 遺物包含層平面・断面の写真撮影、実測。
 8月25日 完掘状況の写真撮影を行い、南区の調査終了。
 北区で重機による造成土の掘り下げ開始。
 8月27日 中世の包含層の掘り下げ開始。
 9月 1日 北区南端で古墳時代の包含層を検出し、調査範囲を南側に拡張。
 9月 3日 包含層の掘り下げ完了。竪穴状遺構を検出。
 9月 4日 遺構および北区全体の完掘状況を写真撮影。
 9月 7日 遺構の平面・断面図の実測と写真撮影を行い、調査終了。

第3節 調査の概要

1 調査区の概要

発掘調査は屋内運動場の玄関、器具庫、更衣室を解体撤去した場所を南区と北区に分けて実施した。南区の東壁は屋内運動場アリーナ部のコンクリート基礎が露出した状態で、南壁と西壁では、撤去した建物の基礎工事が基盤層の海砂層まで及んでいる。北壁の大部分も工事による搅乱が著しいため断面の観察は有意義でなかった。このように、調査区周間に破壊の跡が残る状況であるが、かろうじて中心部に遺物包含層が残っていた。落ち込みの中に堆積した黒褐色砂質土で、検出面の最高所は2.8m、厚さは20~25cmである。この層は炭化物を含んで固くしまっており、古墳時代後期の製塙土器、土師器、須恵器、鉄製品や獸骨などが出土した。複数の土器片が炭混じりの砂といっしょに固着し、塊の状態で出土する状況がしばしば観察された。遺物包含層は調査区の東側、アリーナ部にも延びていると考えられる。

北区の調査では、建物の基礎工事の影響が少ない中心部のみを調査対象としたため、調査区の東壁以外で地層堆積のようすを観察することができた。基本層序を西壁断面でみると、建物解体工事に伴い搅乱した造成土(1層)、屋内運動場建設前の旧耕作土(2層)、近世の遺物を含む層(4、5層)、古墳時代から中世の遺物を含む層(8層)、縄文時代から古墳時代の包含層(17層)、ほとんど遺物を含

第17図 南区平面図 ($S=1/80$) 線点部分は、遺物包含層の分布

- | | |
|-----------------|---------------------|
| 1 灰黄褐色砂質土 | 5 暗オリーブ褐色砂質土 |
| 2 黒褐色土（基礎の抜取り跡） | 6 黒褐色砂質土（遺物包含層） |
| 3 黒褐色土（基礎の敷石層） | 7 暗オリーブ褐色砂質土（遺物包含層） |
| 4 褐色土（擾乱層） | 8 黄褐色細砂（海砂） |

第18図 南区包含層断面図 ($S=1/60$)

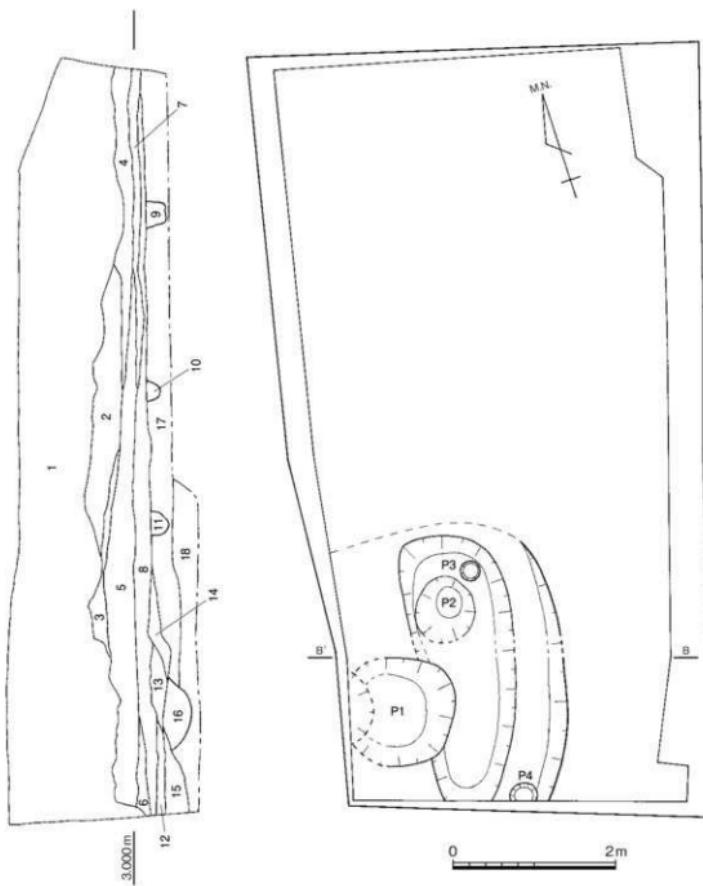
まない海砂層(18層)である。17層、18層は2種の砂が互層となり縞状を呈している。これらの層に含まれる遺物の密度は低い。一方、調査区南端で検出された古墳時代後期の竪穴状遺構の中に堆積した土層(12~16層)には比較的多くの土器類が含まれている。

2 遺構

南区で検出された古墳時代後期の包含層である黒褐色砂質土の分布は、一定の範囲に収まると考えられ、遺構内に堆積したものである可能性も考えられたが、上部が破壊され、限られた部分の調査であったため断定できない。今回の調査で明確な遺構として検出されたのは、北区の竪穴状遺構1基だけであった。

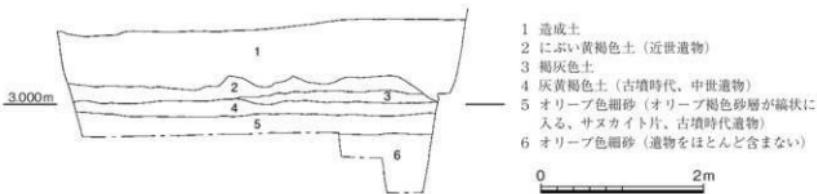
竪穴状遺構

遺構の北東部分が検出された。北側の輪郭が不明瞭であるが、想定される平面形は隅丸方形である。竪穴住居に見られるような壁体溝は確認されなかったが、建物の可能性が高いと思われる。竪穴の中付近に130cm×120cmくらいの浅い不整円形の土坑(P1)を設け、その東側は長さ3.3m、幅1mの

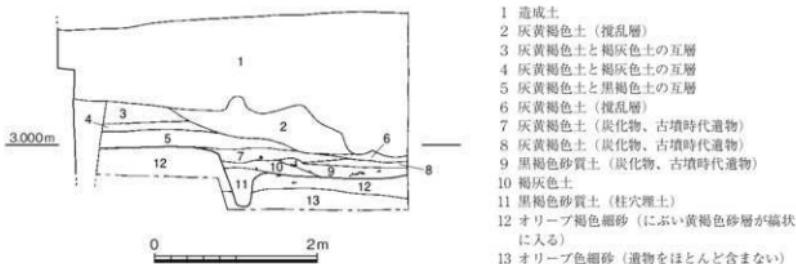


- 1 造成土
- 2 暗黄褐色土（擾乱層）
- 3 にぶい黄褐色土（擾乱層）
- 4 にぶい黄褐色土（中・近世遺物）
- 5 にぶい黄褐色土（中・近世遺物）
- 6 灰黄褐色土
- 7 灰黄褐色土（古墳時代、中世遺物）
- 8 灰黄褐色土（古墳時代、中世遺物）
- 9 オリーブ褐色細砂（ピット埋土、にぶい黄褐色砂層が蘆状に入る）
- 10 オリーブ褐色細砂（ピット埋土、にぶい黄褐色砂層が蘆状に入る。製塙土器）
- 11 オリーブ褐色細砂（ピット埋土、にぶい黄褐色砂層が蘆状に入る）
- 12 黒褐色砂質土（サスカイト片、古墳時代遺物）
- 13 黑色砂質土（炭化物、サスカイト片、古墳時代遺物）
- 14 黄褐色細砂（にぶい黄褐色砂層が蘆状に入る。サスカイト片、古墳時代遺物）
- 15 オリーブ褐色細砂（にぶい黄褐色砂層が蘆状に入る）
- 16 黄褐色細砂（ピット埋土、にぶい黄褐色砂層が蘆状に入る）
- 17 オリーブ褐色細砂（オリーブ褐色砂層が蘆状に入る。サスカイト片、古墳時代遺物少量）
- 18 オリーブ色細砂（遺物をほとんど含まない）

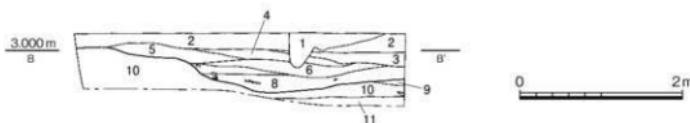
第19図 北区平面図・西壁断面図 (S=1/60)



第20図 北区北壁断面図 (S=1/60)



第21図 北区南壁断面図 (S=1/60)



- 1 黄灰色細砂（擾乱坑）
- 2 にぶい黄褐色土（中・近世遺物）
- 3 灰黄褐色土（古墳時代・中世遺物）
- 4 暗灰黃色土
- 5 黄灰色土と暗灰黃色土の互層
- 6 暗灰黃色砂質土（古墳時代遺物）
- 7 黑褐色砂質土（炭化物、古墳時代遺物）
- 8 黑褐色砂質土（炭化物、サスカイト片、古墳時代遺物）
- 9 黄褐色細砂（にぶい黄褐色砂層が縞状に入る。サスカイト片、古墳時代遺物）
- 10 オリーブ色細砂（オリーブ褐色砂層が縞状に入る。サスカイト片、古墳時代遺物少量）
- 11 オリーブ色細砂（遺物をほとんど含まない）

第22図 北区遺構断面図 (S=1/60)

範囲で窪んでいる。豊穴の北東端には柱穴(P3)があり、そこから南2.8mの位置に柱穴(P4)がある。また、P1の西端は別の深い土坑によって切られている(西壁断面16層)ようである。P1の中には炭を含んだ焼土が入り、そこを中心として火を炊いた跡が明瞭である。床面上に残されたような遺物は認められなかつたが、時期は6世紀後半と推定される。

3 遺物

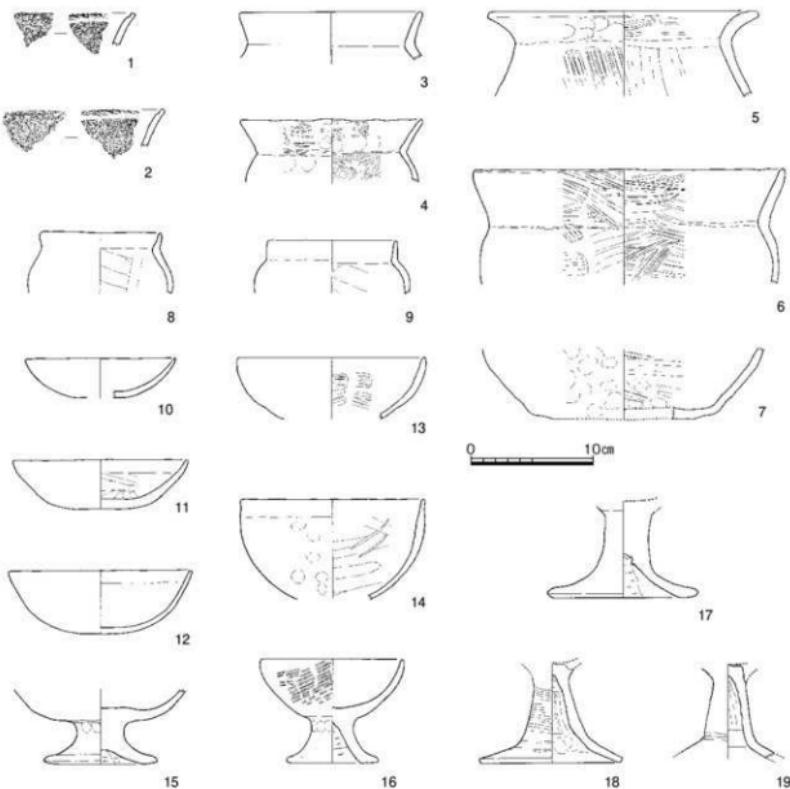
(1) 南区包含層の出土遺物(第23図～第28図)

縄文土器(第23図1・2)

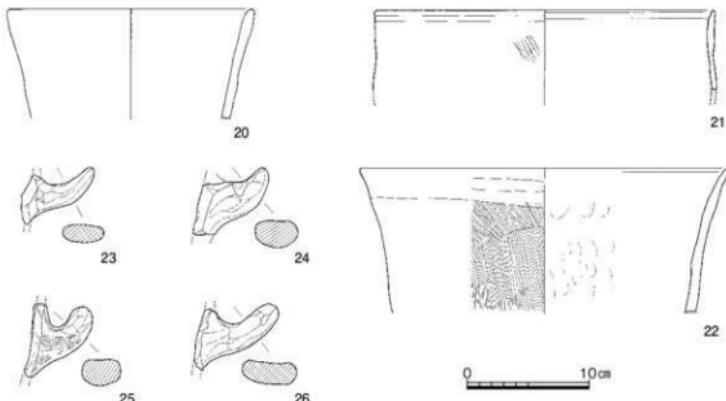
1・2は同一個体の可能性がある。口縁端の内側に無節縄文Rを横方向に回転施文し、下端に沈線を引いている。後期の彦崎KII式と推定される。

土師器(第23・24図3～26)

4～17は粗雑な作りが特徴的で、これまでにも「師楽的土師器」として報告された粗製の土器である。8・9は小型丸底壺で、口縁部外面にはタタキ調整の跡がみられる。10～14は鉢で、14は高杯の杯部の可能性もある。いずれも外面は砂粒が目立ち、ざらついた感じの器表であるが、内面はていねいなナデ調整が行われている。15～17は粗製の高杯である。15は脚部内面で工具を回しながら



第23図 南区包含層出土遺物1 (S=1/4)



第24図 南区包含層出土遺物2 (S=1/4)

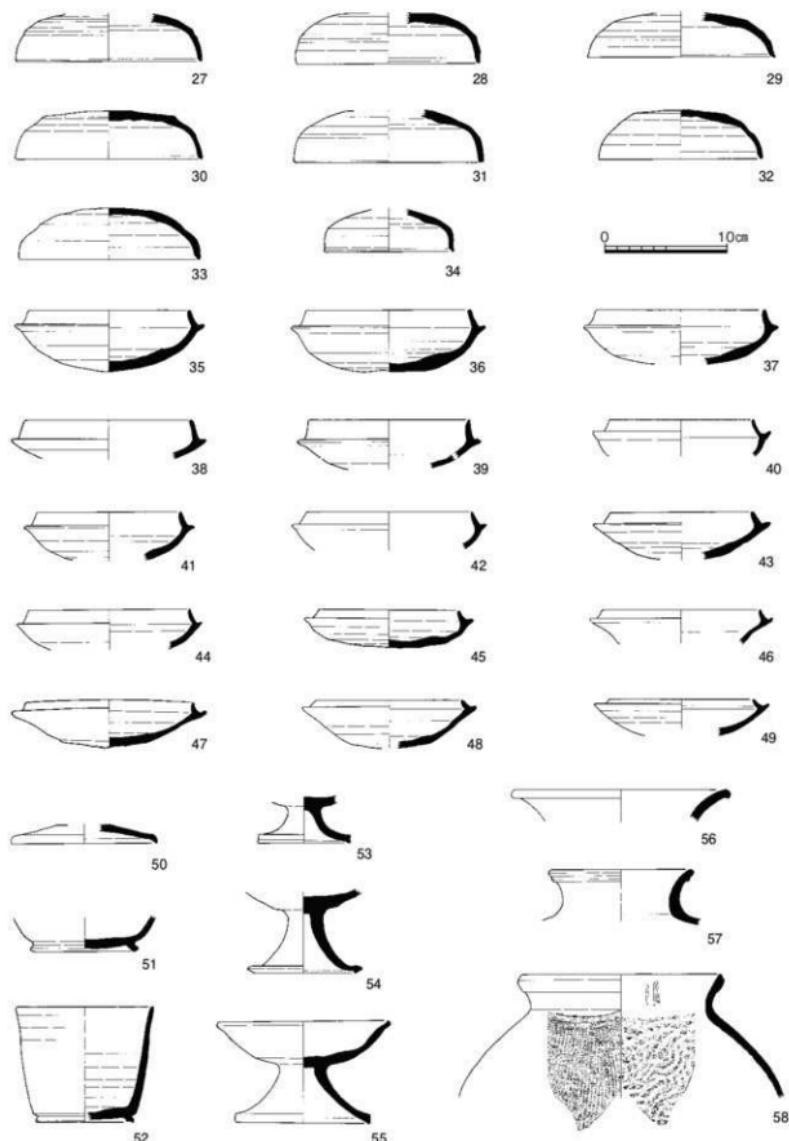
粘土を削り取って成形している。18・19は一般的な高杯と同じ作りであるが、筒部の内面にはケズリ調整が行われておらず、シボリ目が残る。20～22は小片のため器種を断定できないが、瓶の可能性がある。23～26は舌状の把手である。23～25は瓶あるいは壺に付く把手と思われる。26は他と比べてやや大ぶりで作りも粗いことから移動式カマドに付くもの可能性がある。

須恵器(第25・26図27～59)

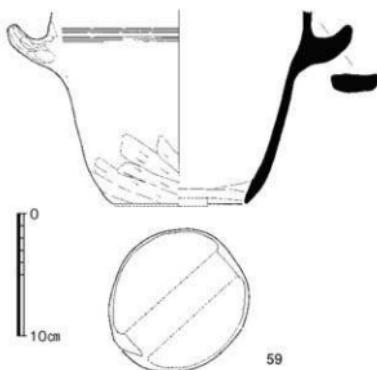
27～33は杯蓋である。32の口径は13.4cm、器高4.0cmで、33の口径は14.8cm、器高4.2cmを測る。34は短頭壺の蓋であろう。35～49は杯身である。36の口径は13.5cm、受部の径は14.8cm、器高5.0cmを測る。45の口径は11.5cm、受部の径は13.0cm、器高3.1cmを測る。50は杯の蓋と思われる。破片の状態で火を受けている。52は高台の付く杯身で、復元口径11.3cm、器高9.5cmを測る。55は短脚が付く高杯で、完形に近い。杯部の口縁端部内側を上方に少し拡張している。59は瓶で、実測図は復元案である。胴部には2条の浅い沈線がめぐり、その位置に舌状の把手が付く。底部は、蒸気を通すために半月形の孔を2つあけ、幅約3cmの粘土板を中心へ残した形態と考えられる。

製塙土器(第27・28図60～87)

製塙土器はすべて口縁部外面にタタキ調整が施され、胴部内面は比較的ていねいにナデ調整されている。器形については、67のように丸底ボウル状のものが大半を占めると考えられるが、小型でやや平底気味の81・82もある。60～71は平行タタキ目が横方向に付くもので、最も出土量が多い。72～76は横方向の平行タタキ目に縦線や斜線が加わる。74には右上がり斜線3条、75にはX字状の線、76にはW字状の線がそれぞれ組み合わさる。77～82には右上がりの平行斜線文が付く。83は左上がりの平行斜線に横線が加わる。84は向きの異なる平行斜線が組み合わさる。小片のため掲載しなかった出土遺物の中には、横線より上が左上がり斜線、下が右上がり斜線となる矢羽根状のタタキ目が付くものもある。また、横方向の平行タタキ目と格子目を組み合わせたものも認められる。87は細かい斜格子のタタキ目が付く。



第25図 南区包含層出土遺物3 (S=1/4)



第26図 南区包含層出土遺物4 (S=1/4)

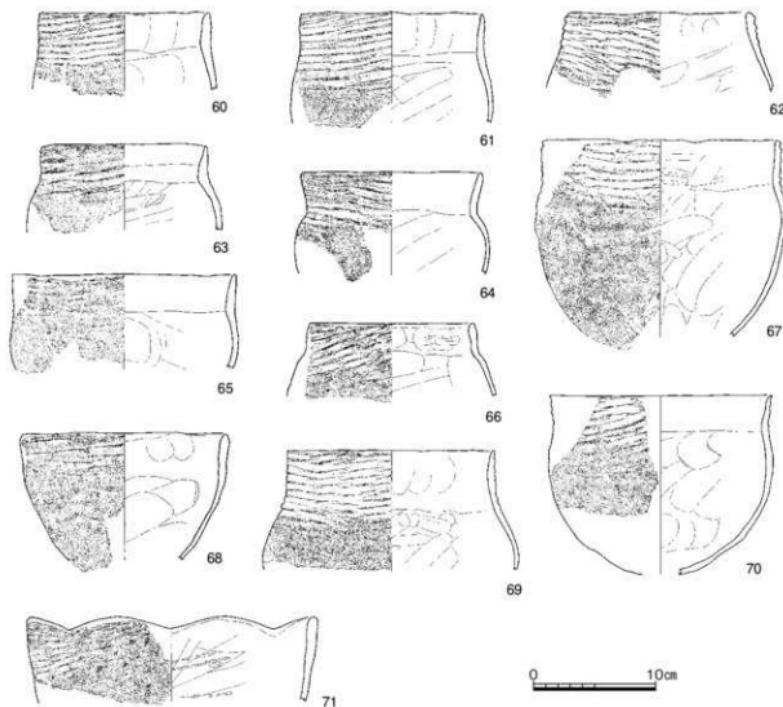
その他(第28図89~91)

88~90は管状土錘である。今回の調査で出土した土錘はすべて管状土錘の破片で、出土量は少ない。91は土師質の移動式カマドで、掛口と底を含む部分と推定した。口縁端内側には段を有する。

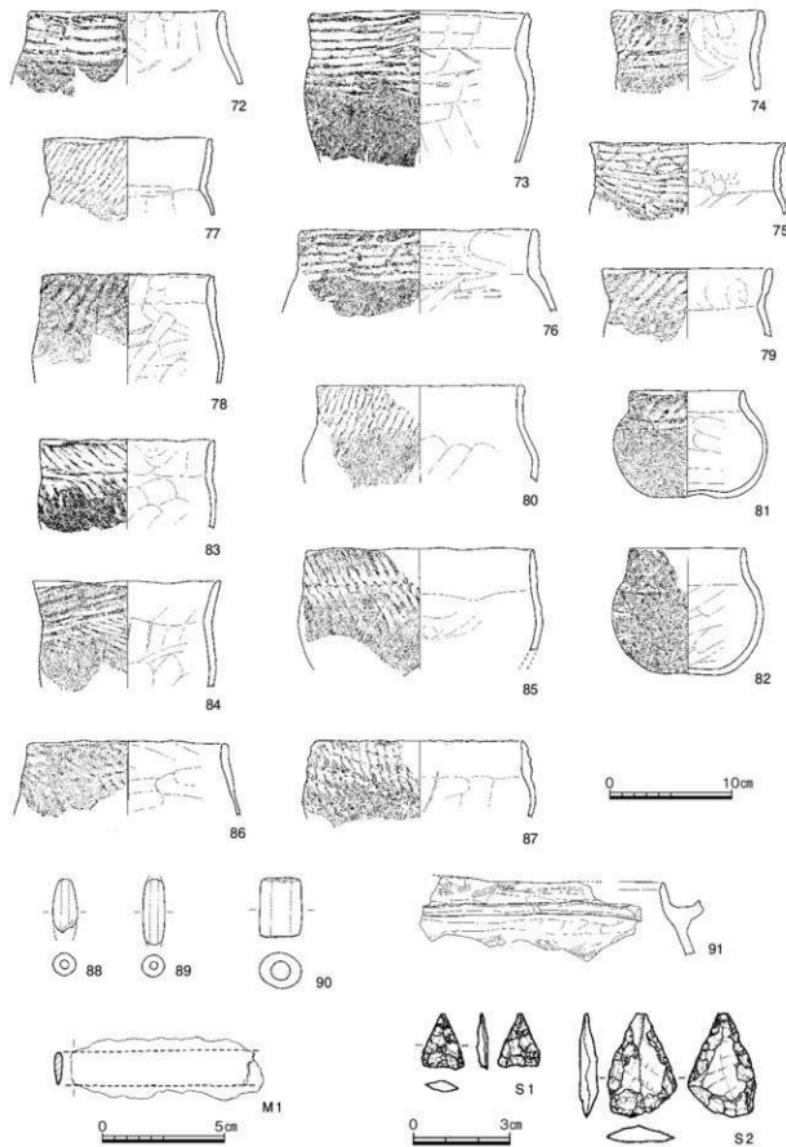
金属製品・石器(第28図)

M1は刀子の破片と推定される鉄製品であるが、銹化が著しく、断面以外の形状が明確でない。残存長7.9cm、幅1.3cm、厚さ0.3cmである。

サスカイト製石器・剥片等は25点が出土している。サスカイトの総重量は185.90gである。器種として明確なものは石鎌1点、石鎌未製品1点



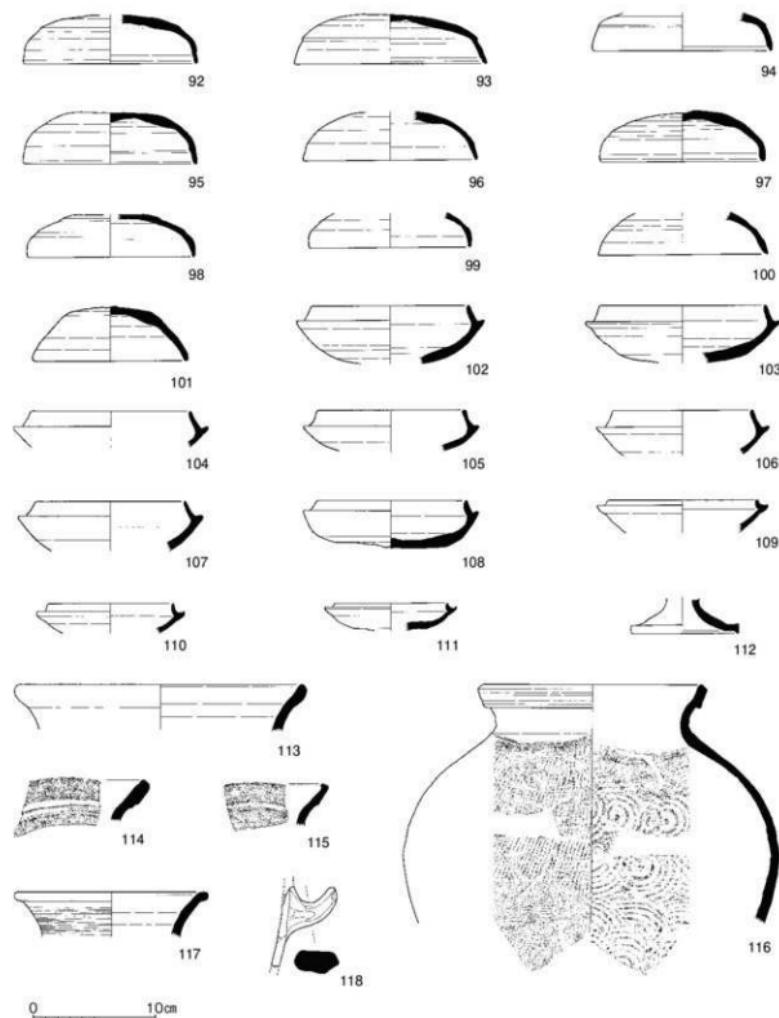
第27図 南区包含層出土遺物5 (S=1/4)



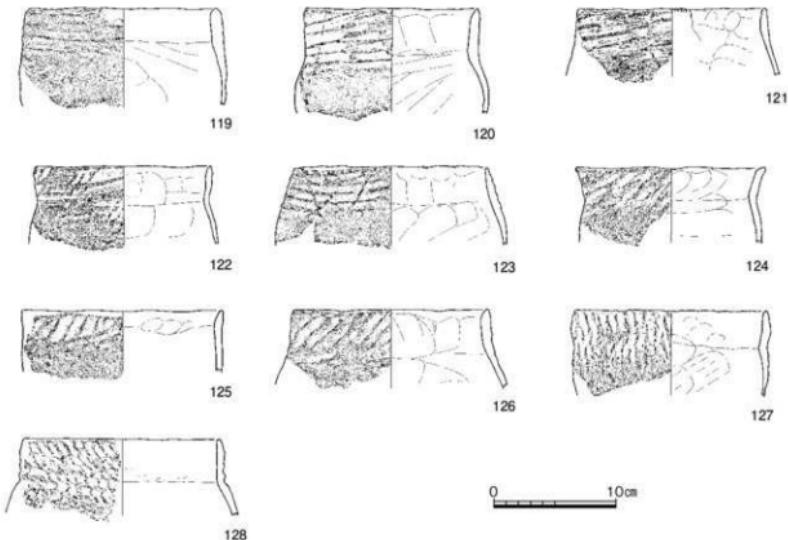
第28図 南区包含層出土遺物 6 (S=1/4 · 1/2 · 2/3)

である。

S1はサヌカイト製の平基盤である。重さ0.52gと小型で、二等辺三角形を呈している。S2はサヌカイト製の石鏡未製品と考えられる。重量は3.25gあり、大型の石鏡を作ろうとしたものと思われる。



第29図 北区竪穴状遺構出土遺物1 (S=1/4)



第30図 北区竪穴状遺構出土遺物2 (S=1/4)

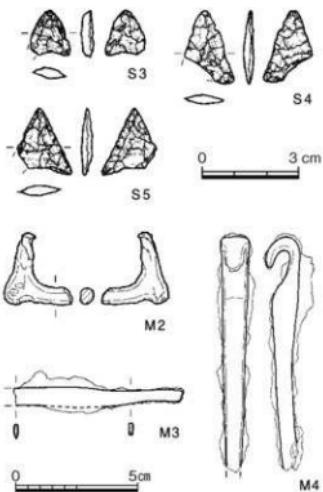
(2) 北区竪穴状遺構内の出土遺物 (第29図～第31図)

須恵器 (第29図92～118)

92～101は杯蓋である。92は回転ヘラケズリを施す天井部と口縁部の境に強い回転ナデを加えることにより稜線を生じさせている。口縁部内側には浅い段を有し、端部を丸くおさめる。93・94は天井部と口縁部の境に退化した稜をもち、口縁端部内側には鈍い沈線がめぐる。93の口径は15.6cm、器高4.0cmを測る。95の口径は14.2cm、器高4.2cmを測る。97の口径は13.4cm、器高4.0cmを測る。101の復元口径は12.6cm、器高4.4cmを測る。102～111は杯身である。108は完形品で、口径は12.2cm、受部の径は13.4cm、器高3.8cmを測る。112は高杯の脚部、118は瓶の把手と思われる。

製塙土器 (第30図119～128)

119～121は平行タタキ目が横方向に付くもので、120・121には縦線が間隔をあけて付加する。122には横方向の平行線に右上がり斜線3条が、123にはV字状の線がそれぞれ組み合わさる。124～126のタタキ目は



第31図 北区竪穴状遺構出土遺物3 (S=2/3・1/2)

右上がりの平行斜線、127は矢羽根状、128は細かい斜格子となっている。

石器・金属製品（第31図）

サスカイト製石鎌3点・剥片9点の計12点が出土している。いずれも埋土からの出土で遺構に伴うものではないと考えられる。サスカイトの総重量は14.11gである。

S3～S5はサスカイト製の石鎌である。いずれも抉りの浅い凹基鎌のようである。S3は小型だが、やや厚手である。S4は基部の大半を失っているが、若干の抉りが認められる。S5は正三角形状で鋭い逆刺を持っている。

金属製品は3点を図化した。M2は青銅製品である。鋳造時の湯口や湯道の破片ではないかと推定される。長2.31cm、幅2.15cm、断面の厚さ0.55cm、重さ8.55gである。

M3は刀子の破片で、残存長6.45cm、幅0.7cm、厚さ0.2cmである。先端部を欠失している。

M4は長さ9.6cm以上の鉄釘である。断面は方形であるが、錆化が著しく明確でない。頭部は素材を叩いて延ばした後に、折り曲げて製作されているようである。

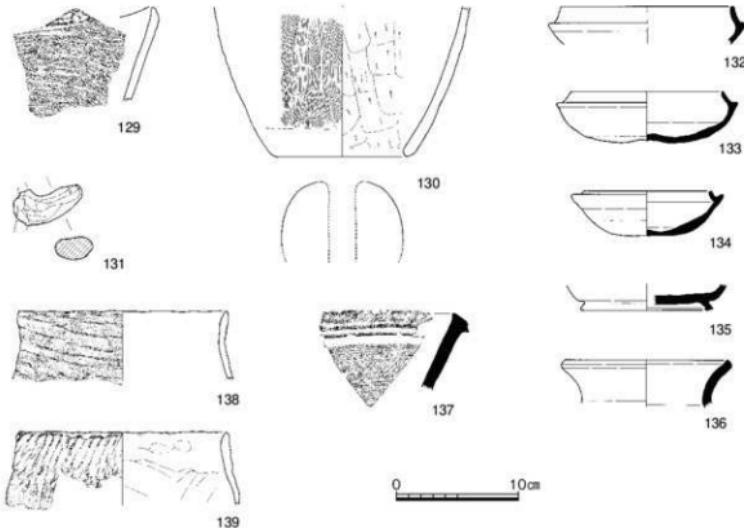
（3）北区包含層の出土遺物（第32～34図）

縄文土器（第32図129）

129は波状口縁をもつ深鉢である。波長部先端に何かを押捺したような文様があるが、詳細は不明。器面調整は内外面とも二枚貝条痕の後、粗いミガキ調整を行っている。

土器（第32図130・131）

130は瓶と思われる。底部が簡抜けの形状ではなく、半月形の孔を2つあけるものと推定される。



第32図 北区包含層出土遺物1 (S=1/4)

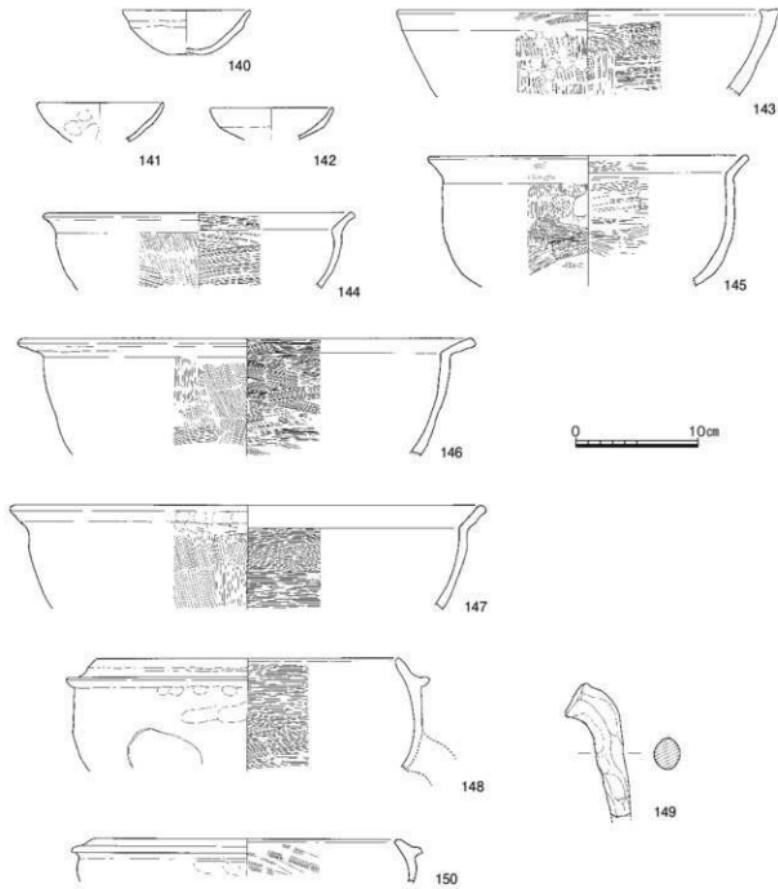
131は舌状の把手で、甌あるいは甌に付くものと思われる。

須恵器（第32図132～137）

132～134は杯身である。133の口径は10.6cm、受部の径は11.5cm、器高3.7cmを測る。135は高台付きの杯で、内面には丁寧な仕上げナデが施される。137は鉢と考えられる。カキメ工具の小口により斜線文を連続させる。

製塙土器（第32図138・139）

138は横向方向の平行タタキ目、139は右上がり平行斜線のタタキ目が付く。



第33図 北区包含層出土遺物2 (S=1/4)

中世の土器(第33図140~150)

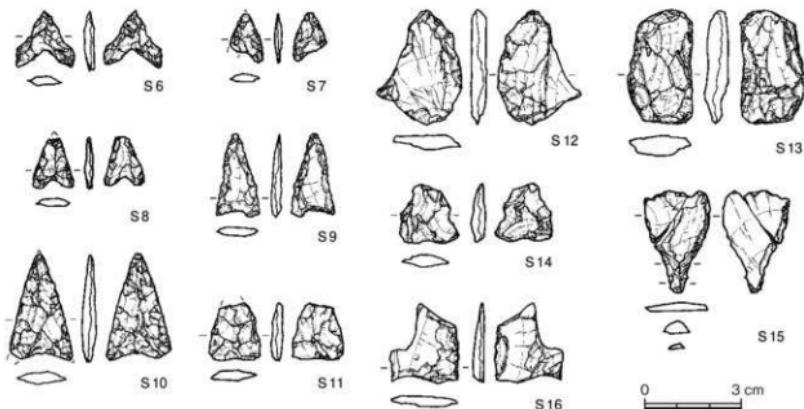
140~142は土師器椀である。140の底部には指押さえによる凹みが生じている。141の口縁部内面にはスヌが付着する。143は土師質の擂鉢で、内面には4本を一単位とする条線が垂下する。144~147は土師器の鍋で、144~146の外面にはスヌが付着する。148は土師器の羽釜で、外面に剥離痕がみられることから、149のような脚が付くと思われる。150は瓦質土器の羽釜で、内湾する口縁部に鈎を有する。

石器(第34・35図)

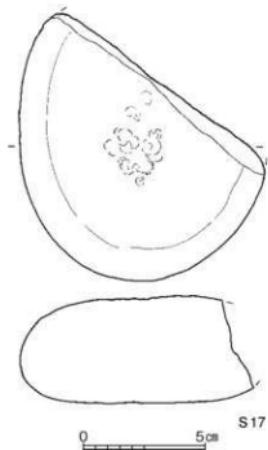
北区包含層からはサスカイト製石鎌・剥片など計106点と姫島産と推定される黒曜石製剥片1点、閃緑岩製の磨石類1点が出土している。サスカイトの総重量は242.82g、黒曜石剥片の重量は1.07gである。器種として明確なものは石鎌6点、石鎌未製品4点、石錐1点、二次加工痕跡のある剥片1点、磨石類1点である。

S6~S11はサスカイト製の石鎌である。S6~S10は凹基鎌で、抉りの浅いものが多い。S6はやや幅広で、側縁部が先端から基端に向かって内湾し、基端の手前でもう一度内側に屈曲する形状を呈する。S9は継長で、周辺部にのみ調整加工を施している。S10は重量1.92gとやや大型で、整った二等辺三角形状を呈している。S11は先端を失った平基鎌である。S12~S14はサスカイト製の石鎌未製品と考えられる。S13は厚さ0.96mmと厚手で、石鎌以外の未製品の可能性もある。S15はサスカイト製の石錐である。刃部を細長く作り出したものではなく、素材剥片の形状をある程度とどめている。刃部断面は三角形に成形されているが、使用痕が明瞭でなく、未使用品の可能性もある。S16は二次加工痕跡のある剥片である。薄手の剥片の一側縁に加工が認められる。

S17は閃緑岩製の磨石類である。大きく欠損しているが、楕円形の扁平な礫を利用しておらず、敲打痕1か所が認められ、台石として使用されたことがわかる。また、敲打痕の有る面とその対面はよく磨かれており、磨石としても利用されたことがわかる。



第34図 北区包含層出土遺物3 (S=2/3)



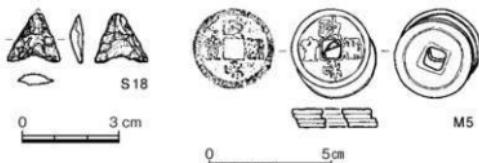
第35図 北区包含層出土遺物4
(S=1/2)

(4) 北区造成土ほかの出土遺物(第36図)

石器・金属製品(第36図)

S18は調査廃土中から採取されたサヌカイト製の石鎌である。抉りの浅い凹基鎌で鋭い逆刺を持っている。

M5は造成土から出土した青銅鏡である。4枚が重なって張り付いており、1枚目は「政和通寶」である。1111年に北宋で鋳造されたものである。「政和通寶」は直径2.52cm、厚さ0.15cm、孔の一辺は0.58cmである。4枚の総重量は15.13gである。



第36図 北区造成土ほか出土遺物(S=2/3・1/2)

第4節まとめにかえて

今回の調査では、南区で検出された炭化物を含む遺物包含層から古墳時代後期の製塩土器や生活に係わる土師器、須恵器等が出土した。製塩土器は、破片が何枚か重なり合って固着しているものもあり、炭や灰とともに炉から排出された状況がうかがえた。検出された主な遺構は、6世紀後半と推定される竪穴状遺構1基である。柱穴の存在から建物と考えられ、中央には火處がある。埋土からの出土遺物は須恵器杯類が中心で、土師器は汎化できないほどの小片がわずかにみられた。包含層からは最も多く出土する製塩土器は不自然と思われるほど量が少ない。床面付近には目立った遺物はなかった。製塩作業との関わりで考えてみた場合、この遺構は鹹水を土器に入れて煮詰める行程(煎熬)を行った炉であるか、作業員のための炊事場かといった候補が挙げられる。煎熬作業を行えば、製塩土器の被熱で破碎、剥離したものが残るであろうし、山土などを用いて炉床を構築した様子も認められないことから後者の可能性が高いと思われる。平成2年に実施した校舎増築に伴う調査では、造り付けカマドを備えた建物跡が検出された。限られた範囲の調査のため詳細はわからないが、建物は竪穴式住居に準ずるもので、用途は作業員用の炊事場と考えた。遺構の廃絶後は製塩土器、土師器、須恵器が廃棄されている。時期は今回の竪穴状遺構よりやや古い6世紀中頃と推定される。海辺の作業場に近い場所でこのような生活に係わる施設が併存することは、作業員が住み込みのような状態で、一定期間おそらくは夏場に集中して操業したのであろう。

註

- (1) 倉敷市歴史年表編集委員会「倉敷市歴史年表」倉敷市教育委員会 1978
- (2) 鎌木義昌「岡山県鷺羽山遺跡調査報告」「石器時代」第3号 1968
　　山本慶一「鷺羽山遺跡の石器と土器」「倉敷考古館研究集報」第6集（財）倉敷考古館 1969
- (3) 泉 扃良・松井 寧「福工具塚資料（山内清男考古資料2）」奈良国立文化財研究所 1989
- (4) 間壁忠彦・間壁蘿子・小野一臣・藤田憲司「広江・浜遺跡」「倉敷考古館研究集報」第14集 1979
- (5) 小野雅明「第3章 溝落遺跡」「朝原寺跡2・溝落遺跡」倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告 第15集 2013
- (6) 梅原末治「岡山県下発見の銅鐸」「吉備考古」第82号 1951
- (7) 梅原末治「瓊加山出土の銅劍」「吉備考古」第78・79号 1951
- (8) 間壁忠彦・間壁蘿子編「新修倉敷市史 第一巻 考古」倉敷市 1996
- (9) 多和和彦「児島市宇頭間の古墳群について」「吉備考古」第85号 1957
- (10) 小野雅明「第2章 広江・浜遺跡」「広江・浜遺跡 南山21号墳」倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告 第14集 2011
- (11) 小野雅明「塙生遺跡発掘調査報告」「倉敷埋蔵文化財センター年報」1 倉敷埋蔵文化財センター 1994
　　鍛谷守秀「塙生遺跡確認調査報告」「倉敷埋蔵文化財センター年報」11 倉敷埋蔵文化財センター 2008
- (12) 鍛谷守秀「通生遺跡確認調査報告」「倉敷埋蔵文化財センター年報」11 倉敷埋蔵文化財センター 2008
- (13) 鍛谷守秀編「古城池南古墳」倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告 第9集 2000
- (14) 間壁忠彦・間壁蘿子・藤田憲司・小野一臣「金浜古墳」「倉敷考古館研究集報」第14集 1979
- (15) 片岡弘至・鍛谷守秀「湾戸7号墳」倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告 第7集 1998
- (16) 久野修儀編「新修倉敷市史 第二巻 古代・中世」倉敷市 1999
- (17) 福田町誌編集委員会「福田町誌」福田町誌刊行委員会 1958

出土遺物観察表

1. 土器観察表

番号	出土位置	種別	器種	法量(cm)	特徴	砂粒の 径(mm)	色調 上段:外面 下段:内面	焼成	残存
1	南区包含層	縄文土器	鉢		口縁部内面に沈線と無節縄文R	1~2	にぶい赤褐色 5YR5/3 黒褐色 5YR3/1	良好	口縁部小片
2	南区包含層	縄文土器	鉢		口縁部内面に沈線と無節縄文R	1~2	にぶい赤褐色 5YR5/3 黒褐色 5YR3/1	良好	口縁部小片
3	南区包含層	土師器	甕			1以下			
4	南区包含層	土師器	粗製・甕	口径(15.0)	口縁部外面ハケメ、内面ナデ 胴部外面ナデ、内面ハケメ	1以下	橙色 5YR7/6 灰黃褐色 10YR5/2	良好	1/6
5	南区包含層	土師器	粗製・甕		口縁部外面粗いナデ、内面ナデ 胴部外面粗いハケメ、内面ヘラケ ズリ	1~2	明赤褐色 5YR5/6 にぶい橙色 10YR7/4	良好	口縁部小片
6	南区包含層	土師器	粗製・甕	口径(25.2)	口縁部外面ハケメ後ナデ、内面ハ ケメ 胴部外面ハケメ後ナデ、内面ハケ メ	1~2	にぶい黄褐色 10YR6/4 にぶい黄褐色 10YR6/4	良好	口縁部小片
7	南区包含層	土師器	粗製・甕	底径(15.0)	外周指頭痕 内面ナデ	1~2	明赤褐色 25YR5/6 橙色 7.5YR7/6	良好	底部1/6
8	南区包含層	土師器	粗製・ 小型丸底甕	口径(9.8)	口縁外面上平行タキ後ナデ 内面ナデ	1以下	橙色 7.5YR7/6 明赤褐色 10YR6/3	良好	口縁部1/6
9	南区包含層	土師器	粗製・ 小型丸底甕	口径(10.4)	口縁外面上平行タキ後ナデ 内面ナデ	1~2	にぶい黄褐色 10YR6/3 灰黃褐色 25YR7/2	やや不良	口縁部1/2
10	南区包含層	土師器	粗製・杯	口径(12.2) 器高(3.2)	外周ナデ、指頭痕 内面ナデ	1~2	にぶい橙色 25YR6/8 にぶい橙色 25YR6/8	良好	1/6
11	南区包含層	土師器	粗製・杯	口径(14.2) 器高(4.0)	外周ナデ、指頭痕 内面ナデ	1~2	にぶい黄褐色 10YR7/2 淡黄色 25YR8/3	良好	1/6
12	南区包含層	土師器	粗製・杯	口径(15.0) 器高(5.2)	外周ナデ、指頭痕 内面ナデ	1~2	にぶい黄褐色 10YR6/3 灰白色 25YR7/1	やや不良	1/4
13	南区包含層	土師器	粗製・杯?	口径(15.0)	外周ナデ、指頭痕 内面ハケ後ナデ	1~2	橙色 5YR6/6 橙色 5YR6/6	良好	1/6
14	南区包含層	土師器	粗製・杯	口径(15.0)	外周ナデ、指頭痕 内面ナデ	1~2	にぶい黄褐色 10YR7/4 灰黃褐色 10YR6/2	良好	1/6
15	南区包含層	土師器	粗製・高杯		杯部外面ナデ、内面ナデ 脚部外面ナデ、内面ケズリ	1~2	橙色 25YR7/6 橙色 25YR7/6	良好	口縁部を欠く
16	南区包含層	土師器	粗製・高杯	口径(11.6) 器高(8.4)	杯部外面ハケメ後ナデ、内面ナデ 脚部外面ナデ、内面ケズリ	1~2	にぶい橙色 5YR6/4 にぶい橙色 7.5YR7/3	良好	脚部の5/6を欠く
17	南区包含層	土師器	粗製・高杯		脚部外面ナデ、内面ケズリ	1~2	浅黃褐色 10YR8/3 浅黃褐色 10YR8/3	良好	杯部を欠く
18	南区包含層	土師器	高杯		脚部外面ハケメ後ナデ、内面シボ リメ、指頭痕	1~2	にぶい黄褐色 5YR5/4 にぶい黄褐色 5YR5/4	良好	杯部を欠く
19	南区包含層	土師器	高杯		脚部外面ハケメ後ナデ、内面シボ リメ、指頭痕	1~2	にぶい赤褐色 5YR5/4 にぶい赤褐色 5YR5/4	良好	脚部小片
20	南区包含層	土師器	甕?	口径(20.2)	内面ナデ	1~2	にぶい黄褐色 10YR6/4 にぶい黄褐色 10YR6/4	良好	口縁部小片
21	南区包含層	土師器	甕?	口径(28.0)	外周ハケメ後ナデ、内面ナデ	1~2	橙色 5YR6/6 橙色 5YR6/6	良好	口縁部小片
22	南区包含層	土師器	甕?	口径(30.2)	外周ハケメ、内面粗いナデ 口縁部の外周面にス付着	1~2	橙色 5YR6/6 にぶい橙色 7.5YR6/4	良好	口縁部・脚部上位1/6
23	南区包含層	土師器	甕または甕?			1~2	浅黃褐色 10YR8/3 浅黃褐色 10YR8/3	良好	把手
24	南区包含層	土師器	甕または甕?			1~2	にぶい黄褐色 10YR7/4 にぶい黄褐色 10YR7/4	良好	把手
25	南区包含層	土師器	甕または甕?		外周ハケメ	1~2	橙色 7.5Y7/6 橙色 7.5Y7/6	良好	把手
26	南区包含層	土製品?	移動式カマ ドの把手?			1~2	橙色 7.5Y7/6 橙色 7.5Y7/6	良好	把手
27	南区包含層	須恵器	杯蓋	口径(15.2) 器高(—)	天井部外面は回転ヘラケズリ。 その他のは回転ナデ。	1~2	灰色 7.5Y5/1 灰色 N4/0	良好	1/6
28	南区包含層	須恵器	杯蓋	口径(15.0) 器高(—)	天井部外面は回転ヘラケズリ。 その他のは回転ナデ。クロクロ右回転。	1~4	灰色 N5/0 灰色 N5/0	良好	1/6
29	南区包含層	須恵器	杯蓋	口径(15.4) 器高(—)	天井部外面は回転ヘラケズリ。 その他のは回転ナデ。クロクロ左回転。	1~2	灰色 N5/0 灰色 N6/0	良好	1/6

()内は復元値

番号	出土位置	種別	器種	法量(cm)	特徴	砂輪の径(mm)	色調 上段:外面 下段:内面	焼成	残存
30	南区包含層	須恵器	杯蓋	口径(15.2) 器高 4.0	天井部外面は回転ヘラケズリ。 その他は回転ナデ。ロクロ左回転。	1~4	灰色 N6/0 灰色 N6/0	良好	1/6
31	南区包含層	須恵器	杯蓋	口径(15.5) 器高 -	天井部外面は回転ヘラケズリ。 その他は回転ナデ。ロクロ右回転。	1~2	灰色 N5/0 灰色 N5/0	良好	1/6
32	南区包含層	須恵器	杯蓋	口径 13.4 器高 4.0	天井部外面はヘラ切り後ナデ。 その他は回転ナデ。	1~2	灰色 10Y6/1 灰色 N6/0	良好	1/2
33	南区包含層	須恵器	杯蓋	口径 14.8 器高 4.2	天井部外面は回転ヘラケズリ。 その他は回転ナデ。天井部内面には仕上げナデ。ロクロ右回転。	1~4	灰色 N6/0 灰色 N6/0	良好	ほぼ完形
34	南区包含層	須恵器	蓋	口径(10.6) 器高 -	天井部外面は回転ヘラケズリ。 その他は回転ナデ。ロクロ右回転。	1~2	灰色 7.5Y5/1 灰色 N6/0	良好	1/4
35	南区包含層	須恵器	杯身	口径(13.2) 直径(15.5) 器高 5.0	底部外面は回転ヘラケズリ。 その他は回転ナデ。ロクロ右回転。	1~4	灰色 N5/0 灰色 7.5Y5/0	良好	1/2
36	南区包含層	須恵器	杯身	口径(13.5) 直径 16.0 器高 5.0	底部外面は回転ヘラケズリ。 その他は回転ナデ。ロクロ左回転。	1~2	灰色 7.5Y6/1 灰色 7.5Y6/1	良好	3/4
37	南区包含層	須恵器	杯身	口径(13.8) 直径 15.9	底部外面は回転ヘラケズリ。 その他は回転ナデ。	1~2	灰色 5Y6/1 灰色 5Y6/1	良好	1/6
38	南区包含層	須恵器	杯身			1~2	灰色 N5/0 灰色 N5/0	良好	小片
39	南区包含層	須恵器	杯身	口径(13.2) 器高 -	外面に自然釉がかかる。ロクロ右回転。	1~2	灰色 N4/0 灰色 N4/0	良好	1/6
40	南区包含層	須恵器	杯身			1~4	灰色 N6/0 灰色 N6/0	良好	小片
41	南区包含層	須恵器	杯身	口径(11.8) 直徑(13.8)	底部外面は回転ヘラケズリ。その他は回転ナデ。ロクロ左回転。	1~2	灰色 N6/0 灰色 5Y6/1	良好	1/6
42	南区包含層	須恵器	杯身			1~2	灰色 N6/0 灰色 N6/0	良好	小片
43	南区包含層	須恵器	杯身	口径 10.6 直徑 12.5 器高 37	底部外面は回転ヘラケズリ。その他は回転ナデ。ロクロ右回転。	1~4	灰色 5Y6/1 灰色 5Y6/1	良好	1/6
44	南区包含層	須恵器	杯身		外面に自然釉がかかる。	1~2	灰色 N5/0 青灰色 5PB5/1	良好	小片
45	南区包含層	須恵器	杯身	口径 11.5 直徑 13.8 器高 31	底部外面は回転ヘラケズリ。 その他は回転ナデ。底部内面には仕上げナデ。ロクロ右回転。	1~4	灰色 N5/0 灰色 N6/0	良好	1/2
46	南区包含層	須恵器	杯身			1~2	灰色 N5/0 灰色 N5/0	良好	小片
47	南区包含層	須恵器	杯身	口径(13.8) 直徑(16.0) 器高 4.0	底部外面はヘラ切り後ナデ。その他は回転ナデ。底部内面には仕上げナデ。	1~2		良好	1/3
48	南区包含層	須恵器	杯身	口径(11.8) 直徑(14.2) 器高(4.0)	底部外面は回転ヘラケズリ。その他は回転ナデ。ロクロ右回転。	1~2	灰色 N4/0 灰色 N4/0	良好	1/6
49	南区包含層	須恵器	杯身			1~4	灰色 N5/0 灰色 N5/0	良好	小片
50	南区包含層	須恵器	杯蓋	口径(12.0)	回転ナデ。	1~2	灰色 N5/0 灰色 7.5Y5/1	良好	1/6
51	南区包含層	須恵器	杯身	底径(8.8)	底部外面は回転ヘラケズリ。その他は回転ナデ。底部内面には仕上げナデ。ロクロ右回転。	1~2	灰色 N5/0 灰色 N6/0	良好	底部 1/3
52	南区包含層	須恵器	杯身	口径(11.3) 底径 8.0 器高 9.5	回転ナデ。	1~2	灰色 N5/0 灰色 N5/0	良好	1/3
53	南区包含層	須恵器	高杯	脚径(7.6)	回転ナデ。	1~2	灰色 N5/0 灰色 N5/0	良好	脚部 1/6
54	南区包含層	須恵器	高杯	脚径(9.4)	回転ナデ。	1~2	灰色 N6/0 灰色 7.5Y6/1	良好	1/6
55	南区包含層	須恵器	高杯	口径 14.2 脚径 11.0 器高 8.3	杯部底部外周は回転ヘラケズリ回転ナデ。その他は回転ナデ。外周に自然釉がかかる。ロクロ左回転。	1~2	灰色 N6/0 灰色 7.5Y5/1	良好	ほぼ完形
56	南区包含層	須恵器	壺	口径(18.0)	回転ナデ。	1~2	黄褐色 25Y6/1 黄褐色 25Y6/1	良好	小片
57	南区包含層	須恵器	壺	口径(11.8)	回転ナデ。胴部内面は同心円タキ。	1~2	灰色 5Y6/1 灰色 5Y6/1	良好	口縁部 1/6
58	南区包含層	須恵器	壺	口径(16.2)	胴部外周は平行タキ後カキメ、内面は同心円タキ。その他は回転ナデ。	1~4	灰色 N5/0 灰色 N5/0	良好	上位 1/6

() 内は複元値

番号	出土位置	種別	器種	法量(cm)	特徴	砂粒の 径(mm)	色調 上段:外面 下段:内面	焼成	残存
59	南区包含層	須恵器	瓶	底径(110)	底部外面はヘラケズリ。その他の回転ナデ。ロクロ左回転。	1~4	灰色 5Y6/1 灰色 N5/0	良好	下位1/3
60	南区包含層	製塙土器		口径(138)	口縁部外面に平行タタキ。 内面は工具ナデ。	1~2	にふい黄褐色 10YR7/3 にふい黄褐色 10YR7/3	良好	口縁部1/5
61	南区包含層	製塙土器		口径(148)	口縁部外面に平行タタキ。 内面は工具ナデ。	1~2	灰褐色 25Y6/2 灰褐色 25Y6/2	良好	口縁部1/6
62	南区包含層	製塙土器		口径(146)	口縁部外面に平行タタキ。 内面は工具ナデ。	1~2	褐色 75YR4/1 にふい褐色 75YR6/4	良好	口縁部1/6
63	南区包含層	製塙土器		口径(132)	口縁部外面に平行タタキ。 内面は工具ナデ。	1~2	明赤褐色 5YR5/6 黒褐色 10YR3/1	良好	口縁部1/4
64	南区包含層	製塙土器		口径(145)	口縁部外面に平行タタキ。 内面は工具ナデ。	1~2	にふい黄褐色 10YR6/3 灰褐色 10YR6/2	良好	口縁部1/4
65	南区包含層	製塙土器		口径(182)	口縁部外面に平行タタキ。 内面は工具ナデ。	1~2	明赤褐色 25YR5/6 にふい褐色 5YR6/4	良好	口縁部1/8
66	南区包含層	製塙土器		口径(135)	口縁部外面に平行タタキ。 内面は工具ナデ。	1~2	にふい黄褐色 10YR6/3 にふい黄褐色 10YR7/4	良好	口縁部1/4
67	南区包含層	製塙土器		口径(194)	口縁部外面に平行タタキ。 内面は工具ナデ。	1~2	橙色 5YR6/8 にふい黄褐色 10YR7/4	良好	口縁部1/8
68	南区包含層	製塙土器		口径(166)	口縁部外面に平行タタキ。 内面は工具ナデ。	1~2	橙色 25Y6/6 橙色 5Y6/6	良好	口縁部1/6
69	南区包含層	製塙土器		口径(168)	口縁部外面に平行タタキ。 内面は工具ナデ。	1~2	橙色 5YR6/6 浅黃褐色 10YR8/3	良好	口縁部1/2
70	南区包含層	製塙土器		口径(182)	口縁部外面に平行タタキ。 内面は工具ナデ。	1~2	にふい黄褐色 10YR7/4 にふい黄褐色 10YR7/4	良好	口縁部1/10
71	南区包含層	製塙土器		口径(236)	口縁部外面に平行タタキ。 内面は工具ナデ。	1~2	浅黃褐色 7.5YR8/2 灰褐色 10YR5/2	良好	口縁部1/8
72	南区包含層	製塙土器		口径(158)	口縁部外面に平行タタキ(縦線が付加)。内面は工具ナデ。	1~2	にふい黄褐色 10YR7/4 浅黃褐色 25YR8/3	良好	口縁部1/6
73	南区包含層	製塙土器		口径(178)	口縁部外面に平行タタキ(斜線が付加)。内面は工具ナデ。	1~2	灰色 7.5Y5/1 灰色 7.5Y5/1	良好	口縁部1/4
74	南区包含層	製塙土器		口径(124)	口縁部外面に横線+斜線タタキ。 内面は工具ナデ。口縁部に指痕痕。	1~2	橙色 5YR6/6 にふい褐色 7.5YR6/4	良好	口縁部1/4
75	南区包含層	製塙土器		口径(160)	口縁部外面に横線+斜線タタキ。 内面は工具ナデ。	1~2	褐灰色 10YR4/1 にふい黄褐色 10YR7/4	良好	口縁部1/6
76	南区包含層	製塙土器		口径(194)	口縁部外面に横線+斜線タタキ。 内面は工具ナデ。	1~2	橙色 5YR7/6 灰褐色 25Y7/2	良好	口縁部1/6
77	南区包含層	製塙土器		口径(136)	口縁部外面に斜線タタキ。 内面は工具ナデ。	1~2	浅黃褐色 7.5YR8/4 灰褐色 10YR8/3	良好	口縁部1/4
78	南区包含層	製塙土器		口径(140)	口縁部外面に斜線タタキ。 内面は工具ナデ。	1~2	にふい褐色 7.5YR7/4 橙色 5Y6/6	良好	口縁部1/4
79	南区包含層	製塙土器		口径(140)	口縁部外面に斜線タタキ。内面は工具ナデ。口縁部に指痕痕。	1~2	灰褐色 10YR5/2 灰褐色 10YR5/2	良好	口縁部1/4
80	南区包含層	製塙土器		口径(170)	口縁部外面に斜線タタキ。 内面は工具ナデ。	1~2	浅黃褐色 7.5YR8/3 にふい黄褐色 10YR7/4	良好	口縁部1/8
81	南区包含層	製塙土器		口径(92)	口縁部外面に斜線+斜線タタキ後、全體にナデ。内面ナデ。	1~2	灰褐色 25Y7/2 にふい褐色 7.5YR7/2	良好	ほぼ完形
82	南区包含層	製塙土器		口径(94)	口縁部外面に斜線+横線タタキ後、全體にナデ。内面ナデ。	1~2	にふい褐色 7.5YR6/4 褐灰色 10YR5/1	良好	1/2
83	南区包含層	製塙土器		口径(145)	口縁部外面に斜線+横線タタキ。 内面は工具ナデ。口縁部に指痕痕。	1~2	橙色 5Y6/6 にふい黄褐色 10YR7/3	良好	口縁部1/4
84	南区包含層	製塙土器		口径(152)	口縁部外面に斜線(右上り+左上り)タタキ。内面は工具ナデ。	1~2	明赤褐色 5YR5/6 浅黃褐色 10YR8/3	良好	口縁部1/3
85	南区包含層	製塙土器		口径(186)	口縁部外面に斜線+横線タタキ。 内面は工具ナデ。	1~2	橙色 5YR6/6 明赤褐色 25YR5/6	良好	口縁部1/8
86	南区包含層	製塙土器		口径(156)	口縁部外面に斜線+横線タタキ。 内面は工具ナデ。	1~2	灰褐色 10YR5/2 灰褐色 10YR5/2	良好	口縁部1/4
87	南区包含層	製塙土器		口径(158)	口縁部外面に網状格子目タタキ。 内面は工具ナデ。	1~2	褐色 75YR6/4 褐灰色 75YR4/1	良好	口縁部1/8
88	南区包含層	土鍤	管状土鍤	最大径 19 孔径 0.7		1以下	灰褐色 10YR6/2	良好	1/2
89	南区包含層	土鍤	管状土鍤	最大径 18 孔径 0.7		1~2	灰褐色 10YR6/2	良好	2/3
90	南区包含層	土鍤	管状土鍤	最大径 35 孔径 1.6		1~2	赤褐色 5YR4/6	良好	ほぼ完形
91	南区包含層	土製品	カマド		内外面にハケヌ。 底の貼付け部に指ナデ。	1~2	にふい褐色 7.5YR5/3	良好	掛口の一部

()内は復元値

番号	出土位置	種別	器種	法量(cm)	特徴	砂粒の径(mm)	色調 上段:外面 下段:内面	焼成	残存
92	北区 堅穴状遺構	頸壺器	杯蓋	口径(14.0) 器高(4.0)	天井部外面は回転ヘラケズリ。 その他の内面には仕上げナデ。ロクロ左回転。	1~2	灰色 N4/0 灰色 N4/0	良好	1/3
93	北区 堅穴状遺構	頸壺器	杯蓋	口径 15.6 器高 4.0	天井部外面は回転ヘラケズリ。その他の内面には仕上げナデ。ロクロ右回転。	1~2	灰色 N5/0 灰色 N5/0	良好	3/4
94	北区 堅穴状遺構	頸壺器	杯蓋			1~2	灰色 N5/0 灰色 N6/0	良好	小片
95	北区 堅穴状遺構	頸壺器	杯蓋	口径 14.2 器高 4.2	天井部外面は回転ヘラケズリ。 その他の内面には仕上げナデ。ロクロ右回転。	1~2	灰白色 25Y7/1 灰色 25Y7/1	やや不良	完形
96	北区 堅穴状遺構	頸壺器	杯蓋	口径(14.2)	天井部外面は回転ヘラケズリ。 その他の内面には仕上げナデ。ロクロ右回転。	1~2	灰色 10Y5/1 灰色 10Y5/1	良好	1/6
97	北区 堅穴状遺構	頸壺器	杯蓋	口径 13.4 器高 4.0	天井部外面は回転ヘラケズリ。 その他の内面には仕上げナデ。ロクロ右回転。	1~4	灰色 N5/0 灰色 N5/0	良好	3/4
98	北区 堅穴状遺構	頸壺器	杯蓋	口径(13.6) 器高(3.5)	天井部外面は回転ヘラケズリ。 その他の内面には仕上げナデ。天井部内面には仕上げナデ。	1~2	灰色 N4/0 灰色 N5/0	良好	1/6
99	北区 堅穴状遺構	頸壺器	杯蓋			1~2	灰色 N5/0 灰色 N5/0	良好	小片
100	北区 堅穴状遺構	頸壺器	杯蓋			1~2	灰色 5Y6/1 灰色 N6/0	良好	小片
101	北区 堅穴状遺構	頸壺器	杯蓋	口径(12.6) 器高 4.4	天井部外面は回転ヘラケズリ。 その他の内面には仕上げナデ。ロクロ右回転。	1~2	灰色 N5/0 灰色 N5/0	良好	1/3
102	北区 堅穴状遺構	頸壺器	杯身	口径(12.8) 直径(15.4)	底面部外面は回転ヘラケズリ。 その他の内面には仕上げナデ。ロクロ右回転。	1~5	灰色 10Y5/1 灰色 10Y5/1	良好	1/6
103	北区 堅穴状遺構	頸壺器	杯身	口径(13.6) 直径(16.0)	底面部外面は回転ヘラケズリ。 その他の内面には仕上げナデ。 外面に自然釉がかかる。	1~2	灰色 10Y5/1 灰色 10Y5/1	良好	1/4
104	北区 堅穴状遺構	頸壺器	杯身			1~4	灰色 5Y6/1 灰色 5Y6/1	良好	小片
105	北区 堅穴状遺構	頸壺器	杯身	口径(11.6) 直径(14.2)	外面に自然釉がかかる。	1~4	灰色 N5/0 灰色 N5/0	良好	1/8
106	北区 堅穴状遺構	頸壺器	杯身	口径(12.0) 直径(14.2)		1~4	灰色 N5/0 灰色 N5/0	良好	小片
107	北区 堅穴状遺構	頸壺器	杯身			1~2	灰色 N6/0 灰色 N6/0	良好	小片
108	北区 堅穴状遺構	頸壺器	杯身	口径 12.2 直徑 14.3 器高 3.8	底面部外面は回転ヘラケズリ。 その他の内面には仕上げナデ。ロクロ左回転。	1~4	灰色 25Y5/1 暗青灰色 5P/B4/1	良好	完形
109	北区 堅穴状遺構	頸壺器	杯身			1~2	灰色 N5/0 灰色 N5/0	良好	小片
110	北区 堅穴状遺構	頸壺器	杯身	口径(14.0)	天井部外面は回転ヘラケズリ。 その他の内面には仕上げナデ。	1~2	灰色 10Y6/1 灰色 N6/0	良好	1/6
111	北区 堅穴状遺構	頸壺器	杯身		底面部外面は回転ヘラケズリ。 その他の内面には仕上げナデ。	1~2	灰色 N5/0 灰色 N5/0	良好	小片
112	北区 堅穴状遺構	頸壺器	高杯	脚径(8.8)	脚転ナデ。	1~2	灰白色 25Y7/1 灰黄色 25Y7/2	良好	3/4
113	北区 堅穴状遺構	頸壺器	甕	口径(24.0)	脚転ナデ。	1~4	灰色 N5/0 灰色 N5/0	良好	小片
114	北区 堅穴状遺構	頸壺器	甕		回転ナデ。	1~4	灰色 7S5Y1 灰色 NS/0	良好	小片
115	北区 堅穴状遺構	頸壺器	甕		回転ナデ。	1~2	灰色 7S6Y1 灰色 7S6Y1	良好	小片
116	北区 堅穴状遺構	頸壺器	甕	口径(17.6)	脚部外面は平行タタキ後カキメ、 内面は同心円タタキ。 その他の内面には仕上げナデ。ロクロ右回転。	1~4	灰色 5Y5/1 橙色 7S6Y6/6	やや不良	上位 1/2
117	北区 堅穴状遺構	頸壺器	甕	口径(15.8)	脚部外面カキメ。 その他の内面には仕上げナデ。	1~4	灰色 5Y6/1 灰色 7S5Y1	良好	1/6
118	北区 堅穴状遺構	頸壺器	甕?			1~2	灰色 N6/0 灰色 N6/0	良好	把手
119	北区 堅穴状遺構	製塙土器		口径(15.2)	口縁部外面に平行タタキ。 内面は工具ナデ。	1~2	浅黄褐色 10YR8/3 浅黄褐色 25Y8/3	良好	口縁部 1/6
120	北区 堅穴状遺構	製塙土器		口径(15.2)	口縁部外面に平行タタキ(縦線が付加)。内面は工具ナデ。	1~2	にぶい赤褐色 7SYR7/4 黒褐色 7SYR3/1	良好	口縁部 1/6
121	北区 堅穴状遺構	製塙土器		口径(15.2)	口縁部外面に横擦り+斜線タタキ。 内面は工具ナデ。	1~2	橙色 5YR6/6 浅黄褐色 7SYR8/6	良好	口縁部 1/6
122	北区 堅穴状遺構	製塙土器		口径(14.2)	口縁部外面に横擦り+斜線タタキ。 内面は工具ナデ。	1~2	灰白色 25Y8/2	良好	口縁部 1/6

() 内は復元値

番号	出土位置	種別	器種	法量(cm)	特徴	砂粒の 径(mm)	色調 上段:外面 下段:内面	焼成	残存
123	北区 堅穴状遺構	製塙土器		口径(156)	口縁部外面に横線+斜線タタキ。 内面は工具ナデ。	1~2	浅黄褐色 10YR8/3 灰白色 10YR8/1	良好	口縁部1/4
124	北区 堅穴状遺構	製塙土器			口縁部外面に斜線タタキ。 内面は工具ナデ。	1~2	明赤褐色 25YR5/6 にぶい黄褐色 10YR7/2	良好	口縁部小片
125	北区 堅穴状遺構	製塙土器			口縁部外面に斜線タタキ。 内面は工具ナデ。	1~2	灰褐色 10YR5/2 黒褐色 10YR3/1	良好	口縁部小片
126	北区 堅穴状遺構	製塙土器		口径(160)	口縁部外面に斜線タタキ。 内面は工具ナデ。	1~2	橙色 75YR7/6 にぶい橙色 75YR6/4	良好	口縁部1/6
127	北区 堅穴状遺構	製塙土器			口縁部外面に矢羽根状タタキ。 内面は工具ナデ。	1~2	明赤褐色 25YR5/6 白灰色 10YR8/2	良好	口縁部小片
128	北区 堅穴状遺構	製塙土器		口径(160)	口縁部外面に網状格子目タタキ。 内面は工具ナデ。	1~2	にぶい橙色 75YR7/3 にぶい橙色 75YR7/4	良好	口縁部1/8
129	北区包含層	绳文土器	深鉢		渡状口縁。内外面とも巻き貝条痕 後粗いミガキ。	1~2	にぶい黄褐色 10YR6/3 黒褐色 10YR3/1	良好	小片
130	北区包含層	土師器	瓶		外側ハケメ、内面ヘラケズリ。	1~2 やや 多い	橙色 75YR6/6 橙色 75YR6/6	良好	底部1/6
131	北区包含層	土師器	瓶または壺			1~2	橙色 25YR6/6 浅黄褐色 10YR8/3	良好	把手
132	北区包含層	須恵器	杯身			1~2	灰褐色 NS-0 灰色 NS-0	良好	小片
133	北区包含層	須恵器	杯身	口径 125 直径 148 器高 42	底部外面は回転ヘラケズリ。 その他のは回転ナデ。	1~4	灰褐色 N6-0 灰褐色 N6-0	良好	1/6
134	北区包含層	須恵器	杯身	口径 106 直径 125 器高 37	底部外面は回転ヘラケズリ。 その他のは回転ナデ。	1~2	灰白色 5Y7/1 灰白色 5Y7/1	不良	3/4
135	北区包含層	須恵器	杯身	底径(108)	底部外面は回転ヘラケズリ。 底部内面には仕上げナデ。	1~2	黄灰褐色 25Y5/1 灰白色 25Y7/1	良好	底部1/3
136	北区包含層	須恵器	甕	口径(140)	回転ナデ。 腹部内面は同心円タタキ。	1~2	灰褐色 5Y6/1 灰褐色 5Y6/1	良好	小片
137	北区包含層	須恵器	甕?		腹部外側カキメ。 その他のは回転ナデ。	1~4	灰褐色 5Y5/1 灰褐色 5Y5/1	良好	小片
138	北区包含層	製塙土器		口径(170)	口縁部外面に平干タタキ。 内面は工具ナデ。	1~2	にぶい褐色 75YR6/3 にぶい褐色 75YR6/4	良好	口縁部1/6
139	北区包含層	製塙土器		口径(170)	口縁部外面に斜線タタキ。 内面は工具ナデ。	1~2	にぶい黄褐色 10YR7/4 にぶい黄褐色 10YR7/4	良好	口縁部1/6
140	北区包含層	土師器	椀	口径(104) 器高(36)	底部を少しきませる。	1以下	黄褐色 25Y5/3 暗灰褐色 25Y5/2	良好	1/4
141	北区包含層	土師器	椀	口径(104)	外側指頭痕。 口縁部内面にスス付着。	1以下	にぶい褐色 75YR7/3 にぶい黄褐色 10YR7/2	良好	1/6
142	北区包含層	土師器	椀	口径(102)		1以下	黄灰褐色 25Y6/1 にぶい黄褐色 75YR7/3	良好	小片
143	北区包含層	土師器	擂鉢	口径(280)	体部外面タテハケ、指頭痕。体部 内面ヨコハケ後、本単位の太い柔 軟。	1~2	にぶい黄褐色 75YR7/3 にぶい黄褐色 75YR7/3	良好	1/6
144	北区包含層	土師器	鍋	口径(252)	体部外面上位タテハケ、下位不定 方向のハケメ。体部内面ヨコハケ。	1~2	暗褐色 10YR3/3 浅黄褐色 25Y7/4	良好	1/6
145	北区包含層	土師器	鍋	口径(262)	体部外面上位タテハケ、下位不定 方向のハケメ。体部内面ヨコハケ。	1~2	黒褐色 10YR3/1 にぶい黄褐色 10YR7/4	良好	1/6
146	北区包含層	土師器	鍋	口径(374)	体部外面上位タテハケ、下位不定 方向のハケメ。体部内面ヨコハケ。	1~2	黒褐色 10YR3/1 にぶい黄褐色 10YR5/3	良好	1/6
147	北区包含層	土師器	鍋	口径(390)	体部外面上位タテハケ。 体部内面ヨコハケ。	1~2	淡黄色 25Y8/3 浅黄色 25Y7/3	良好	1/6
148	北区包含層	土師器	羽釜		外側ナデ、指頭痕。内面ナデ。 外側にスス付着。	1~2	にぶい褐色 75YR6/4 にぶい褐色 75YR6/4	良好	1/6弱
149	北区包含層	土師器	羽釜?		指押さえ。	1~2	にぶい赤褐色 5YR5/4	良好	脚
150	北区包含層	瓦質土器	羽釜		外側ナデ、指頭痕。内面ハケメ。	1~2	黒褐色 25Y3/1 黒褐色 25Y3/1	良好	1/6弱

()内は復元値

2. 石器組成表

調査区/ 出土位置・層位	器種	サスカイト					黒曜石		閃綠岩	
		石 鏹	石 錐	加工 痕剥 片	剥 片	計	總重量 (g)	剥 片	重量 (g)	磨石類
南	包含層	1	1		23	25	185.90			
	造成土他				1	1	3.37			
北	堅穴状遺構内	3			9	12	14.11			
	包含層	6	4	1	1	94	106	242.82	1	1.07
	造成土他	1			1	2	2.33			
	計	11	5	1	1	128	146	448.53	1	1.07
										1

3. 石器計測表

番号	調査区	遺構・層位	器種	石 材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)
S1	南	包含層	石 鏹	サスカイト	1.68	1.29	0.33	0.52
S2	南	包含層	石 錐未製品	サスカイト	3.23	2.15	0.54	3.25
S3	北	堅穴状遺構内	石 鏹	サスカイト	1.43	(1.26)	0.35	0.56
S4	北	堅穴状遺構内	石 鏹	サスカイト	(2.24)	(1.49)	0.29	0.63
S5	北	堅穴状遺構内	石 鏹	サスカイト	2.08	(1.63)	0.31	0.78
S6	北	包含層	石 鏹	サスカイト	1.68	1.76	0.29	0.49
S7	北	包含層	石 鏹	サスカイト	(1.48)	(1.02)	0.22	0.25
S8	北	包含層	石 鏹	サスカイト	(1.51)	1.24	0.27	0.38
S9	北	包含層	石 鏹	サスカイト	2.55	1.33	0.29	0.96
S10	北	包含層	石 鏹	サスカイト	(3.27)	(1.94)	0.39	1.92
S11	北	包含層	石 鏹	サスカイト	(1.77)	1.58	0.33	1.08
S12	北	包含層	石 錐未製品	サスカイト	3.53	2.64	0.43	3.89
S13	北	包含層	石 錐未製品	サスカイト	3.55	2.04	0.69	5.64
S14	北	包含層	石 錐未製品	サスカイト	1.82	1.79	0.45	1.21
	北	包含層	石 錐未製品	サスカイト	1.95	2.31	0.48	2.31
S15	北	包含層	石 錐	サスカイト	(3.24)	2.07	0.40	2.10
S16	北	包含層	二次加工のある剥片	サスカイト	2.51	2.14	0.33	1.64
S17	北	包含層	磨石類	閃綠岩	(11.00)	(10.10)	4.40	640.00
S18	北	造成土他	石 鏹	サスカイト	(1.42)	1.64	0.39	0.63

()内は残存値

第3章 新熊野山遺跡

第1節 位置と環境

新熊野山遺跡の所在する郷内地域は、昭和34年(1959)まで児島郡郷内村と呼ばれていた。同年に児島市に合併し、さらに昭和42年(1967)の倉敷市・玉島市・児島市の旧三市の合併を経て今日にいたっている^⑩。また、域内を岡山市街地から水島工業地帯に至る県道が東西に走るとともに、瀬戸中央自動車道水島インターチェンジやJR瀬戸大橋線木見駅などもあり交通の便の良いところでもある。

地形的には周囲を山に囲まれた小盆地と言ったところであり、北西に種松山山塊(標高258m)、東側から南側に由加山山塊(標高274m)、南西に鶴ヶ辻山山塊(284m)が控えている。ほぼ中央を北流する郷内川は南の福南山・由加山から流れ出し、岡山市南区植松・彦崎を経て児島湾に注いでいる。児島が島として独立していた頃には、盆地内に深く海が入り込んでいた時期もあったと考えられ、水島インターチェンジの周辺には「沖」、「福江」と言った海との関連をうかがわせる地名が残っている。

歴史的にも古い土地柄であり、比較的多くの遺跡が確認されているが、旧石器時代、縄文時代の遺跡は少ない。旧石器時代の遺物としては、曾原窯跡群^⑪でナイフ形石器、西ノ山遺跡^⑫で細石核が採集されていることが知られている程度である。縄文時代の遺跡も明確なものは確認されていないが、前山遺跡^⑬や諸興寺跡^⑭から有茎尖頭器が採集されている点は注意が必要である。なお、盆地の北東にある蟻峰山の北麓(現岡山市南区彦崎)には縄文時代前期～晩期にかけて営まれた彦崎貝塚が所在している。近年の岡山市による発掘調査によって、遺跡の始まりが縄文時代早期にさかのほることが判明するとともに、貝塚の規模や新たな埋葬なども確認され、当時の人々の生活を推定する大きな成果が得られている^⑮。

弥生時代では、曾原遺跡から弥生前期の土器^⑯が出土しているが、工事中の発見であり、遺跡の実態ははっきりしない。弥生時代中期になると、遺跡数も増加していく。前山遺跡^⑰は水島インターチェンジ南方の標高60m程の丘陵上に立地し、弥生時代中期の土器、石器とともに銅鏡も検出されている。また、JR瀬戸大橋線の建設に伴って発掘調査が行われた木見大賀遺跡^⑱でも包含層や自然流路から弥生時代中期の土器が出土している。県道建設工事に伴って発掘された森荒手遺跡^⑲では弥生後期の竪穴式住居3棟分が確認されている。そのすぐ南西尾根上には弥生時代の墳墓である向木見遺跡^⑳が所在しており、関連がうかがえる。向木見遺跡は弥生時代後期における特殊器台の名祖遺跡として

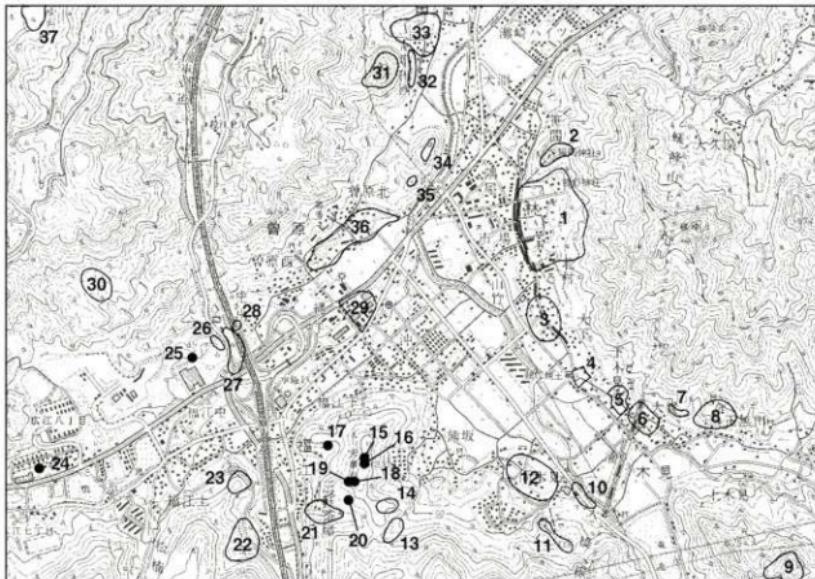


第37図 遺跡の位置

著名である。

郷内地域には弥生時代後期に特殊器台を持つ墳墓である向木見遺跡が存在するにもかかわらず、明確に古墳時代前期に属するとわかる古墳は確認されていない。わずかに郷内川西岸にある独立丘陵である戸津田山にある戸津田北古墳群や戸津田南古墳群が小円墳や箱式石棺であるとされ、その可能性を残している。古墳時代後期には盆地周囲の山上や山腹に横穴式石室墳が築かれるようになる。福江の天満山山上から山腹にかけては6基の横穴式石室が存在するとされ、その内4基が確認されており、いずれも残存長2~4m程の規模である。水島インターチェンジ西方の山腹に所在した曾原西古墳は、長さ3.2mの横穴式石室墳であったとされるが、土砂採取によって消滅してしまった。郷内から西の水島へ抜ける峠の北側山麓には7世紀末頃の溝池北古墳⁽¹²⁾が存在し、宅地造成工事に伴って発掘調査された。径7~8mの円墳で、長さ4m程の横穴式石室から須恵器が出土している。

古墳時代末から古代にかけては、郷内川の西岸を中心とする地域に多くの窯跡が築かれるようになるが、発掘調査されたものではなく、その実態には不明な点が多い。水島インターチェンジ西北方の谷



- | | | | | |
|----------------|------------|------------|--------------|------------|
| 1 新熊野山遺跡 | 2 福岡山遺跡 | 3 北村大下遺跡 | 4 諸興寺跡 | 5 寺内遺跡 |
| 6 木見大賀遺跡 | 7 大賀中世墓群 | 8 正無田遺跡 | 9 戸山城跡 | 10 森荒手遺跡 |
| 11 向木見遺跡 | 12 下山田遺跡 | 13 熊坂窯跡群 | 14 熊坂古墳群 | |
| 15 ~ 20 天満山古墳群 | 21 大釜窯跡群 | 22 瓶焼谷窯跡群 | 23 前山遺跡 | 24 溝池北古墳 |
| 25 曾原西古墳 | 26 西ノ山遺跡 | 27 曾原西遺跡 | 28 曾原天王山中世墓群 | |
| 29 曾原遺跡 | 30 曾原窯跡群 | 31 鼻高山城跡 | 32 城山東麓中世墓群 | |
| 33 大坪遺跡 | 34 戸津田北古墳群 | 35 戸津田南古墳群 | 36 一等寺下遺跡 | 37 種松山山頂遺跡 |

第38図 周辺の遺跡 (S=1/25,000)

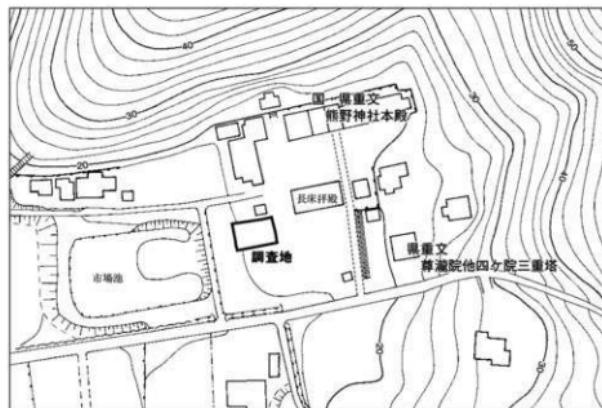
間に位置する曾原窯跡群⁽²⁾については、森林公園建設に伴って確認調査を実施したが、窯跡を確認することはできなかった。熊坂窯跡群⁽³⁾・瓶焼谷窯跡群については灰原の存在から窯の位置が推定できるものもあり、表採された須恵器から7~8世紀の操業が推定されている。また、倉敷埋蔵文化財センターには天満山山頂付近出土とされる須恵賀陶棺底部が保管されている⁽⁴⁾。おそらく天満山古墳群の一つに納められていたもので、須恵器生産とかかわりを持つ人物の埋葬のために作られたものであろう。

郷内地域の中世を語る上で、五流修験を避けることはできない⁽⁵⁾。新熊野山は役小角が伊豆大島に流された際に、その難を逃れ、海路児島にたどり着いた高弟たちが大同元年(701)に開いたとされる五流修験の本拠地である。平安後期には衰えていたと言われるが、承久の乱に連座してこの地に流されてきた賴仁親王の孫たちが再興したと伝えられている。その後も戦乱などで盛衰を繰り返したが、宮内庁の管理する賴仁親王墓や仁治元年(1240)に後鳥羽上皇の供養のために築かれたと伝えられる石造大宝塔(国指定重要文化財)などが残されている。また、熊野神社の本殿(第二殿・国指定重要文化財)は明応元年(1492)に再興されたときのものが残されている。

中世末期には郷内盆地から児島湾への出口を扼する標高108mの山上に鼻高山城が築かれている。『中国兵乱記』⁽⁶⁾などにも登場し、常山城(岡山市南区・玉野市)とともに児島北岸の重要な拠点であったと考えられる。また、この鼻高山山城をはじめ、郷内の山城一帯には多くの五輪塔を主体とした中世墓も分布している。瀬戸中央自動車道建設工事に伴って発掘調査された曾原天王山中世墓群⁽⁷⁾では土師質羽釜や備前焼などを利用した骨蔵器が出土している。

第2節 調査に至る経緯と経過

新熊野山遺跡の発掘調査は、国指定重要文化財 熊野神社における防災施設整備事業に伴い実施されたものである。事業の内容は火災に備えて非常用エンジン付き防火水槽(100トン)1基、放水銃2基、消火栓3基及び配管を設置するといったもので、特に水槽については広さ約40m²、深さ3m以上の掘削を伴うものであった。事業について熊野神社と倉敷埋蔵文化財センターとで協議が行われたが、防災設備は国・県指定重要文化財である熊野神社の保護・保存に必要なものであり、別の場所に設置することも困難なため、や



第39図 調査地位置図 (S=1/2,000)

むを得ず発掘調査を行い、記録保存することとなった。

発掘調査に先だつ平成22年10月27日に、地下の状況を確認するための確認調査を実施したところ、地表下約60cmで中世の整地層を検出するとともに、整地層下の造成土から土師質椀などの遺物が出土することを確認した。なお、中世の整地層については、平成18年度に実施した長床拌殿再建工事に伴う確認調査においてもその存在を確認している⁽¹⁸⁾。

発掘調査は平成23年3月4日から18日にかけて実施した。工期が迫っているため、整地層上面の精査と遺構確認に重点をおいて調査を行った。調査範囲は、工事の際に掘削を行う東西17m×南北11m、面積約187m²である。確認調査の成果に基づいて、整地層上面に至るまでの近世以降の造成土については重機による掘削を行い、その後、整地層上面の遺構検出作業は人力で行った。3月10日までに重機による掘削を終了、15日までに遺構の検出を完了した。その後、各遺構の掘削及び写真撮影・実測を行い、18日までに遺物の取りあげを完了し、その後全体の測量・写真撮影を実施し、作業を終了した。なお、整地層以下の中世段階における造成土については工事中に立会調査を行った。

<調査日誌抄>

平成22年10月27日 確認調査

平成23年 3月 4日 機材搬入。重機によって整地層上面までの掘削開始。

3月 5日 6か所のサブトレチを設定して土層観察。

3月 8日 重機による調査区東半分の掘削完了。遺構の検出作業開始。

3月 9日 調査区東半分で溝状遺構・土坑・ピットを確認。

3月10日 重機による調査区西半分の掘削完了。遺構の検出作業開始。

3月11日 各遺構の掘削開始。

3月15日 掘削を終了した遺構から実測、写真撮影。

3月16日 引き続き、遺構の実測、写真撮影、遺物取りあげ。

3月18日 残った遺構の実測、写真撮影、遺物取りあげ。

調査区平面図作成、全体写真撮影後、調査終了。機材撤収。

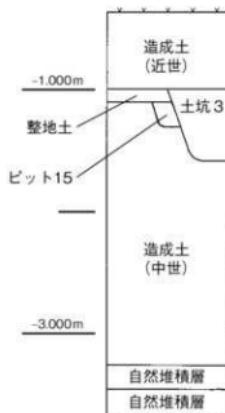
3月25日 工事立会調査

第3節 調査の概要

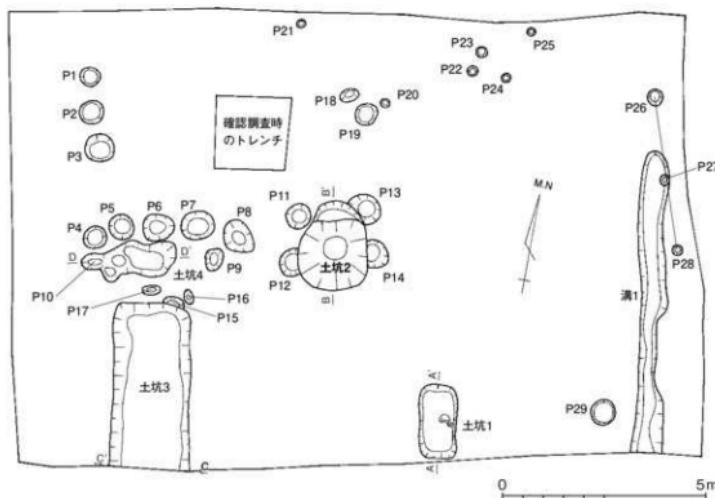
1 調査区の概要

調査区は防火水槽を設置する為に掘削する範囲をそのまま利用したため、ややいびつな長方形となっている。調査区の東側に長床拝殿、北側にはトイレがあるが、南側と西側には樹木が植えられている。標高は約18mで、長床拝殿や本殿のならぶスペースからは明瞭な段差はないが、若干低くなっている。

調査区の層序については、調査中に十分な観察と記録ができなかつたため、確認調査時と工事中の立会時の所見を合わせて記述する。基本的な層序は、上から近世の造成土・中世の整地土・中世の造成土・自然堆積層となる(第40図)。近世の造成土は中近世の土器・瓦片を含む厚さ50~70cmの暗灰黄色土(2.5Y4/2)である。近世の造成土の下に確認された整地土は厚さ10cm程度の暗黄褐色土(10YR7/6)で、花崗岩バイラン土が混じっている。また、上面には部分的に中世土器細片の散布が認められた。中世の造成土は、厚さ2m以上と分厚く、大規模な造成の所産であると推定される。山土(にぶい黄橙色10YR6/3)を主体としており、下層には黒褐色砂質土が混ざっている。東から西に向かって下る傾斜を見せ、山側から土を押し出してい



第40図 土層模式図



第41図 遺構配置図 (S=1/120)

る様子がわかる。また、中世の遺物を含むが、完形のままの土師器椀なども認められる。最下層の2層はほぼ水平に堆積しており、自然堆積層と推定されるが、中世の遺物を含んでいる。上層は褐灰色土(7.5YR4/1)、下層は黒褐色砂質土(7.5YR3/1)で、いずれもマンガン分の沈着が著しい。

検出された遺構としては、ピット29基・土坑4基・溝1本がある(第41図)が、遺構の多くは調査区の西側に集中しており、東側には少ない。また、東側中央付近には遺構のない空間が存在している。さらにこれらの遺構は浅いものが多く、上面を削平されていると推定される。

なお、調査区の東辺に沿う溝1は、現地表面近くから掘り込まれている。「明治四辛未年三月児島郡林村熊野神社宮林社地絵図面」⁽¹⁴⁾には、長床の北側の溝(現存)が建物の西側で南に90度曲がって境内地南側の石垣の用水路につながっている様子が描かれており、これに該当するものと考えられる。

2 遺構と遺物

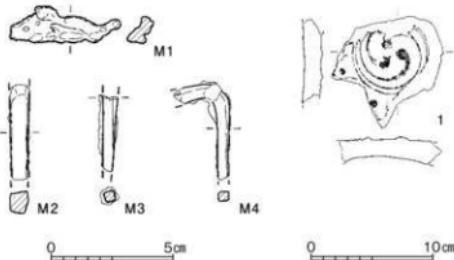
(1) ピット

ピットはいくつかの群に分かれて分布しているが、その性格は不明のものが多い。また、その多くは先述のとおり、上部を削平されていると考えられる。

ピット1~3は調査区の北西部に南北に並んでいる。径50~70cmの円形を呈し、検出面からの深さ15cm程度である、ピット3からは土師器椀の破片が出土している。

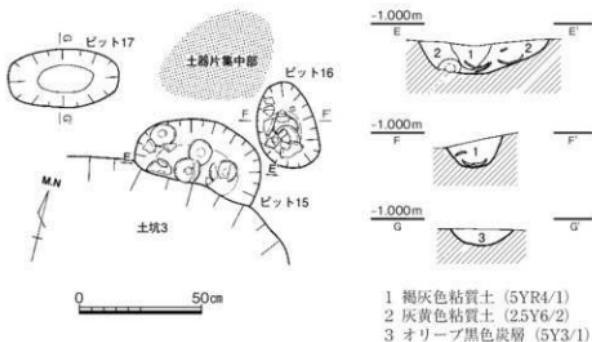
ピット4~10は土坑4の周縁(主に北側)を囲うように東西に分布している。径50~70cm、検出面からの深さ10~20cm程度で、ピット4からは磁器片、ピット5~8からは土師器椀の破片や瓦片・鉱滓などが出土している。M1はピット7から出土しており、銅の鉱滓と考えられる。長さ4.6cmほどで、重さ14.4gである。

ピット11~14は土坑2の回りを開むように分布している。径60~70cm、検出面からの深さ20~30cm程度である。切り合ひ関係から、土坑2に先行するようである。ピット12・13からは土師器椀の破片や瓦片・鉄釘などが出土している(第42図)。M2~M4は鉄釘である。M2・M3はピット12から、M4はピット13から出土している。1はピット13から出土した軒丸瓦の破片である。瓦当の断片であるが、文様は右巻三ツ巴文と連珠文の組み合わせで、圓線を持っている。胎土に0.5~5mmの大の長石を含むのが目に付く。

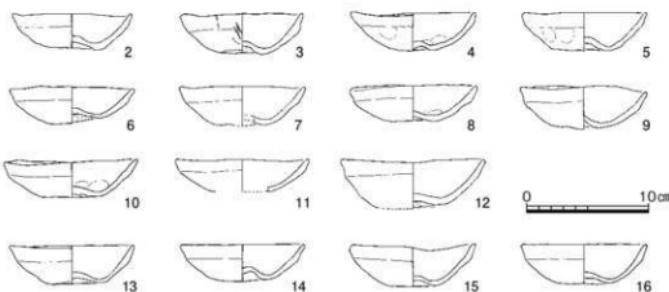


第42図 ピット7・12・13出土遺物 (S=1/2・1/4)

ピット15~17(第43図)は、土坑3と土坑4の間に分布している。ピット15は長軸約55cm、検出面からの深さ約13cmで、土坑3の掘削によって南側をカットされている。ピットの中には、灰黄色の非常に粘質の強い土が充填され、土師器椀が11個体(第44図2~12)以上収められていた。土坑3によってカットされた部分を考慮すると、本来埋納されていた椀はさらに多かったものと推定される。2~11は口径10~11cm程度で、器高は3cm程度である。12のみ一回り大きく、口径11.9cm、器高4.1



第43図 ピット15~17実測図 (S=1/20)



第44図 ピット15・16出土土器 (S=1/4)

cmである。いずれも内外面をナデ調整し、底部中央を凹めている。

ピット16は36×24cmの梢円形で、検出面からの深さ約14cmである。ピットの中には土師器碗が4個体以上収められており、硬く縮まった粘質土で埋められていた。ピット15より一回り以上小さいが、同様の性格を備えた造構と考えられる。図化した土師器碗は4点である(第44図13~16)。4点とも口径10cm程度で、器高は3cm程度である。やはり内外面をナデ調整し、底部中央を凹めている。

ピット17は45×25cmの梢円形で、検出面からの深さ6cmである。遺物はなかったが、中には炭が詰まっていた。また、ピット15の北側には浅くたわんだ部分があり、土師器碗片が集中していた。図化できるものはなかったが、底部の破片に中央を凹めているものが認められ、胎土もピット15・16から出土したものと類似することから、ほぼ同時期のものと考えられる。

ピット18~25は調査区の北部に散漫に分布している。柱穴になるものも含まれると推定されるが、建物としてまとまるものは確認できていない。ピット19から土師器碗の破片が出土している。

調査区の東端に位置するピット26~28はほぼ南北に一直線に並んでおり、建物を構成する柱穴と推定される。特にピット26(第45図)には柱痕が残っており、柱の下には半円形に加工した平瓦を數

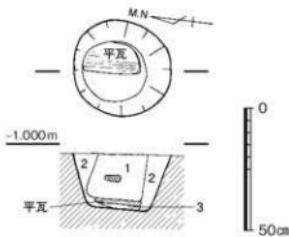
いていた。

ピット29は径52cmの円形で、検出面からの深さ10cmである。褐色(7.5YR4/4)の埋土には火を受けた痕跡が認められた。

(2) 土坑

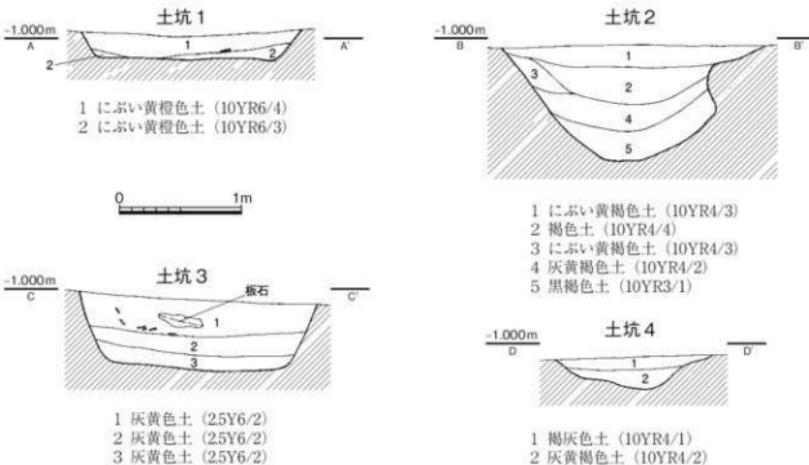
調査区の南よりに位置する土坑1(第46図)は、長軸1.85×短軸0.9cmの隅丸方形で、長軸は南北からやや西に振れています。検出面からの深さ21cmである。埋土内には15~25cm大の花崗岩礫複数個が含まれていた。平面形態からは土坑墓の可能性が高く、内部から検出された花崗岩礫は木棺側板の抑えの可能性がある。また、埋土からは土師器・椀片・青磁片・瓦片・鉄釘(第47図M5)なども出土しているが、破片ばかりで埋葬に伴うものではないと考えられる。

調査区のほぼ中央で確認された土坑2(第46図)は、径2mほどのややいびつな円形で、検出面からの深さ97cmである。今回の調査区内で検出した遺構の中では最も深いものであり、ゴミ坑ではないかと推定される。埋土からは土師器・椀片・瓦片・古錢などが出土している(第47図)。17は磁器(青花)片で、径14cm程度の椀である。器表面は青みがかった白色で、外側には青色で魚(鯉?)や花の文様が、内側口縁部近くには幾何学模様が描かれている。18は土師質の小皿である。径7.3cm、器高1.7cm、全体をヨコナデで成形し、底部に板状圧痕が残る。M6は「熙寧元寶」である。直径2.48cm、厚さ0.13cm、重さ3.2gである。元々は北宋において1068年に鋳造されたものである^[18]。

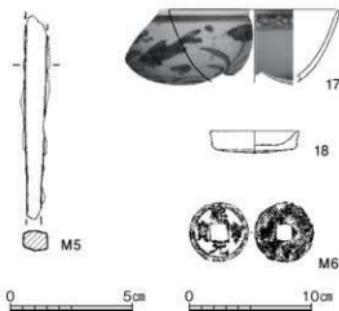


- 1 黒褐色土 (2.5Y3/1) 柱痕
2 褐灰黄色土 (2.5Y5/2)
3 灰色土 (N6/) グライ化層

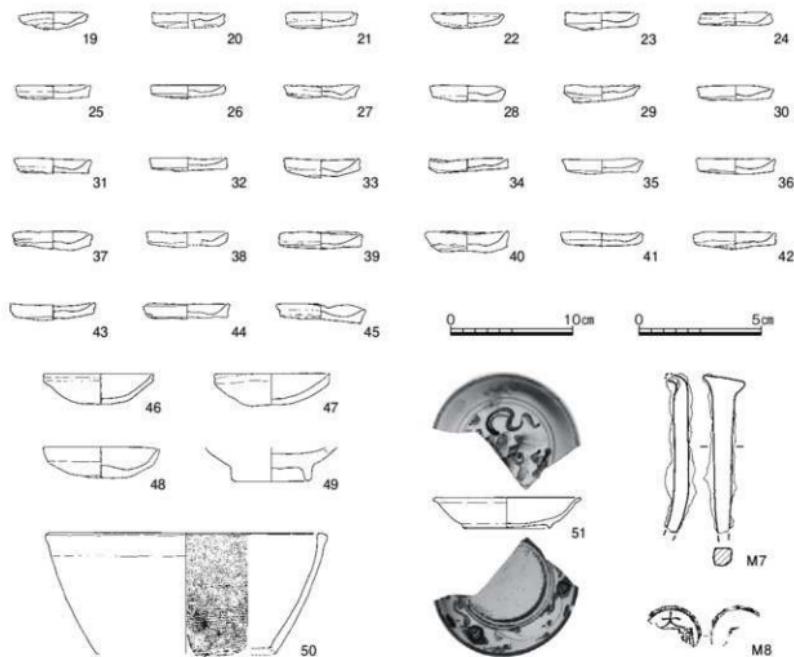
第45図 ピット26実測図 (S=1/20)



第46図 土坑1~4断面図 (S=1/40)



第47図 土坑1・2出土遺物 (S=1/4・1/2)
穴が開いたものも認められるなど、作りは粗雑で、器として機能しないのではないかと思われるようなものも含まれている。46～48は土師器碗である。口径9cm大、器高2.6cm程度である。内外面ともにナデ調整を行っており、口縁部をつまみ上げることによって、外面に稜線を造り出している。46



第48図 土坑3出土遺物 (S=1/4・1/2)

と**47**は棱線の位置がやや高く、口縁端部から6~7mm程であるが、**48**は口縁端部から12mm程の位置に稜線がある。また、**48**の口縁部端には煤が付着しており、灯明皿として使用されたと推定される。**49**は青磁の底部である。高台径6.6cmで、底部外面にヘラ切り痕が認められる。**50**は土師質の鉢である。口径23.2cm、器高9.9cm、平底で外面には横方向のハケメが認められるが、内面は肌荒れがひどく、調整などの観察ができない。**51**は磁器(青花)で、口径12.2cmの端反皿である。器表面は青みがかった白色で、内側に玉取獅子文、外側には唐草文様が描かれている。また、高台部分には砂粒(0.5~1mm大の長石・石英)が付着している。中国産の磁器で、16世紀後半のものである⁽¹⁹⁾。**M7**は鉄釘である。頭部の一部と先端を欠損している。**M8**は「大□通□」と読める銅鏡である。該当しそうなものでは、最も古いもので「大觀通寶」(北宋 1107年)、新しいものでは「大中通寶」(明 1361年)など数種類がある⁽¹⁸⁾。厚さ0.17cmである。なお、今回は図化していないが、鋤先ではないかと推定される鉄製品や、20cm四方程度の用途不明の鉄製品も出土している。

土坑4(第46図)は土坑3の北側に位置している。長軸1.3×短軸0.8cm程の不定形で、検出面からの深さ28cmである。埋土に含まれる遺物は土器や瓦の細片のみであり、遺構の性格も不明である。

(3) その他の遺物

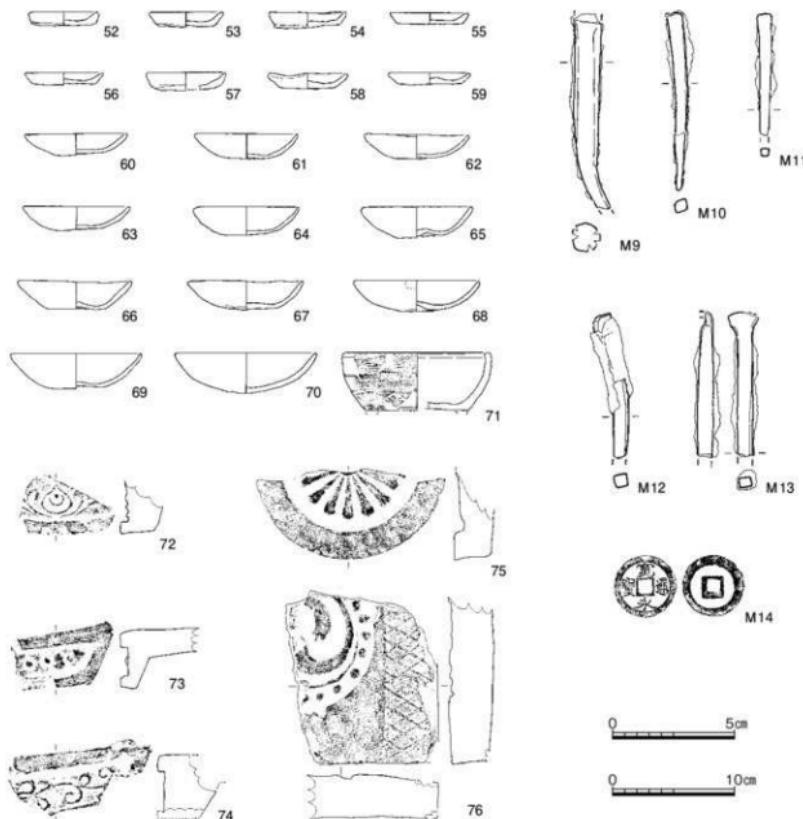
その他の遺物としては、整地土より上の近世の造成土中から出土した遺物(第49図)と、整地土より下の中世の造成土中から出土した遺物(第50図)がある。

今回の調査では、整地土上面までは主に重機によって掘削を行っているため、近世の造成土中から出土した遺物としたもの多くは、整地土の上面を人力で検出していく作業中に出土したものである。**52~59**は土師質小皿であり、口径は最小5.8cm、最大6.8cm、平均6.4cmで、器高は1.0~1.5cmである。口縁部は外側に開き、底部はヘラ切り痕が残っている。**60~70**は土師器碗である。大きさは口径8.4~10.9cm、器高1.8~2.9cmでばらつきがある。内外面をナデ調整している。底部中央を凹めているものと、凹めていないものがあるが、凹みはそれほど深くないものが多い。**71**は瓦質の香炉である。口径12.3cmに復元でき、透かしのある脚台が付いていた痕跡がある。口縁部には端面があり、内側に少しつまみ出している。外面上方には連続的に雷文を描き、下部には四割菱のスタンプ文が3.5cm程の間隔をおいて施されている。

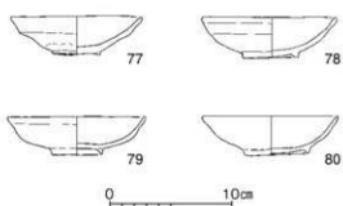
72~76は瓦の破片である。**72~74**は軒平瓦である。いずれも断片であるが、**72**の中心飾は宝珠で、縁で表現されている。瓦当下縁と顎後縁には面取が認められる。**73**の文様は珠文である。脇区は狭く、瓦当上縁に面取(上角面)があり、瓦当端まで及んでいる。また、面取後方の平瓦凹面には細かい布目痕が残っている。**74**の中心飾は不明であるが、唐草模様が分かる。脇区は狭く、平瓦凹面にはガゼ状の布目痕が残っている。**75**は菊花文の軒丸瓦である。樵瓦でごく最近のものと思われる。**76**は鬼板瓦である。中心飾に左巻三巴と珠文を採用し、縁に斜格子模様を施している。側面はヘラ切り、裏側はナデで仕上げられている。

M9~M13は鉄釘である。断面はすべて方形と思われるが、**M9**は鏽化が著しく、はっきりしない。**M10~M11**は細身である。**M13**はかろうじて頭部が残っている。

M14は「寛永通寶」である。直径2.55cm、厚さ0.15cm、重さ3.2gである。比較的質の良い素材で造られているようで、「寶」字の貝画末尾が「ス」状となることから、「古寛永」であることがわかる⁽¹⁸⁾。



第49図 造成土（近世）中の出土遺物（S=1/4・1/2）



第50図 造成土（中世）中の出土遺物（S=1/4）

中世の造成土から出土した遺物としては、高台を持つ土師器碗4点(第50図)を図化した。77~79は本調査前の確認調査時に出土したものである。口径10.9~11.3cm、高台径3.8~4.6cm、器高3.2~3.4cmに収まる。77は外面中央よりやや上に明瞭な稜線を持っているのが特徴である。80は本調査後の立会調査時に出土したものである。口径11.2cm、高台径5.3cm、器高3.3cmである。

第4節　まとめにかえて

今回の調査で確認した遺構は、溝1本、ピット29基、土坑4基であるが、その多くは性格が不明である。このうち、溝1については、先述の通り近現代まで下る新しいものであるが、ピットと土坑には中世のものが含まれている。

ピット15～17は、埋納された土器及び埋土から同時期の所産と考えられる。整地層直下で検出され、深さは最大でも約13cmであり、上方が削平されていると推定される。埋められていた土師器椀は、口径10～11cm、器高3cm大で、高台はなく底部に窪みがあるものばかりであり、14世紀中葉のものと考えられる⁽²⁰⁾。なかでもピット15の土器はピット底部に並べられ、粘土で丁寧に埋められており、使用後の土器を漫然と廃棄したような状況ではないことは明かである。このような土器を埋納した遺構は、地鎮のためのものといわれ、県内では中島遺跡（岡山市中区中島）などでも確認されている⁽²¹⁾。

ピット26は柱穴であることが確実で、ピット27・28とともに掘立柱建物を構成する可能性を指摘できる。ピット27が溝1によって削平されていることから、近世でも早い時期のものと推定される。

土坑1はその形状等から土坑墓と推定されるが、遺物を伴っておらず、正確な時期は不明である。ただ、中世の整地土上面で検出されており、14世紀まではさかのばらないと考えられる。

土坑3は、幅約2m、長さ4m以上で、今回の調査で検出した遺構の中では最も大きなものである。性格は不明であるが、しまりの弱い埋土や板状の石などが無造作に入っていることなどから、ゴミ穴であった可能性が高い。時期は輸入陶磁器の存在から16世紀後半以後である。

遺物としては比較的多くの土師器椀が出土しており、その年代が注目される。まず、整地層の下で確認された厚さ2m以上に及ぶ造成土中からは、高台を持つ土師器椀（第50図）が出土している。口径11cm前後、器高3～3.5cmで14世紀前半に比定される⁽²⁰⁾。次に、整地層直下から掘削されたピット15から出土した土師器椀（第44図）は前述のように14世紀中葉の土器と考えられる⁽²⁰⁾。また、整地層の上面では完形の椀を含む土師器片多数が張り付くような状態で検出された。この椀の中にも高台を持つものは無いが、窪みのあるものとないものがあり、ないもののほうが数が多くなっているようである。最後に、土坑3からは径9cm大で底部に窪みがなく、口縁部外側直下に稜線を持つ椀や径6～7cmの土師質小皿が輸入陶磁器等とともに出土している（第48図）。これらは輸入陶磁器の年代⁽¹⁹⁾から16世紀後半以降のものと考えられる。このように土師器椀については、径の小型化とともに、高台を持つものから底部に窪みを持つもの、さらに窪みを持たないものへの変化が読み取れる。

現在、新熊野山には熊野神社と五流尊龍院が独立して存在しているが、明治初年の神仏分離以前には熊野十二社大権現として一体のものであった。その歴史を示す史料は少なく、主に近世の文書に頼らざるを得ない⁽¹⁴⁾が、起源は役小角が伊豆大島に流されたときに、その難を逃れ、海路見島にたどり着いた高弟たちが大宝元年（701）に聞いたとされる。その後、平安後期には一時的に衰退するが、承久の乱後に賴仁親王が見島に流されると、その孫達によって再興されたと伝えられる。木見には賴仁親王墓とされる五輪塔が宮内府管理の下に存在し、熊野神社のまわりにも、仁治元年（1240）に後鳥羽上皇の供養のために築かれたと伝えられている石造大宝塔や、賴仁親王の兄である桜井宮貞仁親王の墓と伝える十三重石塔がある。15世紀後半には応仁の乱の余波を被って堂宇が焼失するが、15

世紀末の明応元年（1492）に再興され、天正年間には長床が再建されたと言われている⁽²²⁾。近世になると、明和6年（1769）の長床（焼失）再々建、文政3年（1820）の三重塔再建、天保11年（1840）の本殿（第一殿・第三～六殿）の再建と現在まで残される堂宇が揃っていく⁽²³⁾。

このように新熊野山の歴史、特に中世以前については十分な史料が伝わっておらず、断片的なことしかわかっていない。こうしたなか、今回の調査によって14世紀前半に境内の大造成が行われたことが判明したことは重要な成果と言えるだろう。14世紀前半は鎌倉幕府の滅亡、建武親政を経て南北朝時代に至る動乱の時代である。記録の空白期を埋める事跡の発見であるとともに、動乱の時代における、地方の有力宗教集団の動きを知る資料であると言える。反面、この造成がどういった契機に依るものかを推し量るすべがないのも事実であり、その解明は今後の課題である。

註

- (1) 倉敷市歴史年表編集委員会「倉敷市歴史年表」倉敷市教育委員会 1978
- (2) 小野雅明「曾原窯跡群確認調査報告」「倉敷埋蔵文化財センター年報6」倉敷埋蔵文化財センター 1999
- (3) 藤原好二「倉敷市曾原西表塚の縄石核」「古代吉備」第14集 古代吉備研究会 1992
- (4) 織津政右衛門・鎌木義昌「岡山県重要文化財図録」富士出版社 1957
- (5) 原 三正「由加山」岡山文庫144 日本文教出版株式会社 1990
- (6) 田嶋正憲編「彦崎貝塚」岡山市教育委員会 2006
田嶋正憲編「彦崎貝塚2」岡山市教育委員会 2007
田嶋正憲編「彦崎貝塚3」岡山市教育委員会 2008
田嶋正憲編「彦崎貝塚4」岡山市教育委員会 2013
- (7) 間堀忠彦・間堀蘿子編「新修倉敷市史 第一巻 考古」倉敷市 1996
- (8) 鎌木義昌「岡山県郷内村前山の獣生式遺跡」「吉備考古」80 吉備考古学会 1950
- (9) 下澤公明編「本州四国連絡橋陸上ルート建設に伴う発掘調査Ⅱ」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告71
岡山県教育委員会 1988
- (10) 福田正継「(1)森荒手遺跡発掘調査報告」「岡山県埋蔵文化財報告10」岡山県教育委員会 1980
- (11) 高橋 譲「児島市向木見遺跡発見の二、三の遺物」「考古学手帖」12号 1960
- (12) 福本明・鍵谷守秀・小野雅明・谷岡孝久「溝池北古墳」倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告第3集
倉敷市教育委員会 1991
- (13) 田辺 進「郷内の史跡探訪」2010
陶棺は郷内中学校に保管されていたが、保存に不安があるということで埋蔵文化財センターに移管された。
- (14) 久野修儀・中野栄夫編「新修倉敷市史 第二巻 古代・中世」倉敷市 1999
- (15) 加原耕作編著「新撰備中兵乱記」山陽新聞社 1987
- (16) 伊藤 晃・山廢康平・福田正継「本州四国連絡橋陸上ルート建設に伴う発掘調査Ⅰ」
岡山県埋蔵文化財発掘調査報告36 岡山県教育委員会 1980
- (17) 鍾谷守秀「新熊野山遺跡確認調査報告」「倉敷埋蔵文化財センター年報11」倉敷埋蔵文化財センター 2008
- (18) 永井久美男「日本出土銭銭鑑」1996年版 兵庫県埋蔵銭鑑調査会 1996
- (19) 丸山雄二「下村藤右衛門邸跡（長浜町遺跡）における天正13年一括遺物について」「織豊城郭 第7号」
織豊期城郭研究会 2000
- (20) 鈴木康之「土師質土器の編年」「草戸千軒町遺跡発掘調査報告書V」
広島県草戸千軒町遺跡発掘調査研究所編 1996
- (21) 高田恭一郎ほか「中島遺跡 宮南遺跡 国長遺跡 天神河原遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書221
岡山県教育委員会 2009
- (22) 16世紀後半以後と考えられる土坑3は、天正年間に行われた長床再建に関係する可能性もある。
- (23) 原 三正・多和和彦「郷内村文化財解説」郷内村史蹟保勝会 1953

出土遺物観察表

1. 土器観察表

番号	出土層位・遺構	種別	器種	法量(cm)	調整	色調	胎土中の砂粒	残存
						上段：外面 下段：内面		
2	ピット15	土師器	碗	口径 9.9 器高 3.0	ナデ・底部外面指頭圧痕 にぶい黄褐色 10YR6/4 にぶい黄褐色 10YR6/4	1mm大の石英 0.5~2mm大の赤色粒	1/2	
3	ピット15	土師器	碗	口径 10.1 器高 3.4	ナデ・底部外面指頭圧痕 褐色 10YR4/6 明黄褐色 10YR6/6	0.1~0.5mm大の長石・石英	1	
4	ピット15	土師器	碗	口径 10.3 器高 3.2	ナデ・ 底部外面指頭圧痕 褐色 10YR4/6 橙色 75YR6/6	1mm大の長石 1~1.5mm大の赤色粒	1	
5	ピット15	土師器	碗	口径 10.3 器高 3.2	ナデ・底部外面指頭圧痕 褐色 10YR5/6 明褐色 7.5YR5/6	0.5mm大の長石 0.5~3mm大の赤色粒	1	
6	ピット15	土師器	碗	口径 10.3 器高 3.1	にぶい黄褐色 10YR6/4 にぶい黄褐色 10YR6/4	0.5~1mm大の長石・石英 1mm大の赤色粒	9/10	
7	ピット15	土師器	碗	口径 10.3 器高 3.3	ナデ・底部外面指頭圧痕 にぶい黄褐色 10YR5/4 にぶい黄褐色 10YR6/4	0.5mm大の長石 0.5~1mm大の赤色粒	1/2	
8	ピット15	土師器	碗	口径 10.5 器高 3.0	ナデ・ 底部内外面指頭圧痕 褐色 7.5YR4/4 にぶい黄褐色 10YR6/4	0.1~1mm大の長石・石英 1mm大の赤色粒	1	
9	ピット15	土師器	碗	口径 10.5 器高 3.6	ナデ・底部外面指頭圧痕 褐色 7.5YR7/4	0.5mm大の赤色粒	2/3	
10	ピット15	土師器	碗	口径 10.9 器高 3.1	ナデ・ 底部内外面指頭圧痕 褐色 10YR5/4 にぶい黄褐色 10YR7/4	0.5mm大の長石・石英 0.5~1mm大の赤色粒	1	
11	ピット15	土師器	碗	口径 11.0 器高 (2.7)	ナデ・ 黃褐色 10YR5/4	0.5~1mm大の長石・石英 0.5~1mm大の赤色粒	1/3	
12	ピット15	土師器	碗	口径 11.9 器高 4.1	ナデ・底部外面指頭圧痕 にぶい黄褐色 10YR6/4 にぶい黄褐色 10YR6/4	0.5~2mm大の長石・石英 1mm大の赤色粒	1/2	
13	ピット16	土師器	碗	口径 10.3 器高 3.2	ナデ・底部外面指頭圧痕 褐色 7.5YR5/6 にぶい黄褐色 10YR6/4 にぶい黄褐色 10YR7/4	0.1~0.5mm大の長石・石英 0.5~1mm大の赤色粒	1	
14	ピット16	土師器	碗	口径 10.3 器高 3.1	ナデ・底部外面指頭圧痕 褐色 7.5YR5/6 にぶい黄褐色 10YR6/4 にぶい黄褐色 10YR6/4	0.1~0.5mm大の長石 0.5~1mm大の赤色粒	1/2	
15	ピット16	土師器	碗	口径 10.4 器高 3.5	ナデ・底部外面指頭圧痕 褐色 7.5YR6/6	0.5~1mm大の長石・石英 0.5~1mm大の赤色粒	1	
16	ピット16	土師器	碗	口径 10.4 器高 3.3	ナデ・底部外面指頭圧痕 褐色 10YR6/4 にぶい黄褐色 10YR6/4	1mm大の長石・石英 1mm大の赤色粒	1/3	
17	土坑2	磁器	碗	口径 (14.0) 器高 -	ナデ・ 色彩：淡紫色 地：青味がかった乳白色		1/6	
18	土坑2	土師器	小皿	口径 7.3 器高 1.7	ナデ・ 底部外面板状工具痕 にぶい橙色 75YR7/4	0.1~0.5mm大の赤色粒	1/2	
19	土坑3	土師器	小皿	口径 5.7 器高 1.5	ナデ・底部ヘラ切り？ 褐色 5YR6/6	0.5mm大の長石	3/4	
20	土坑3	土師器	小皿	口径 6.0 器高 1.2	ナデ・底部外面板状工具 痕後ナデ にぶい黄褐色 15YR8/3	1mm大の石英 0.5~1mm大の赤色粒	2/3	
21	土坑3	土師器	小皿	口径 5.9 器高 1.3	ナデ 浅黄褐色 75YR8/4	0.5~1mm大の長石・赤色粒	1	
22	土坑3	土師器	小皿	口径 6.0 器高 1.3	ナデ・底部ヘラ切り？ 褐色 5YR6/6	0.5mm大の長石	4/5	
23	土坑3	土師器	小皿	口径 6.2 器高 1.4	ナデ 浅黄褐色 75YR8/4	0.5~1mm大の長石	1	
24	土坑3	土師器	小皿	口径 6.2 器高 1.1	ナデ・ 底部外面板状工具痕 にぶい黄褐色 10YR7/4	0.5~1mm大の長石・石英・赤色粒	1	
25	土坑3	土師器	小皿	口径 6.2 器高 1.2	ナデ 褐色 7.5YR7/6	0.5~1mm大の長石・石英・赤色粒	1	
26	土坑3	土師器	小皿	口径 6.2 器高 1.2	ナデ・ 底部ヘラ切りナデ 褐色 5YR6/8	0.5mm大の長石	1/2	
27	土坑3	土師器	小皿	口径 6.2 器高 1.2	ナデ・ 底部ヘラ切り後ナデ 褐色 7.5YR7/6	0.5~1mm大の長石・赤色粒	1	
28	土坑3	土師器	小皿	口径 6.2 器高 1.3	ナデ 浅黄褐色 75YR8/6	0.5~1mm大の長石・赤色粒	1	
29	土坑3	土師器	小皿	口径 6.2 器高 1.5	ナデ・ 底部ヘラ切り後ナデ 褐色 7.5YR7/6	0.5mm大の長石	1	
30	土坑3	土師器	小皿	口径 6.3 器高 1.2	ナデ 褐色 7.5YR7/6	0.5mm大の石英・赤色粒	1	
31	土坑3	土師器	小皿	口径 6.4 器高 1.3	ナデ・底部外面板状工具 痕・底部内面指頭圧痕 褐色 5YR6/6	0.5~1mm大の長石・赤色粒	9/10	
32	土坑3	土師器	小皿	口径 6.4 器高 1.2	ナデ・ 底部ヘラ切り後 明黄褐色 10YR7/6	0.5mm大の長石・赤色粒	2/3	

() 内は復元値、土師器小皿の色調は内外の区別無し

番号	出土層位・遺構	種別	器種	法量(cm)	調整	色調 上段：外面 下段：内面	胎土中の砂粒	残存
33	土坑3	土師器	小皿	口径 6.8 器高 1.4	ナデ・ 底部ヘラ切り後ナデ	橙色 7.5YR7/6	0.5~1mmの大赤色粒	3/4
34	土坑3	土師器	小皿	口径 6.5 器高 1.1	ナデ・ 底部ヘラ切り後 板状工具痕	にぶい黄橙色 10YR7/4	0.5mmの大長石・赤色粒	3/4
35	土坑3	土師器	小皿	口径 6.6 器高 1.3	ナデ	灰白色 7.5YR8/2	0.5mmの大石英・赤色粒	1
36	土坑3	土師器	小皿	口径 6.6 器高 1.3	ナデ・底部ヘラ切り後 板状工具痕	橙色 7.5YR7/6	0.5mmの大長石・石英・赤色粒	1
37	土坑3	土師器	小皿	口径 6.6 器高 1.6	ナデ・底部ヘラ切り	浅黄橙色 7.5YR8/6	0.5~1mmの大石英・赤色粒	1
38	土坑3	土師器	小皿	口径 6.8 器高 1.3	ナデ・ 底部ヘラ切り後ナデ	にぶい橙色 7.5YR7/4	0.5~1mmの大石英・赤色粒	1/2
39	土坑3	土師器	小皿	口径 6.8 器高 1.4	ナデ・ 底部ヘラ切り後 板状工具痕	にぶい黄橙色 10YR6/3	0.5mmの大赤色粒	4/5
40	土坑3	土師器	小皿	口径 6.9 器高 1.8	ナデ・底部ヘラ切り後ナデ 底部内面指頭圧痕	橙色 7.5YR7/6	0.5~1mmの大長石・赤色粒	7/8
41	土坑3	土師器	小皿	口径 6.7 器高 1.2	ナデ・底部外表面板状工具 痕後ナデ	にぶい橙色 7.5YR7/4	0.1mmの大赤色粒	2/3
42	土坑3	土師器	小皿	口径 6.8 器高 1.4	ナデ・ 底部外表面板状工具痕	浅黄橙色 7.5YR8/3	0.5~1mmの大長石・石英・赤色粒	1
43	土坑3	土師器	小皿	口径 7.1 器高 1.4	ナデ	橙色 7.5YR7/6	0.5mmの大石英	1
44	土坑3	土師器	小皿	口径 7.1 器高 1.3	ナデ・底部ヘラ切り	橙色 7.5YR7/6	0.5mmの大石英・赤色粒	1
45	土坑3	土師器	小皿	口径 7.3 器高 1.5	ナデ	橙色 7.5YR7/6	0.5~1mmの大石英・赤色粒	1
46	土坑3	土師器	椀	口径 9.1 器高 2.6	ナデ	黄橙色 7.5YR7/8 にぶい橙色 7.5YR6/4	0.5mmの大石英	3/4
47	土坑3	土師器	椀	口径 9.6 器高 2.7	ナデ	にぶい橙色 7.5YR6/4 にぶい橙色 7.5YR6/4	0.1mmの大長石	4/5
48	土坑3	土師器	椀	口径 9.6 器高 2.6	ナデ	橙色 7.5YR7/6 橙色 7.5YR6/8	0.5~1mmの大長石・赤色粒	2/3
49	土坑3	青磁	椀	口径 - 高台径 6.6 器高 -	底部にヘラ切り痕	釉：緑灰色 地：浅黄橙色 10YR8/4		1/3
50	土坑3	土師器	鉢	口径 23.2 底径 14.8 器高 9.9	ナデ・内面ヨコハケ	黄灰色 2.5Y5/1 橙色 7.5Y6/6	1~2mmの大長石・石英	1/4
51	土坑3	縦器	皿	口径 12.2 高台径 7.0 器高 2.6		色彩：淡藍色 地：青味がかった乳白色		1/2
52	造成土(近世)	土師器	小皿	口径 5.8 器高 1.1	ナデ・ 底部ヘラ切り後ナデ	にぶい黄橙色 10YR7/3	0.5mmの大長石	1/3
53	造成土(近世)	土師器	小皿	口径 6.1 器高 1.2	ナデ・ 底部ヘラ切り後ナデ	浅黄橙色 10YR8/4	0.5mmの大長石 1mmの大石英	1/3
54	造成土(近世)	土師器	小皿	口径 6.3 器高 1.3	ナデ・ 底部ヘラ切り後ナデ	浅黄橙色 10YR8/3	0.5~1mmの大長石・石英	1
55	造成土(近世)	土師器	小皿	口径 6.5 器高 1.0	ナデ・ 底部ヘラ切り後ナデ	浅黄橙色 10YR8/3	0.5mmの大長石 1mmの大石英	1/3
56	造成土(近世)	土師器	小皿	口径 6.5 器高 1.0	ナデ・ 底部ヘラ切り後ナデ	浅黄橙色 10YR8/3	0.5mmの大長石・石英	1/2
57	造成土(近世)	土師器	小皿	口径 6.6 器高 1.5	ナデ・ 底部外表面板状工具痕	にぶい黄橙色 10YR7/4	0.5mmの大長石	1
58	造成土(近世)	土師器	小皿	口径 6.6 器高 1.3	ナデ・ 底部ヘラ切り	明黄橙色 10YR7/6	0.1~0.5mmの大長石	1/3
59	造成土(近世)	土師器	小皿	口径 6.8 器高 1.0	ナデ・ 底部ヘラ切り後ナデ	にぶい黄橙色 10YR7/4	0.1~1mmの大長石	1/2
60	造成土(近世)	土師器	椀	口径 8.4 器高 1.8	ナデ	にぶい黄橙色 10YR7/4 にぶい黄橙色 10YR7/4	1mmの大石英・赤色粒	1
61	造成土(近世)	土師器	椀	口径 8.6 器高 2.1	ナデ・ 底部外表面指頭圧痕?	橙色 7.5YR6/6 橙色 7.5YR6/6	2mmの大石英	1
62	造成土(近世)	土師器	椀	口径 8.7 器高 2.0	ナデ?	橙色 7.5YR6/6 橙色 7.5YR6/6		1
63	造成土(近世)	土師器	椀	口径 8.8 器高 2.0	ナデ	橙色 7.5YR6/6 橙色 7.5YR6/6	0.5mmの大石英・赤色粒	1
64	造成土(近世)	土師器	椀	口径 8.6 器高 2.3	ナデ	橙色 7.5YR6/6 橙色 7.5YR6/6	0.5mmの大長石	1

()内は復元値・土師器小皿の色調は内外の区別無し

番号	出土層位・遺構	種別	器種	法量(cm)	調整	色調		胎土中の砂粒	残存
						上段：外面	下段：里面		
65	造成土(近世)	土師器	碗	口径 9.2 器高 2.6	ナデ・底部外面指頭圧痕	にぶい褐色 7.5YR7/4 にぶい褐色 7.5YR7/4		0.5mm大の長石・赤色粒	1
66	造成土(近世)	土師器	碗	口径 9.5 器高 2.3	ナデ・底部外面指頭圧痕	浅黄褐色 10YR8/4 浅黄褐色 10YR8/4		0.5~1mm大の長石・石英・赤色粒	1/8
67	造成土(近世)	土師器	碗	口径 9.5 器高 2.4	ナデ・底部外面指頭圧痕	にぶい黄褐色 10YR6/4 にぶい黄褐色 10YR6/4		0.5~1mm大の長石・赤色粒	2/3
68	造成土(近世)	土師器	碗	口径 10.4 器高 2.5	ナデ・底部外面指頭圧痕	にぶい黄褐色 10YR7/4 にぶい黄褐色 10YR7/4		0.5~1mm大の長石	1/2
69	造成土(近世)	土師器	碗	口径 10.7 器高 2.9	ナデ・底部外面指頭圧痕	にぶい黄褐色 10YR6/3 にぶい黄褐色 10YR6/4		0.5mm大の長石・石英・赤色粒	1/3
70	造成土(近世)	土師器	碗	口径 (10.9) 器高 3.3	ナデ	にぶい黄褐色 10YR7/4 にぶい黄褐色 10YR7/4		0.5mm大の長石	1/4
71	造成土(近世)	瓦質土器	香炉	口径 12.3 器高 (4.7)	ナデ・底部外面上部に雷文・下部に割削要	暗褐色 N3/ 暗灰色 N3/		0.5mm大の長石・石英	1/6
77	造成土(中世)	土師器	碗	口径 10.9 高台径 33 器高 3.2	ナデ・外面下部指頭圧痕	浅黄褐色 10YR8/4 浅黄褐色 10YR8/4		0.5mm大の石英	1
78	造成土(中世)	土師器	碗	口径 11.2 高台径 4.6 器高 3.4	ナデ	にぶい黄褐色 10YR7/4 にぶい黄褐色 10YR6/4		1mm大の長石・石英 0.5~1mm大の赤色粒	1
79	造成土(中世)	土師器	碗	口径 11.3 高台径 4.1 器高 3.2	ナデ	灰白色 2.5Y8/2 灰白色 2.5Y8/1		0.5~1mm大の石英	1/3
80	造成土(中世)	土師器	碗	口径 11.2 高台径 5.3 器高 3.3	ナデ	灰白色 10YR8/2 浅黄褐色 10YR8/3		1mm大の長石・石英	1

()内は復元値、土師器小皿の色調は内外の区別無し

2. 瓦觀察表

番号	出土層位・遺構	種別	文様	法量(cm)	色調	胎土			備考
						上面構造	生地	胎土中の砂粒	
1	ビット13	軒丸瓦	右巻三巴	文様区径 11.0	黄灰色 25Y5/1 にぶい褐色 7.5Y6/3	表	織	0.1~5mm大の長石	
72	造成土(近世)	軒平瓦	宝珠(緯)	文様区厚 3.2	灰色 7.5Y6/1 灰色 N5/	三	微	0.5~1mm大の長石	額部に画取
73	造成土(近世)	軒平瓦	珠文	瓦当厚 4.7 文様区厚 2.3 瓦足厚 2.0	橙色 7.5Y6/6 橙色 7.5Y6/6	単	織	石英	平瓦部凹面に布目
74	造成土(近世)	軒平瓦	唐草	瓦当厚 (5.3) 文様区厚 3.1	灰色 N4/ 灰色 N6/	三	微	石英	平瓦部凹面にガーデ状布目
75	造成土(近世)	軒丸瓦	菊花	外形 15.0 文様区径 10.0	暗褐色 N3/ 灰白色 N7/	表	織	0.5~2mm大の長石	横瓦
76	造成土(近世)	鬼板瓦	左巻三巴	板厚 3.6 文様区径 11.2 バ径 8.7	灰色 N6/ 灰色 N5/	表・流	織	石英	周囲 ヘラ切り 裏面 ナデ

凡例 法量は計測可能なものの記載、()内は復元値。断面構造は、單一色調のものは「単」、器面側に薄く異色層をなすものを「表」、芯部に対し器面層側も一定の厚みを持つ三層構造を「三」とした。また、異なる性質・発色の胎土が細かな波状の輪模様をなすものを「流」とした。胎土生地の粒子の大きさは、「微」「織」「ナデ」で示した。(参考: 乗岡実編『史跡岡山城跡本丸中の發掘調査報告』岡山市教育委員会 1997)

3. 鉄釘計測表

番号	出土層位・遺構	法量(cm)	備考
M2	ビット12	長 (3.9)	
M3	ビット12	長 (3.2)	
M4	ビット13	長 (4.1)	カスガイか?
M5	土焼1	長 (8.4)	
M7	土焼3	長 (6.6)	
M9	造成土(近世)	長 (8.0)	
M10	造成土(近世)	長 (7.4)	
M11	造成土(近世)	長 (5.1)	
M12	造成土(近世)	長 (5.9)	
M13	造成土(近世)	長 (6.0)	

()内は残存値

図 版



1 調査風景（北から）



2 貝層断面（南から）

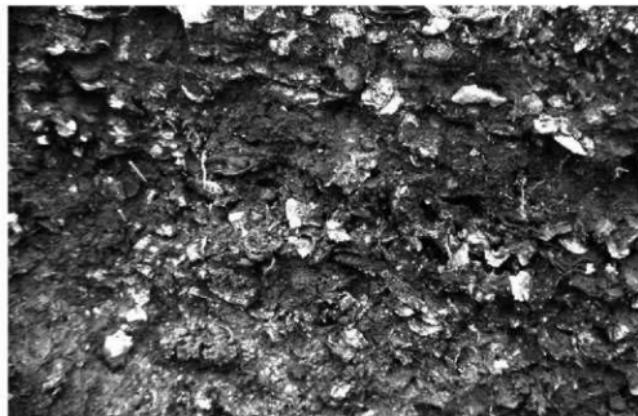


3 貝層断面（北から）

図版2 磯の森貝塚



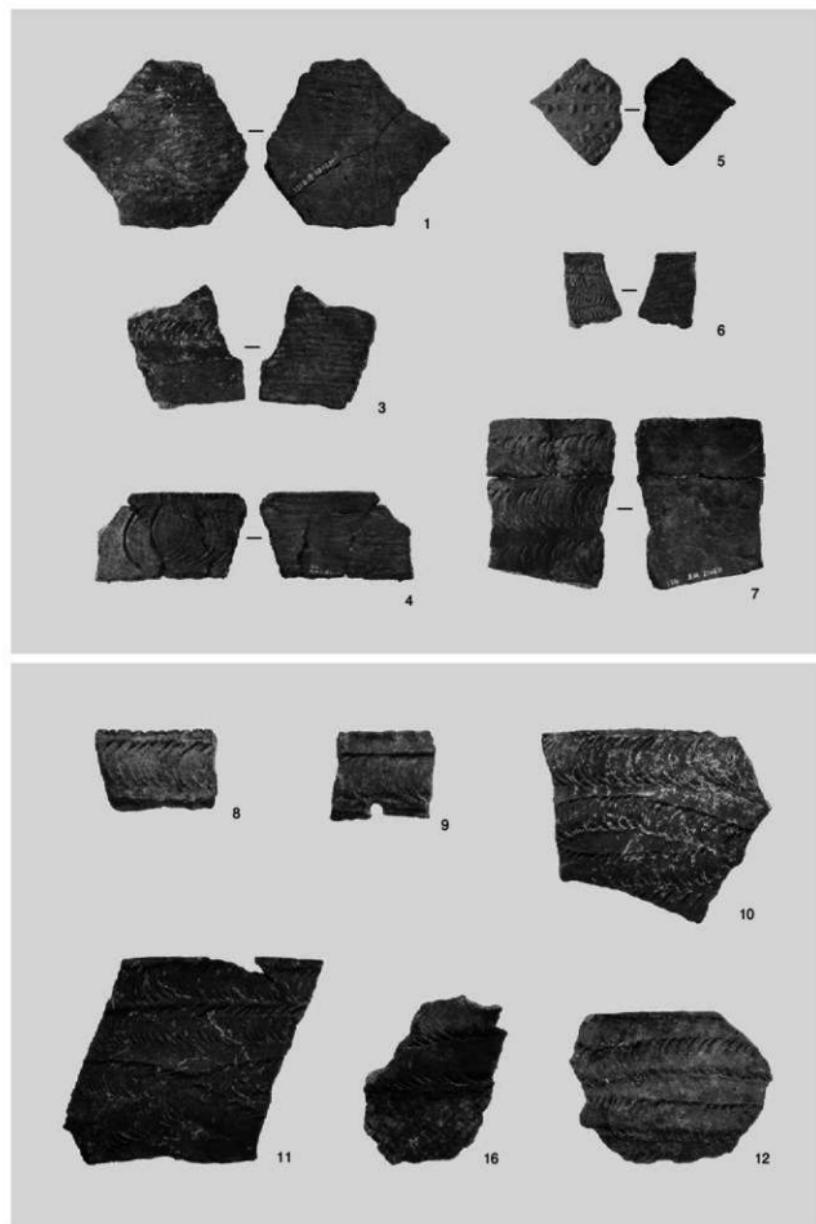
1 貝層断面（南東から）



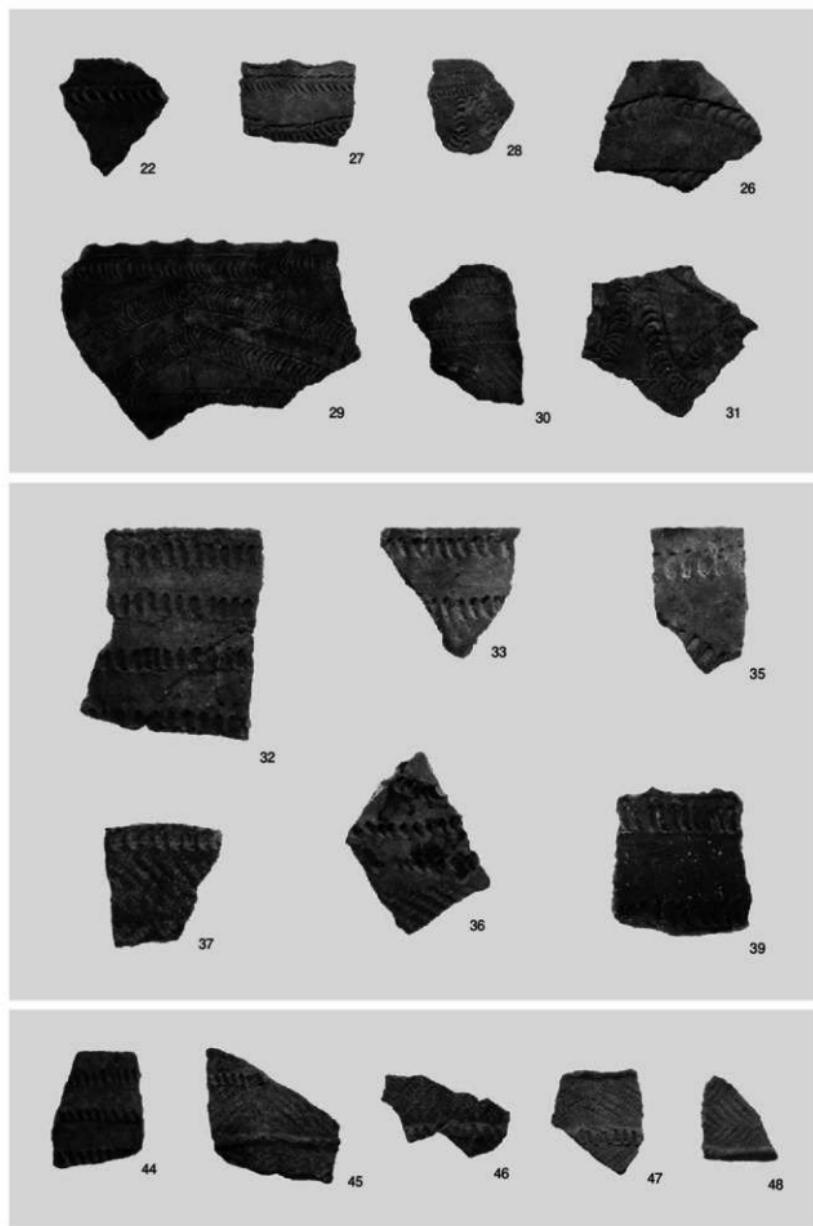
2 貝層拡大

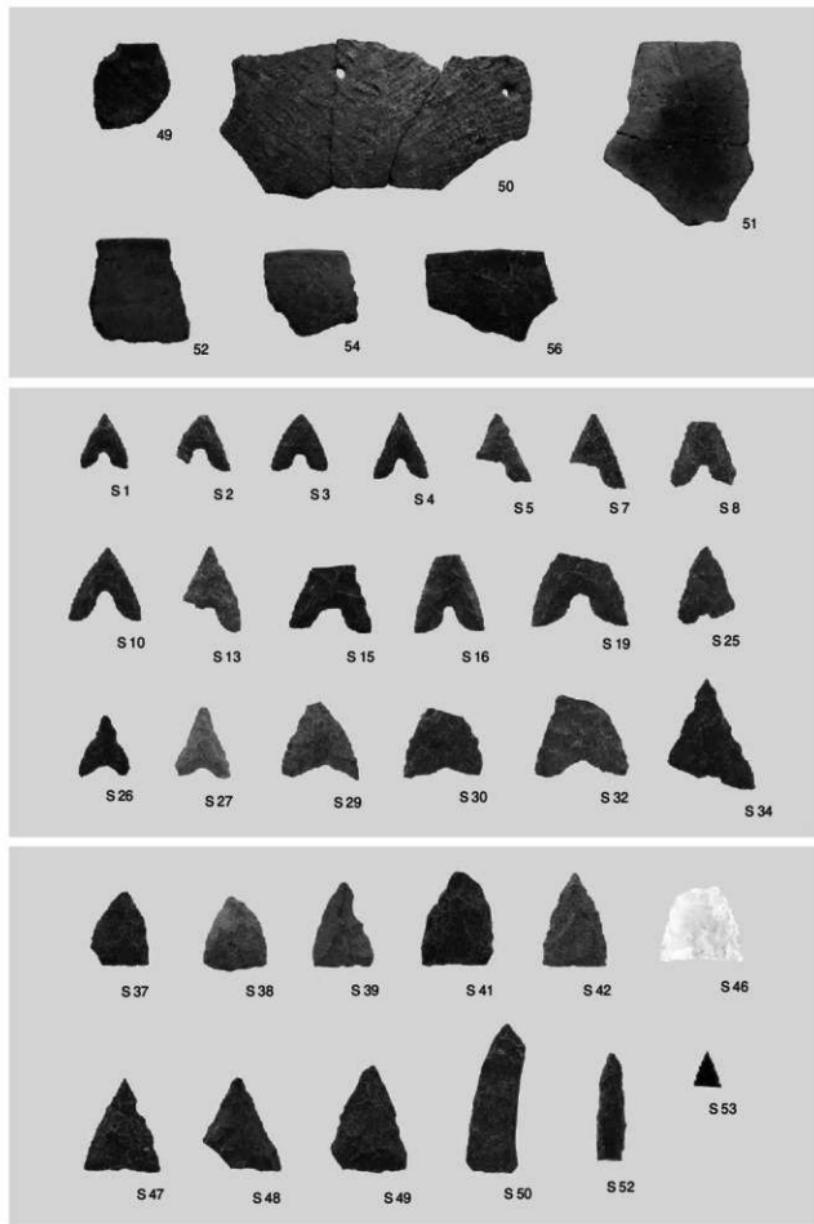


3 土器出土状況

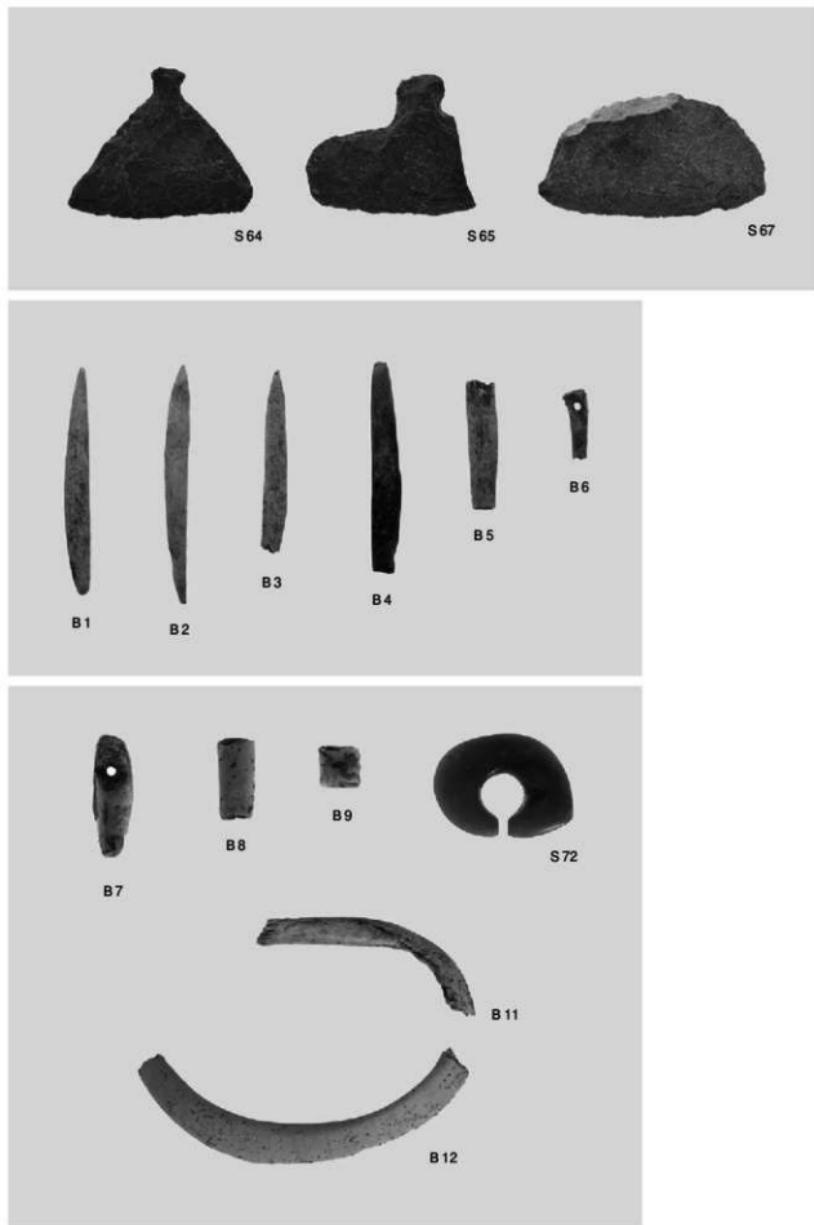


図版 4 磯の森貝塚 出土遺物（2）





図版6 磯の森貝塚 出土遺物(4)





1 包含層断面



2 作業風景



3 完掘状況

図版 8 広江・浜遺跡 北区



1 堪穴状遺構断面



2 堪穴状遺構(東から)



3 堪穴状遺構(北東から)

1 南壁断面



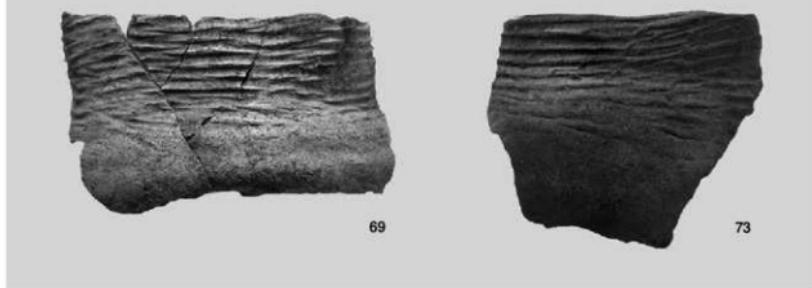
2 西壁断面



3 北壁断面

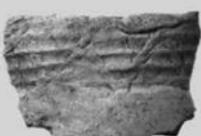


図版 10 広江・浜遺跡 出土遺物(1)





74



76



80



84



85



87



81



95

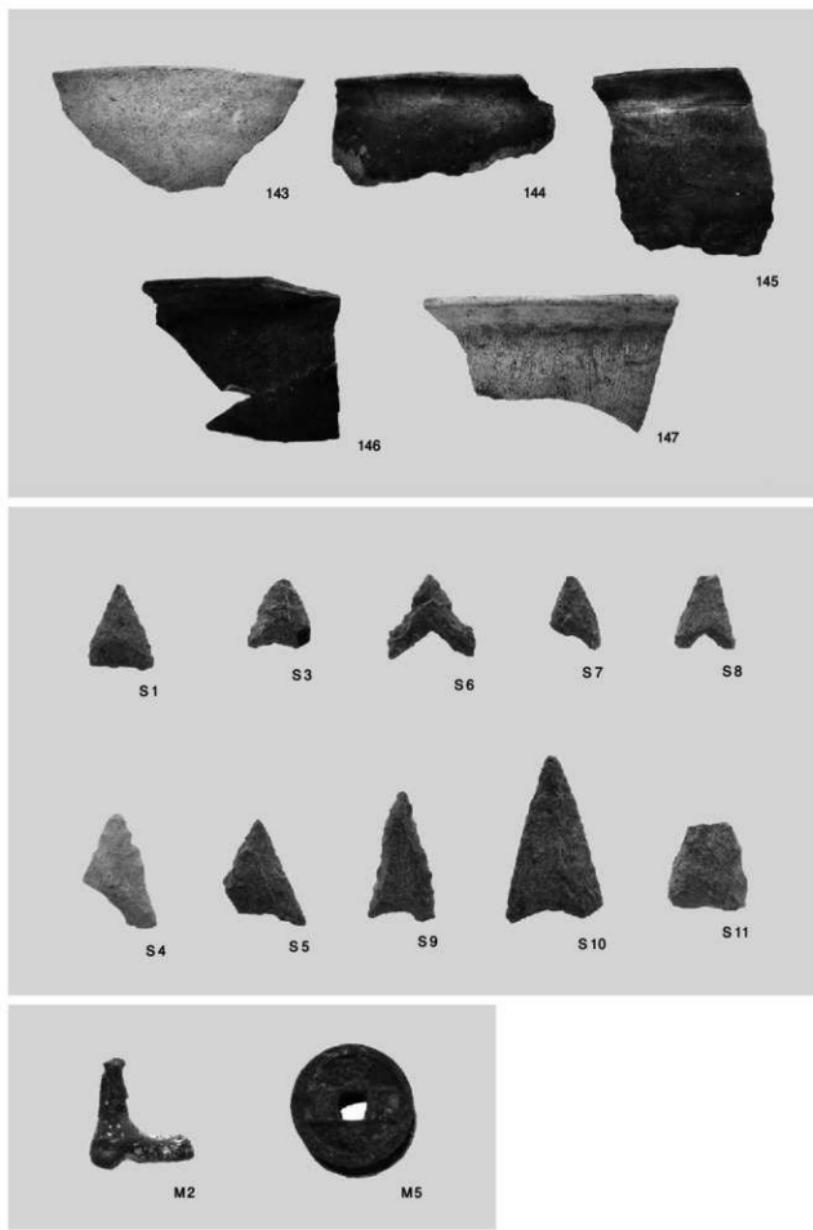


97



108

図版 12 広江・浜遺跡 出土遺物 (3)



1 調査風景(東から)



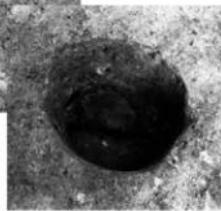
2 ピット1~3(南から)



3 ピット15・16
土器出土状況(南から)



図版 14 新熊野山遺跡



1 ピット 26
左：断面
右：完掘状況



2 土坑1(東から)



3 土坑2断面(東から)

1 土坑3
遺物出土状況



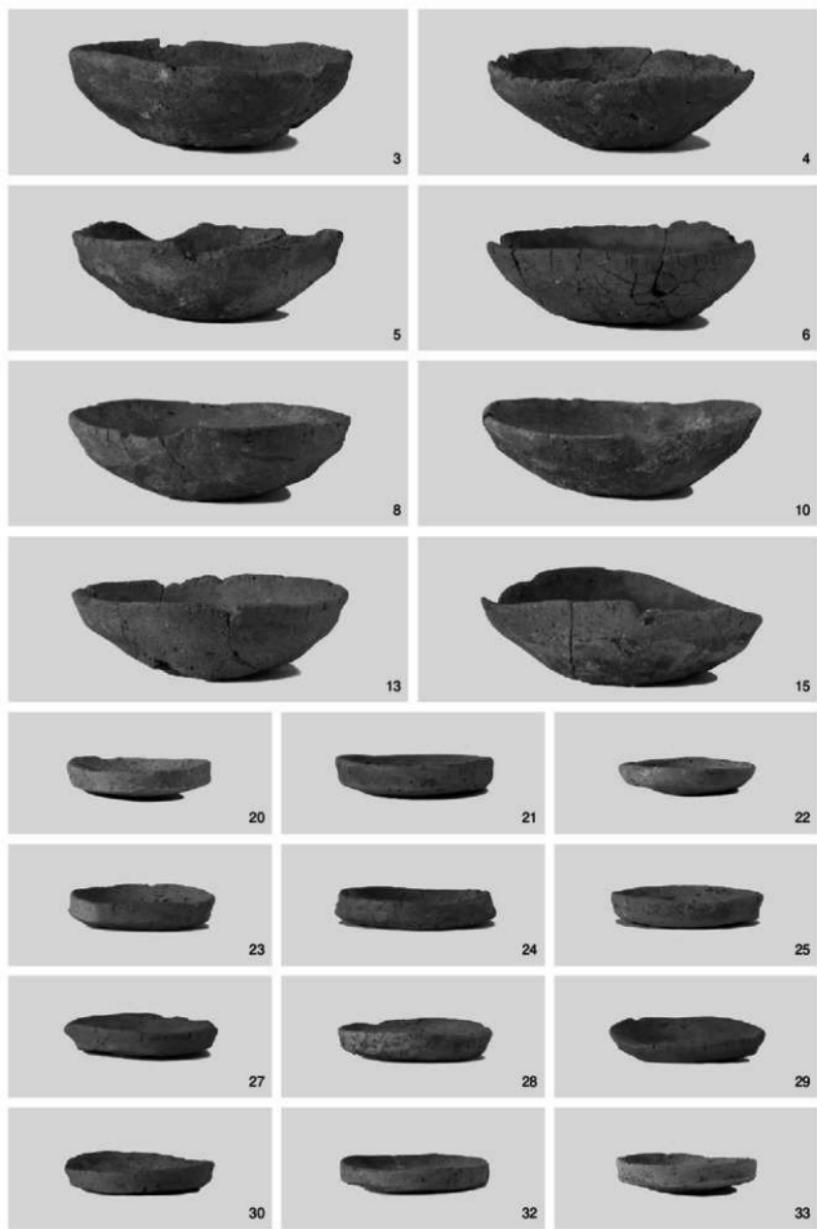
2 土坑3断面

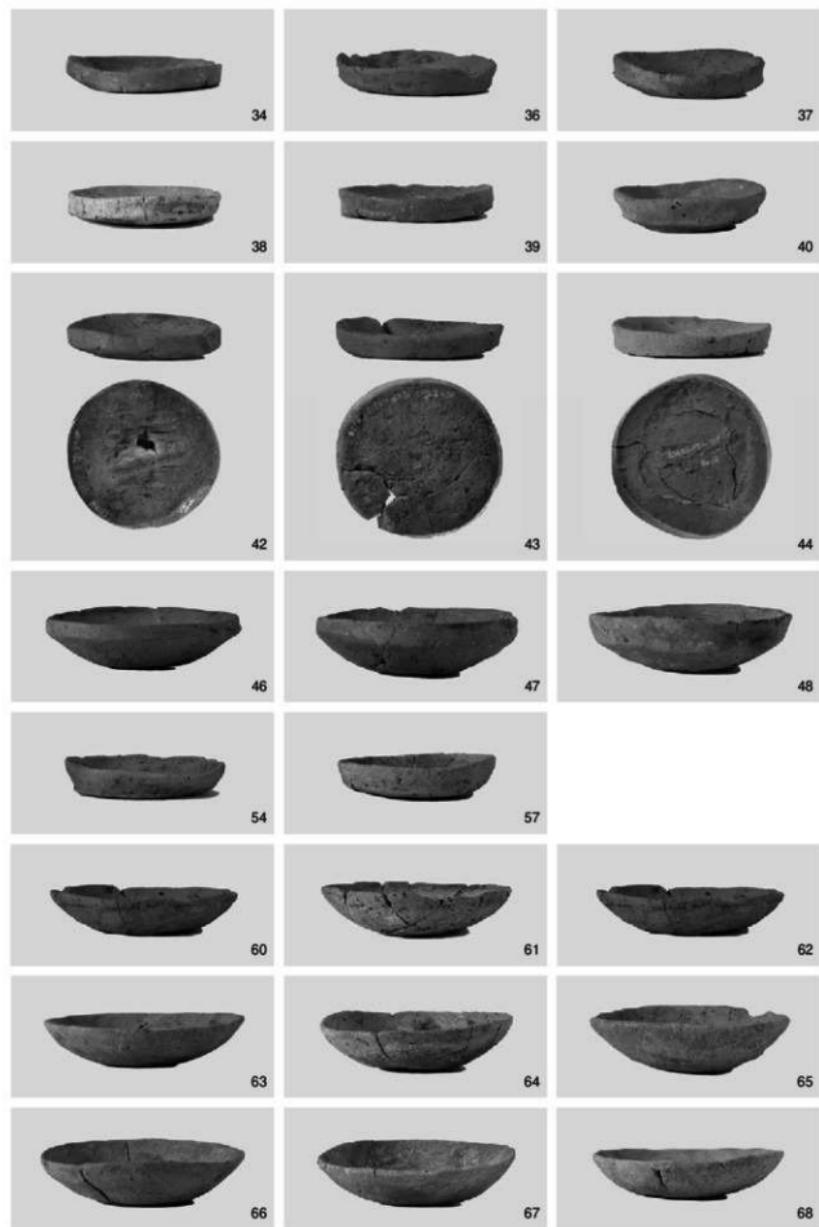


3 調査区全景(西から)

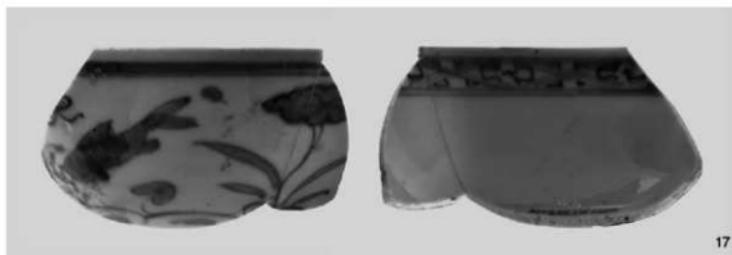


図版 16 新熊野山遺跡 出土遺物(1)

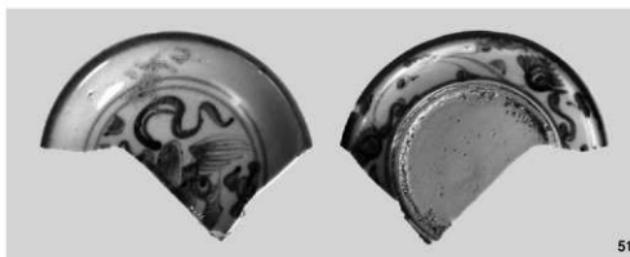




図版 18 新熊野山遺跡 出土遺物 (3)



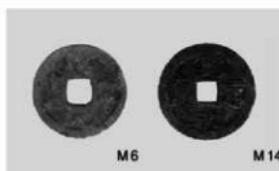
17



51



76



M6

M14



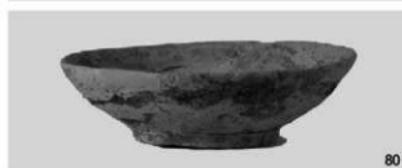
77



78



79



80

報告書抄録

ふりがな	いそのもりからづか ひろえ・はまいせき	しんくまのさんいせき
書名	磯の森貝塚 広江・浜遺跡 2 新熊野山遺跡	
副書名		
卷次		
シリーズ名	倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告	
シリーズ番号	第17集	
編著者名	小野雅明・藤原好二	
編集機関	倉敷埋蔵文化財センター	
所在地	〒712-8046 岡山県倉敷市福田町古新田940番地	TEL.086-454-0600
発行年月日	平成31年3月31日	

ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	°	'			
いそのもりからづか 磯の森貝塚	おかやまけんくらしまし 岡山県倉敷市 つぶと 粒江	33202	13-021	34° 33' 31"	133° 48' 05"	19820820 ~ 19820825	38 m ²	市道改修工事
ひろえ・はま 広江・浜 いせき 遺跡	おかやまけんくらしまし 岡山県倉敷市 ひろえいせき 広江一丁目	33202	05-001	34° 31' 12"	133° 46' 29"	20100810 ~ 20100907	80 m ²	体育館耐震化工事
しんくまのさん 新熊野山 いせき 遺跡	おかやまけんくらしまし 岡山県倉敷市 ほめし 林	33202	18-059	34° 32' 23"	133° 49' 10"	20110304 ~ 20110318	187 m ²	防火水槽設置工事
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
磯の森貝塚	貝塚	縄文	貝層	縄文土器 石錐・石匙 骨角器・块状耳飾				
広江・浜遺跡	集落跡・ 製塙	縄文～中世	竪穴状遺構	縄文土器・須恵器 製塙土器・石錐				
新熊野山遺跡	散布地	中世	ピット・地鎮遺構・土坑	中世土器・輸入磁器・銅錢		地鎮遺構		

印刷仕様

紙 質 表紙：サンマット 160kg (PP 張り)
本文：書籍用紙 65kg
図版：マットアート 110kg

編 集 Mac OS 10.9.5 Adobe InDesign CS6
Adobe Photoshop CS6

使用フォント モリサワ OpenType フォント
(リュウミン L-KL・中ゴシック BBB・太ミン A101・
太ゴ B101・見出ゴ MB31)

製 本 無線綴じ

倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告 第17集
磯の森貝塚 広江・浜遺跡2 新熊野山遺跡

平成31年3月31日印刷発行

発 行 倉敷市教育委員会

編 集 倉敷埋蔵文化財センター

〒712-8046 倉敷市福田町古新田940番地

Tel.086-454-0600

The Excavation Report
Of
Isonomori Shell Mound Hiroe-hama Site 2
Sinkumanosan Site

Volume 17

Kurashiki
Archaeological Center

March 2019